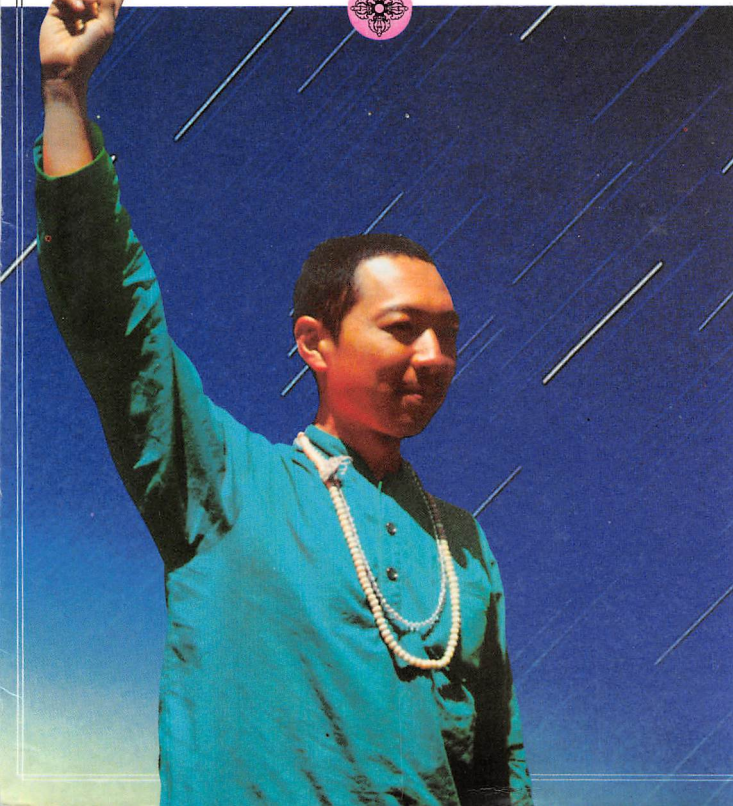
# 巨聖逝く

## 悲劇の天才科学者 村井秀夫



# 巨聖逝く

## 悲劇の天才科学者 村井秀夫

# プロローグ

## マンジュシュリー・ミトラに対する心の供養

通常の治療を終え、身体を休め、瞑想していると、突然、「マンジュシュリー・ミトラが刺された」という報告が飛び込んできた。

わたしはその状態を聞いて、即、深い瞑想に入った。するとイダー、ピンガラ、スシュムナーのアナハタ・チャクラまでのチャクラが激しく振動しているのである。わたしは今まで多くの経験をしたが、瞑想においてこのような経験は初めてだった。そしてわたしの体からエネルギーがマンジュシュリー・ミトラに流れていくことがわかった。

わたしは瞑想を続けた。そして、ある段階に入ったとき、そのチャクラの振動が終

わり、そしてアストラル空間にライオンの吠えるようなものすごく大きな「ゴォーッ」というような音が何度も響いたのである。わたしは座ることができなくなり、完全にエネルギーが消耗し、そして横になった。

横になりながらマンジュシュリー・ミトラに精神を集中し、シヴァ大神と会話を交わした。「シヴァ大神様、マンジュシュリー・ミトラは助かるでしょうか」。シヴァ大神は「ダメだ」という声をわたしにかけられた。わたしはそれを三度行ない、わたしの天耳が間違ってはいけないので、次はヴィシュヌ大神に問いかけた。「ヴィシュヌ大神様、マンジュシュリー・ミトラは大丈夫でしょうか」と。同じようにヴィシュヌ大神も「マンジュシュリーは死ぬ。ダメだ」という言葉をわたしに返してこられた。わたしはマンジュシュリー・ミトラを何とか助けたい、それを思念し続けたが、治療が始まると同時にマンジュシュリー・ミトラの生命が終わりを告げることは確定したようである。

わたしは深い深い瞑想に入った。

わたしのお世話をしている某氏は、わたしの目の周りが完全に上下とも隈になり、そして死んだような顔をしていると表現し、マンジュシュリーが完全に死を宣告されたのち、わたしの呼吸も停止し、わたしはマンジュシュリー・ミトラに対して、バルドのコントロールを行なった。なぜならば、普通、このような急激な死に際しては、そののちポワの瞑想が長く適用されなければならないからである。しかし、おそらく今の国家のあり方からみると、マンジュシュリー・ミトラの肉体は切り刻まれ、そして両親に引き取られ、一般の葬式がなされることを予知していたわたしは、マンジュシュリーが死を宣告されたのち、できるだけ早い状態で、マンジュシュリーの意識を切り離してあげるしかないと考えたのである。

さすがの聖者マンジュシュリーも、今生初めての経験である死について戸惑ったようである。そして、人間界のバルドと立ち現われる神々のバルドとその意味についてしばらく理解できなかったようである。わたしは何度も何度もマンジュシュリーと会話をした。「さあ、このバルドが人間のバルドだよ。このバルドを捨断しなさ

い。このバルドの背景にあるものは心の妥協と、そして愛著なんだよ」と。彼にその話をすると、彼のバルドは黄緑から白に変わる。「そうだ、マンジュシュリー、君はもうすべての人間としてのカルマから解放されたんだ。さあ、これからしっかり、愛欲の天界の世界へ行き、偉大なグルたちの教えを実践し、幸福な生活をしなさい」。これを何度も何度も繰り返したものである。しかし、またしばらくすると黄緑の空間に覆われる。するとわたしはまた彼に説明をする。そして完全なるかたちでのポワが成功したのは午前六時であった。しかし、そののちもまだマンジュシュリーの意識は混沌としたり、鮮明となったり、両方が繰り返されるので、意識が混沌となったときのみ、わたしは彼に対してコントロールを行ない、そして二十五日の夕方、やっと彼は完全な解放を得、そして天での享楽を経験する状態へと至ったのである。

弟子たちよ、人は死ぬものである。今回一部のマスコミが、マンジュシュリー・ミトラを教団が殺したとか、ひどい誹謗中傷を行なっているが、彼らの悪口に怒り

を放ってはならない。あくまでも哀れみの瞑想を行ない、彼らが未来際において、真に解放されることを祈ろうではないか。そして、それのみがマンジュシュリー・ミトラに対するわたしたちの心の供養である。いいね。

一九九五年四月二十五日

真理の御魂（みたま）　最聖　麻原彰晃尊師

# 巨聖逝く

## ——悲劇の天才科学者、村井秀夫

C O N T E N T S


プロローグ　マンジュシュリー・ミトラに対する心の供養　1

第一章 ❖ 聖者への道 ——グル・修行・ワーク、そして成長——　9

集中セミナーに参加して——真理との出会い　11

マンジュシュリー・ミトラ大師成就す！
——限りない真理の世界へ、そして今、出発点に立つ……　17

神々の時代の幕開け——マハー・ムドラー、その成就の素晴らしさ　57

限りないグルの愛に支えられて——たどり着いた「阿羅漢」の境地　90

大乗の入り口に立って——智慧は四無量心の現われだった　95

第二章 ❖ グルと弟子——偉大なるグルの肖像　99

偉大なる救済者、尊師――グルを語る 101

第三章 ❖ 超人類の証――修行がもたらす神秘の力 115

変幻自在の世界――瞑想で訪れた愛欲の天界 117

阿修羅の世界の発明家――人間界より一つ上位の闘争の世界 131

時空を超えて聞こえる神々の声――アンダーグラウンド・サマディの神秘 142

進化――人を超越していく道 162

第四章 ❖ 悲劇の天才科学者――真理を科学する 175

宗教と科学の接点――オウム真理教が科学する理由 177

真理を科学する 188

エピローグ 巨聖逝く 256

――科学者である以前に偉大な聖者だった、マンジュシュリー・ミトラ正大師の最期

カセット・テープ内容のご紹介 273

# 第一章 聖者への道

## ――グル・修行・ワーク、そして成長――

大学での研究にも、企業でのプロジェクトにも、結婚を含めた家庭生活にも、生き甲斐を見いだせなかった……。そしてこのまま死んでいくのが見えてきたわたしは、修行に入って初めて人生の目的を知り、煩悩の減少に伴って悩みが少なくなり、各段階のヨーガを成就するごとに苦しみが滅尽し智慧が向上したことを思い出します。

（一九九四年十二月十八日　オウム真理教ラジオ放送「エウアンゲリオン・テス・バシレイアス」にて）

# 集中セミナーに参加して

## ――真理との出会い

村井秀夫（二十八歳・元会社員）

### ◎何か満たされない

わたしは二十八歳の会社員です。平凡な人生を送っていたわたしがこのセミナーでどんなに変わったかをお話ししたいと思います。

ある鉄鋼メーカーの研究所で金属加工の研究に携わっていたわたしはそれなりに充実した生活を送っていました。科学技術の進歩を通して人類の幸福に貢献していると思っていました。しかし何か満たされないものを感じ、仙道、ヨーガ、気功法など自己流の修行を行ないながらグルに出会うことを望んでいました。

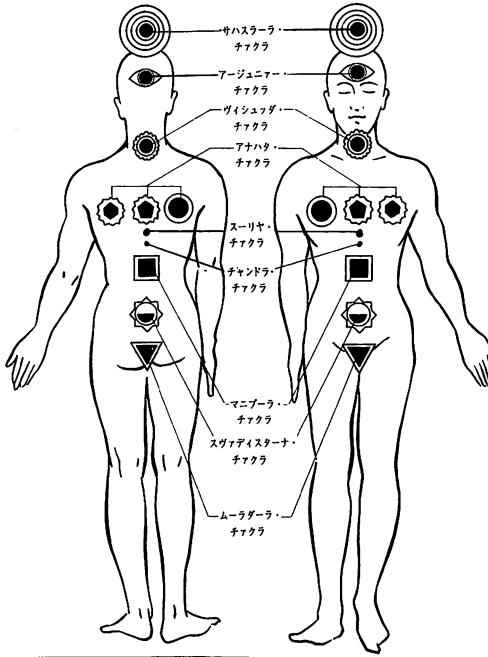
そして麻原先生の著作三冊と巡り合ったのです。大阪支部で大内さんの話を聞い

てますます感銘を深め、その場でオウムの入会とセミナー全日程の参加を申し込みました。今年の四月十九日のことです。帰り道では仕事をやめて修行生活に入ることばかり考えていました。

翌日辞表を出したのですが、上司や両親に猛反対されたり泣かれたりして少し決意がぐらつきました。そこでオウムの修行に人生をかける価値があるかどうか、先生に直接会って見極めるのを目的にセミナーに参加したのです。

## ◎マニプーラまで使える

修行は苦しく、ついていくのがやっとでした。それでもクンバカ※中にシーン・シーンという音が、しだいに大きくなるなど今までにない手ごたえを感じました。体が慣れ始めると、瞑想もかなり楽にできました。特に道場いっぱいに大きな蓮華とシヴァ大神を観想したとき、どういうわけか楽しさがこみ上げて笑いそうになりました。このとき、尾てい骨を伝わって頭までガスのようなものがビクビクと何度も上昇したので、クンダリニーの一種かと喜びました。時々体が硬直し、強い快感を感




―チャクラ―

チャクラとは、人間の身体にある霊的なセンターで、主なものは7種である。しかし、普通の人はそれが眠った状態で働いていない。霊的エネルギー、クンダリニーが覚醒すると、そのエネルギーをもってチャクラが開いていくのである。また、チャクラは、身体の下部に位置するものに比べ、上部へいくほど次元が高くなっていく。

**チャクラ図**

じました。瞑想の最終段階で麻原先生がわたしの中に入ってくださったようで、その後はいつでも、にこやかに笑っている先生の姿をはっきり見られるようになりました。そして、心が静かに落ち着いて生まれ変わったように感じました。

シャクティーパットもしていただきました。六日間の体験でかなり高いレベルにいる自信があったのに、初めてということもあって体の震えが止まりませんでした。開始後しばらくして何か熱いものが尾てい骨から背中まで上がり、終了後も全身がしびれてしばらく起き上がれませんでした。先生は、

「覚醒した。マニプーラまで使える。」

とおっしゃいましたが、頭まで上がっていると思っていたわたしは少し不満で問い返しました。先日のガスのようなものはクンダリニーではなくアパーナ気だったのです。わたしは未熟さを恥じると共に、一生懸命修行して自分なりのペースで解脱を目指そうと決意しました。あとで見ると額が逆三角形に腫れ上がっていました。

## ◎オウムにかける

先に述べたように仕事をやめるべきか悩んでいたわたしは、先生や大内さんら弟子の方たちにずいぶん相談に乗っていただきました。両親の反対の原因と対策、子供をつくるべきか否か、修行のためどこに住むのがよいか、サンガとは何か、夫婦で修行できる幸せなどについて教えていただきました。

その結果、会社をやめて東京へ移り、バイトをしながら修行に励むことを決意し、セミナー終了の翌日、世田谷区内にアパートを借りました。五月中は会社で残務処理をしながら、修行生活と人生の意義について身近な人に説明しており、これも法施のうちかな、などと思っています。

最後に結論として全日程参加のメリットを列挙します。

・セミナーにいるだけで心身が浄化され、長ければ長いほど効果が大きい。
・同じ行法でもセミナー中の方がずっと効果が大きいし、安心してめいっぱい頑張れる。

・体や心の変化はゆるやかなので、二、三日では不十分。わたしの場合五日目から落ち着きが出てきた。
・バクティの機会が多くなる。
・説法に聞きもらしがないので、しだいに意味もよくわかってくる。
・シャクティーパットで先生にかかる悪影響が軽くなる。

このような素晴らしい会に巡り合え、夫婦でセミナーに参加できる幸せをかみしめながら、今後も修行に励みたいと思います。合掌(がっしょう)。

(『マハーヤーナ』No.1 一九八七年文月号 オウム出版 所収)

# マンジュシュリー・ミトラ大師成就す！

## ――限りない真理の世界へ、そして今、出発点に立つ……

### クンダリニー・ヨーガ成就体験談

マンジュシュリー・ミトラ大師（本名　村井秀夫さん　三十歳）のクンダリニー・ヨーガ成就――それは、オウム真理教に確実な進歩をもたらすことだろう。

科学班のころから中心的役割を果たし、現在、オウム真理教になくてはならないCSI（コスミック・サイエンス・インスティテュート）を率いてきた人。数々のイニシエーション（プルシャ型たまて箱、アストラル・テレポーター等）、大宇宙占星学、そしてアストラル食の開発など、大師のなしてきた仕事の数々は、既成の宗教観を打ち破る「真理の宗教」としてのオウム真理教を如実に語るものであった。

真理の科学、それは言い換えるならば「究極の科学」でもある。大師はある種の

興奮と喜びをもってそれに取り組み、作り、実験を繰り返し、完成させてきた。しかし大師は言う。「わたしは尊師から与えられた宝の山の、四分の一も五分の一もできていない」と。

大師の成就にかけた情熱は、その宝の山を少しでも多く実現させたい、そして多くの魂が高い世界に行けるような環境を作りたいという願いから生じていた。

成就を果たした今、大師の頭の中にはどんな夢が描かれているのだろうか。忙しい研究の合間をぬってお話を伺った。

**◎超人願望みたいなものがあって……**

**編集部**　小さなころから精神世界に対する興味はあったんですか。

**マンジュシュリー・ミトラ**　精神世界というか、テレビの影響なんですけれども、超能力とかありますでしょう、ああいうのが自分にないはずがないという妙な観念があったんですよ、小学校のころから。ところが、実際にはできないと。例えば、カードを裏返ししても見えないし、念力も働かないし。そのころはいろいろ試行錯

誤しましたね。

友達も少なかったですね。内向的な子供でしたから。人前で話せないんですよ、ドキドキして。あがり性で。しかし、体は丈夫でした。病気しないんですよ。入院とかもないし、手術もないし。そういう子供時代でしたね。

そのころから理科的なことには全部興味があって、一人でやってましたね。しかし、やはり長ずるにおよんで、このままでいいのだろうかという疑問が頭をかすめました。それで、元からあった超人願望みたいなものが、かなり露骨に出てきましてね。それで、仙道とかヨーガとか、そういうのを本で読んで何とかトレーニングしようと。

もう、大学になってからははっきりしてましたね。奥義みたいなものは読んでいないんですけどね。ただ、ヨーガの本は綺麗な女の人がやっているのじゃなくて、インド人のおっちゃんがやっているようなのを捜し出してきて。で、大学の書庫に入ってね、『ヨーガ・スートラ』を見つけてきて一生懸命読んだり、——そういうことをしましたね。

※大学では物理を専攻されていた大師だが、次第に大学での研究の狭さ、そして一生を懸けてすることのできる仕事の量の少なさなどに一種の虚無感を感じ始めていた。卒業後、幅広い技術を求めて就職した会社も大師の理想とは掛け離れており、利潤追求に終始していた。そんな中で大師は、だんだんと仕事に飽きていく自分を感じていた。

### ◎そして、オウムとの出会い

**編集部**　それまでに神秘体験はあったんですか。

**マンジュシュリー・ミトラ**　夢見はたくさんあったんですよ。でも、それは当たり前のことと思ってましたからね。他の人の夢がどうかとかあまり興味なかったですね。もともとリアルだったんですよね。

夢ではもう、完全に超能力者でした。こう、念じれば動くとかね。あと、手を伸ばせば飛んでいくとか、そういうのは当たり前の現象でしたね。

それで、そのころから朝はヨーガを一生懸命やっていました。

**編集部**　何か手ごたえはありましたか。

**マンジュシュリー・ミトラ**　いや、ないんですよね。もうしんどいだけで。ただ蓮華座が組めるようにはなりました。初めは体が硬くて少し組んだだけでビシャーッと汗が出てね、十五秒とかそんな感じでしたけどね。そのときやってたヨーガというのはハタ・ヨーガです。あとは仙人になる法とかいうのがあったでしょう、小周天とか。ああいったのを練習していました。

※自己流の修行に物足りなさを覚えたこと、そして会社生活に疑問を感じ始めたことがきっかけとなって、大師はオウムの門を叩くことになる。八七年四月のことであった。

**マンジュシュリー・ミトラ**　就職してからもう五年目に入ってたんですが、矛盾といいますか制約ばっかりされるものですから、思ったことが何もできないでいると。そういうところで、特に人間の幸福と全く関係ないことをしていてもだめだなと思っ

てましてね。

それで、たまたま本屋で、まあ前からチラチラと気にはなっていたんですが、『生死を超える』と『超能力秘密の開発法』を読んで、関西に住んでいましたから、「明日大阪支部に行こう、行ってみて良かったらあさって辞表を出そう」と思いました。それで行ってみると、大内さんが出てこられて、そのときはもう修行の話だけだったんですけどもね。わたしたちは全員クンダリニーが覚醒してますとか言われて、「えっ、ほんまかいな」と思いましてね、「くやしいな」とかそんな気がしましたね。でも、話がすごく暖かくてね。雰囲気が実に良くて、それで「もう会社辞めます」って、その次の日には辞表を出しました。

**編集部**　会社を辞めるという判断が非常に早いですね。

**マンジュシュリー・ミトラ**　そうですね、いる気がなかったんでしょうね、もう。ただし出家とかそういうのは考えてなかったですね。そういうのがあるというのも知らなかったし。とりあえず働きながら修行しようと思って。

それでセミナーに初めて出て、それからますます確信を深めましてね。全日程参

加したんですけども、あのときは手ごたえありましたね。やはり、神秘体験のかけらみたいなのは感じましたから。そして尊師にアドバイスいただきまして、直接。それで、ああこれはやらないかんなと。

それと、お会いする前に、チラッと尊師とケイマ大師が歩いているのを見かけたんですが、そのときにバーッと体が燃えて、実際熱くなって。こういう体験、初めてでしたからびっくりしました。実際にお話ししてみると、すごく暖かく大きい人だなと思って、それでもう刻みついてしまいましたね、何か姿が。そして、その帰りに、もう東京にアパートを決めて帰りました。アルバイトをしながら修行しようと思っていたんです。

「マンジュシュリーの第一印象は、とにかく意志の強い人だなと。それからすごく言葉使いが丁寧だったね。ただ、押しの強い人だなという印象はあったけどね。」

（麻原尊師コメント）

## ◎数々のイニシエーションの開発——実り多いワークの日々

※東京に出て来られてから、大師は道場に通って行法にいそしむかたわら、積極的に功徳を積む努力もされた。ワープロ打ちなどのバクティを皮切りに、専門分野を生かした占星術のプログラミングなどで大師は大いに活躍するようになった。大師がサマナになるのにそれほど時間はかからなかった。

占星術の予言の的中、また尊師のエジプト行きに同行し多大な影響を受けたことで、大師の尊師に対する「信」は徐々に深まっていく。精神世界の真実、そしてオウムの宇宙理論と最新科学の理論の驚くべき一致に、大師は大きな未知の世界が広がるのを感じていた。

**編集部**　エジプト行きのあとから、いろいろプルシャとか作り始められて、イニシエーション関係にすごく深くかかわってますね。

**マンジュシュリー・ミトラ**　そうなんです。それについて自分が考えてきたのは、これ、ずいぶん思い上がった考えなんですけどもね、「オウムに入ってどうするん

や」というのを考えたときに、みんなのように成就してシャクティーパットをして救済していくというのとは違って、装置というか空間というか、そういうものを作って、大量に人を救い上げるというようなちょっと一味違った救済活動をするんじゃないかという、そんな自負とか、意気込みみたいなものがあったんですよ。

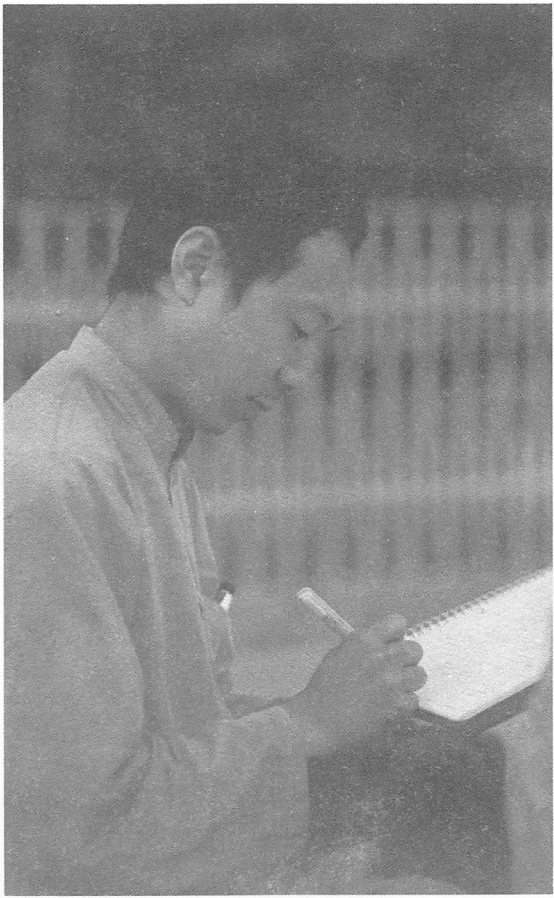
**編集部**　それに対してちょうどいい材料が与えられてきたと。

**マンジュシュリー・ミトラ**　そうですね。でもね、まだ宿題として、これからやりたいことがいっぱいあるんですよ。極厳修行に入るまでは、何とか微力ながら少しは進んできたというか、ちょっとついて来させていただいたというか、そういう感じですね。

**編集部**　ワーク自体はだいたい順調だったんですか。

**マンジュシュリー・ミトラ**　いや、行き詰まりが多いですね、やはり。でも、すぐに尊師のお手伝いをさせていただける場所におりまして、すごく幸せだったと思いますね。それで、少しずつ自分も変わっていったと思いますね。

実は、これは尊師に疑問として聞いたことがあるんですけども、今まで救済とい



うことで尊師の与えてくださったワークがありますよね。それとエゴがありますね、自分でこういうことしたいという。これが、普通は食い違って葛藤が起こるわけです。そうしてエゴをつぶしていくという、そういうプロセスになると思うんですけれども、わたしの場合、それがあんまりなかったんですね。つまり、やりなさいと言われたことが自分でもやりたいことであると。

例えば、プログラム開発なんていうのは、趣味としてやってたくらいですから楽しみなんですね。だから、こういうプログラムはできないかと言われて、はいはいと言うのは無上の喜びでしたし、これについてちょっと調べろと言われて、それについて資料集めしたりするのも本当に自分の楽しみでしたね。やりがいもあるしエゴも満足するという、そういう葛藤のない状態がつまり順調と言えば言えると思うんですけどもね。

**編集部**　成就したいという願望はありましたか。

**マンジュシュリー・ミトラ**　それはずっとありましたね。つまり、尊師からすごく貴重なヒントをいただくんですけども、その答えがわからないんですよ。つまり凡

夫の頭では答えが見つけられないんですね。これは、やはり成就して、成就者の悟った頭で考えないと無理ですというのを何度も言ってましたね。でも、それは先送りにされてたんですね。

ところが、九月（八八年）くらいになってきたら、こうこういうこともしたいんですがというのをこちらで提案しますと、それは成就してからというふうに言われるようになって、やはり何か限界に来てたんでしょうね。特に、人の言うことを正確に聞き取って理解できてないのではないかということを言われるようになりましたね。つまり、自分の思い込みだけになっているというか、まあそれがわたしの限界だったんだと思いますね。

### ◎始まった立位礼拝——直面するエゴ

※大師の限界を察して、尊師は大師に忍辱精進修行に入るように言われた。十月三日、富士山総本部道場のサティアン・ビルで修行は始まった。

前世でも小乗の成就をしている大師に、短期間での成就の期待がかかった。し

かし、そうした期待を受けながら、大師は極限状況に自分を追い込めず、修行は空回りしていく。言いようのないもどかしさに、大師の心は揺れた。そして初めて自己の持つエゴに直面していった。

**マンジュシュリー・ミトラ**　最初は、もう思い上がっているわけですよ、自分は案外ステージが高いのではないかとね。つまり、十日で成就しろとか一週間で成就しろとか、そうやって発破を掛けられているものですから。それで、それを逆手に取って、ああ、なんと十日でできるものか、すごいなと思ったりしてですね、高をくくってたんですね。ですから、そのとき本当の自分の汚い部分というのに気がついていなかったんですね。

例えば、一番大事なザンゲがありますね。でも、何も思い浮かばないんですよ。何かわたしは悪いことをしただろうかと。こう思い上がっていたんですね。

結局わたしの場合、冷酷さというか、自分の思い上がりからきている謙虚でない心、それがあったわけです。それで、温かい心、謙虚な心というのはどういう心で

あろうかというのを、一日に何度も何度も考えるようにと言われました。

それとあと、例えばヴァヤヴィヤ・クンバカ※をやっていて、限界までできないということですね。つまり、これは一種のエゴが感じている恐怖ですね。これを越えなければいけないっていうのがわかってるんだけども、なかなか越えられませんでした。

※少しずつ現われてきた心の苦しみ。尊師の言葉にヒントを得ながら、大師はその苦しみを一つ一つ解析していった。そして、初めて自分の心の奥底を垣間見るのである。

●十月十一日（火）

・尊師にかなりたくさんエネルギーを入れていただく。

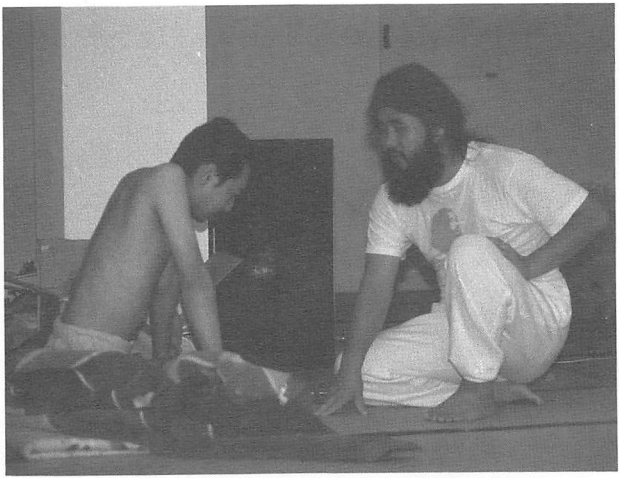
「意志の弱さが出ている。心に明るさがない。」

「ヴァヤヴィヤをやりながら闘争のカルマと口のカルマをクンバカ中にザンゲせよ。」

※ヴァヤヴィヤ・クンバカ：調気法の一種

・わたしの闘争心はプライドによるものである。勝っているときにはどんな手段でも使ってきた。ところが、残念ながら運動面はからっきしだめだったので、主に頭と口を使うようになった。いったん撤退と決めた分野には近づかなかった（卑屈さ）。
・アストラルでは無敵だった。――口による攻撃と対応――

●十月十六日（日）
わたしの性格の最もまずい点は「逃げ」ではないだろうか。
・問題を直視せず本質外の小手先で逃げる。
・解決法が示されてもそこに全力でぶつからず、だれかがやってくれるのを待つ。
・常に限界まで頑張らない。余力を残して終わる。そして「まだ余裕がある。限界まで力を出さずにこれだけできるのはすごい。」と納得させる。
その逃げの根本となっているのは、恐怖だろうか。それとも自分（の力）に対する自信のなさか。
○絶対安全なとき以外、勝負してこなかったのではないか。



○自分に自信がない。他人に打ち勝つことでのみ、自分が確立する——アシュラ。限界までクンバカしろということで、今までは、例えば二分が限界とあらかじめ決めていた。しかし、これはおかしい。まだその状態を経験する前に限界が設定できるはずがないだろう。本当は限界などないのではないか。

**◎気づいた救済の使命——さあ心を入れ替えよう……**

●十月十七日（月）

今まで自分の脆弱さ、いくじなさについて悩んでいたが、やっとその理由がわかった。

わたしはオウム真理教で救済活動をすることを目的として生まれてきた。そして、心の奥でそのことに気づいていた。だからオウム真理教に入るまでは、まだ人生の目的に巡り合っていなかったのだ。救済者になるまでは死んでも死にきれない。それで極度に危険に対して敏感な臆病者だったのだ。

しかしオウム真理教に入った今、その殻を引きずる必要はない。もはや全力でぶ

つかる素地ができたのだ。ここで死んでも何ら恥ではない。さあ心を入れ替えよう。今までの自分は恥でも何でもない。必要なプロセスだったのだ。

もう迷うことはない。わたしは今、水を得た魚となったのだ。さあ、真理の大海、自由の大海、歓喜の大海へ泳ぎ出よう。

●十月十八日（火）

尊師の特別アドバイスを受けた。

心の冷たさと自分に対する自信のなさ、意気地なさは同じ現象の表裏に違いない。今こそわたしの問題点が「冷たい心」（アナハタ）にあることがはっきりした。これをターゲットに全力！

**マンジュシュリー・ミトラ**　この自分の「冷たい心」を直視するようになって、そうしてどんどんわかってきたんです。つまり、自分がいかに自分のことだけを考え

て生きていたか、他人を傷つけて平気であったか。それで、やっと初めてザンゲできるようになってきたんですね。

そして、その「冷たい心」があるがゆえに、常に安全策を採ってきた自分があったんですね。つまり、自分の身に危険が及ばないように及ばないようにと逃げてね、逃避ですね。それでぎりぎりまで逃げて、だれかが助けてくれるのを待つというか、そういったすごく弱い面があると、わたしはそれでずっとやっていたというのがわかりました。

**編集部**　それはこの修行に入って、初めて気がついたことですか。

**マンジュシュリー・ミトラ**　潜在意識ではわかっていたんでしょうけども、初めて気がつきましたね。気がついてはいたんだけども、自分でごまかしていたという感じですね。

それまでは、すぐに成就するぞというようなことを言われるとうれしくてね、それで成就したらこうしてやろう、ああしてやろうと、こここに行ってこうやって説法してやろうと、一見救済のようなことを考えながら実はエゴを満たしていたん

ですね。そして、もし神通力がついて成就したとして、それがエゴを満たす方に動いたとしたら、すごくオウム真理教に迷惑がかかりますよね。オウム真理教の救済活動全部が破綻するかもしれないと。それに気がついたのが数日後でした。それで、今成就できないのは当たり前であると。できなくてよかったと思いましたね。

### ◎限界へ、限界へ——極限の日々

※自己の心を見つめて、すでに二週間。尊師の、

「生死を超えなければ、成就はあり得ない」

という言葉に、大師はいかに自分を限界まで追い込めるかという課題に没頭していく。このとき初めて、二十四時間の修行が、本物のやりがいのあるものとして目の前に映ってきたのだった。

また、ビバリータ・カラニー・ムドラー後にとる二時間のシャヴァアーサナ※を除いては、全く睡眠時間のないプログラムにおいて、睡魔に打ち勝って「光の世界」に没入することも大師にとって大きな課題であった。

※ビバリータ・カラニー・ムドラー、シャヴァアーサナ：ヨーガの行法の一種

●十月十九日（水）

十一時から立位礼拝。どのようにしたら全力を尽くせるか考え、とにかくできるだけ意識の集中を抜かないように頑張った。

・声はできるだけ大きく

・スピードはできるだけ早く

・グルを意識

・温かい心を思ってアナハタのしこりに集中

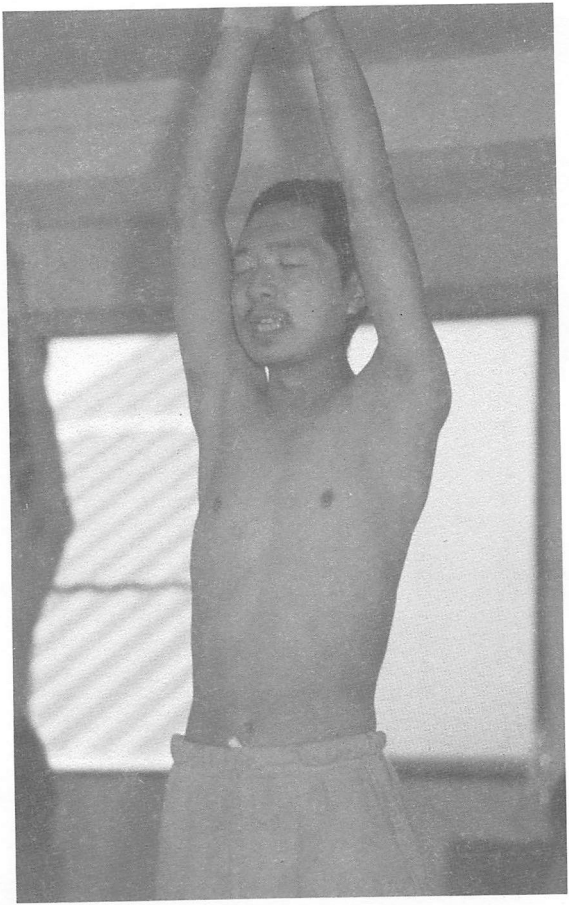
十一時四十五分　のどに毛むくじゃらのものが入ったように声がしわがれた。構わず、できるだけ大声でやる。特に嘔吐するように。気狂いみたいだ。

（十分後）のどのしわがれが消えた。体は以前にまして熱く、爽快だ。

●十月二十日（木）

・立位礼拝。三時間もたそうとせず、ぶっ倒れても構わないという意識で行なう。

・右側にアクセルを考え、常に踏み続ける。



・スピードよりも、正確にはっきりと唱えることを心掛ける。
・三十分後……昨日と同じ症状がでた。アナハタに強い圧力を感じる。顔がゆがむ、手がひきつる。詞章がなかなか唱えられない。苦しい。
・この状態は約十五分で通過。また詞章がクリアーに唱えられるようになった。その後はアナハタのしこりが、少しずつ胸腺(きょうせん)→のど→口を通し、いがいがしたものとして外に出ていく感じ。

●十月二十一日（金）

尊師が以前、核融合の条件、一億度、一秒の話をしてくださった。

気管を通るエネルギーと三毒の関係は、磁気中に閉じ込められた水素プラズマと、不純な重元素の関係にあるのではないか。この重元素がエネルギーを奪うので、プラズマの温度が下がり、核融合が起こらないのだ。

・アナハタ・チャクラは、風元素、核融合と関係あるはず。
・例えば三毒を陽子、電子、中性子としよう。この三毒が結合すると、元素として

安定して存在するようになる。三毒をバラバラにしなくては浄化できない。

方法――・温度を上げる（種々のエネルギー移入）

・反物質を用いる――直接、光に還元

・眠気を耐えてできるだけ瞑想を続ける。

・この眠気は自分にとって害であると常に考えよう。眠気を越そう越そうと常に考える。

・いらないデータは思い出して消すのではなく、無視する。

●十月二十二日（土）

・謙虚さという一言ですべての必要条件が表わされる。

・例えば心が謙虚であれば、すべての戒を守れるし、今の自分に満足せずに、限界を越えていける。

・とにかく、あとは潜在意識（眠気）に負けないこと。

●十月二十五日（火）

・逃避――意志の放棄。

・眠りは意志の放棄である。意志の力なくして解脱はあり得ない。したがって、眠りは解脱に対する悪、障害である。絶対眠らないようにしよう。

**編集部**　煩悩に関してはどうだったんですか。

**マンジュシュリー・ミトラ**　そうですね。その冷酷な心というのは、どうにも仕方ありませんでしたね。もう、どんどんと尊師にエネルギーを入れていただいて、それが出てきては落ちると、そういうプロセスにしていただいたんでしょうね。

それで、ビバリータ・カラニー・ムドラーのときに、胸が異常に痛いんですよ。そういう、肉体的な感覚として感じるのですが、その肉体的な感覚っていうのはあんまり苦しくはないんですね。それよりも心の痛みで、謙虚な心っていうのは何だろうか、救済者の心って何だろうかというのをずっと考えながらやっていました。そうすると、ある日突然痛さがスッとなくなっていました。

「彼の場合は、死をかけられるかということ、これがポイントだったよね。で、まあ、最後の方でやっててくれたわけだけど、初めの二週間くらいはね、やはり死に対して、あるいは自分の限界に対して、まだ全力でぶつかっていなかったというのが実状だったよね。

しかしその後は、本当に極限まで修行していたという感じだね。」

（麻原尊師コメント）

**◎成就――突き抜けた宇宙空間**

**マンジュシュリー・ミトラ**　あと、成就については、他の皆さんと同じように、ダルドリー・シッディと光の没入だと言われていたんですね。それで、とにかく最初はダルドリー・シッディだと。

当初、振動らしきものを感じたのにもかかわらず、全然起こらなかったんですよね。それで、もう当然起こっていいはずだと、なぜ起こらないんだろうかと、まあこれは苦しみといえば苦しみですね。すいません、まだ今日もありませんと言い続

けなければいけなかったので。それで、そのときに尊師に立位礼拝の姿勢を見ていただいて、

「腰が入ってないじゃないか。」

「初めに指導したのに、なぜそれをちゃんとやってないんだ。」

ということを言われて、あ、そうか、腰かと。やってるつもりだったんだけどなと。それで、その日一日、めいっぱい腰を一生懸命入れるとあっさり起こったんですね。だから、尊師の指示をいかにね、守っていないかというのと、あと、指示通りやればすぐできたものをということを感じましたね。

それで次は光の没入だったんですけども、これは暗くてなかなか見えませんでした。わからなかったんですね、全然ね。何か雲みたいなのが渦巻いているんですが、暗くて全然光がないんです。向こう側から照らされてるのかなあとか思ったりしましたけど、それがアストラルであると。それを越えなければいけないんだということでしたよね。それで、もう光の見える瞑想に入れと。

そこで、瞑想時間を長くした方がいいんだなと解釈して、ヴァヤヴィヤを短くし

ていいという指示が全然なかったにもかかわらず、一番嫌いなプラーナーヤーマ（調気法）を削って瞑想してたものですから、エネルギーが足りなかったんですね。それで、本当にヴァヤヴィヤ六時間やってるかと言われて、「あ、やってません」と。つまり尊師の指示をちゃんと守っていなかったんですね。

※極限まで修行をしていた大師にとって、最後のポイントとなったのは、帰依（きえ）の心だった。たび重なるエネルギー移入にもかかわらず、成就しないのはなぜだろう——大師の修行は大詰めを迎えていた。

そして、その心の深まりとともに、徐々に光の体験も進んでいった。

●十月二十七日（木）

帰依というのは代償や結果を求めないはずだ。

尊師がやれといったことは、見返りを求めず喜んでできなくては。

わたしは今まであらゆることに結果を求めてきた。例えば、この修行をすれば光

が見えるはずだとか。

無心に尊師の言うことを実行していれば、結果は自然にわいてくる。

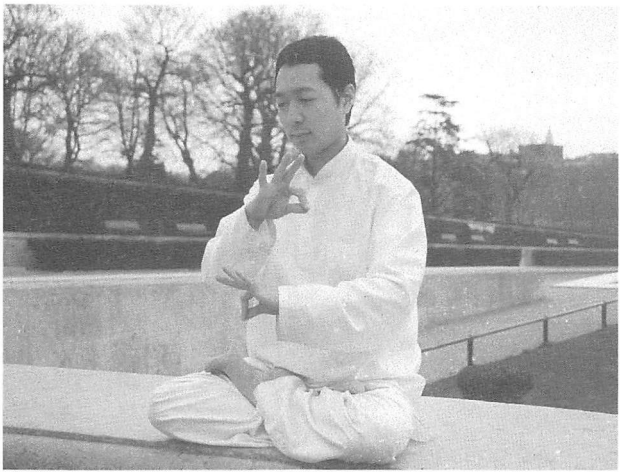
●十月二十九日（土）

・今までで最も心が明るく軽く、苦に対する許容度も大きい。

・昨日は成就したらああしよう、こうしようという考えを追ってしまった。エゴであった。

七時二十分。目を強く閉じると、金色のチェック（ダイナミックに動く）と、その前に多数の紫色の光点が見える。

八時五分。目を強く閉じると、初め緑、次いで緑と赤のちりめん模様（動かない）が全面に。それとだぶって青紫の光点が多数。右側に金色の星雲。



・修行の意味合い

ヴァヤヴィヤ六時間まではつらいが、これに耐えるのが忍辱。これを喜びとするのが精進。これをやめたいと思うエゴに打ち勝つのが帰依。

十六時二十分。かなり精神状態が変わってきた。立っていても意識がはずれそうになる。エネルギーが強くなったのだろう。いい感じだ。

十八時。全力のヴァヤヴィヤ六時間をついに達成した。感無量だ。

二十時。瞑想。最後の空性の過程でダルドリー・シッディがかなり長時間続く。そのときは白、赤の光点が多数見えたがあまり明るくはない。意識は鮮明。悦ではない。

●十月三十日（日）

昨日から、初めて本当の修行が始まったような気がする。逃げずに全力で修行することは何と素晴らしいのだろう。

**編集部**　光の体験が起きたときはどんな状態だったんですか。

**マンジュシュリー・ミトラ**　それまで苦手だったヴァヤヴィヤが六時間全力でできるようになって、体の調子が全然違ってきまして、瞑想に入るとすぐに体が跳ね出すんですね。でも意識は目覚めていて、それを客観的に見ているような状態でしたが、そのときにバーッと明かりが強くなるのを感じましたね。

それからどんどん明るくなってきて、「あ、いよいよ光か」と思うとパッと体の振動がおさまって、「あ、抜けたかな」と思ったら、暗い宇宙空間みたいなものが見えたんですね。真っ暗な空間だったんですよ。そこに星みたいな光点が何個かね、バーッと動いていて、まだ雲の名残が引いているというか、要するに曇り空にロケットを打ち上げて宇宙空間にやっと出たような感じ、それが最後の体験でした。

そしてそのことを尊師にお話しすると、それは第四空性（くうしょう）だと。そのときに、

「もう死後ショックのない段階になったぞ。」

「これは成就だ。」

と言われました。結局二回そこを体験してたんで、わたしは自分の体験には確信を

持っておりましたから、やっと「ああ、よかった」と喜ぶことができたんです。十一月一日の朝でした。

### ◎立位礼拝――カルマを実感した修行

**編集部**　修行が終わってみてどうですか。体は初めから持ちましたか。

**マンジュシュリー・ミトラ**　過食ということで、食事を減らしていったのがありましたからね。でも、案外平気だったんですよ。

あとは、眠気がありましたね。結局ヴァヤヴィヤ六時間やる前っていうのは、眠気との闘いでしたね。つまり、すぐにポッと潜在意識に入ってしまって、抜け出せなくなると。まあ、どこか管が詰まっていたんでしょうが、その浄化が起こった途端にスーッと意識が晴れたんですよ。それで全然眠たくなくなって、それまで以上に醒めた状態でしたね。瞑想もよくできるんですね、不思議なことに。だからそうなってからはもう安心しましたね。

**編集部**　その浄化というのは尊師のエネルギー移入で起こったのですか。

**マンジュシュリー・ミトラ**　そうです。あれは効いたんですよね。スッと鼻が通りまして、それから一週間くらい大量にすごい色の鼻汁が出ましたね。絵の具のような黄色の。その後はもう何も出ないですね。

**編集部**　立位礼拝の修行では、いろいろカルマが出てきますね。肉体的な痛みとかはどうでしたか。

**マンジュシュリー・ミトラ**　わたしは一番初めに立位礼拝したときに足に出ましたね。そのときに毛布取っぱらったんですね。畳の上でやってもっと痛めてやろうと思って。それで蓮華座がだいぶ楽に組めるようになって。あれ以来毛布は使わなかったんですね。あとはやっぱり胸ですね、アナハタの。冷酷な心、謙虚でない心というのがいっぱい出てきました。これがビバリータ・カラニー・ムドラーでバッと消えるまでは痛かったですね。

**編集部**　たまに取り憑かれたようになってましたね。

**マンジュシュリー・ミトラ**　あれは喉です、たぶん。胸と喉、どちらかちょっとはっきりわからないんだけど、集中しますと突然詞章が唱えられなくなる。それは言葉

を忘れてるんじゃなくて、声が出なくなるんですね。初めに何か鬼のような声になりまして、ガラガラの。そしてさらにその集中を深めるともう出なくなると。

ところが、その後一瞬でもいいからその集中をはずして、例えばムーラダーラ・チャクラに集中すると、また出ると。あれは不思議でしたね。摩訶不思議というか、カルマの働きだと思いますが。それで、一生懸命そこに集中して、声をしわがれさせて、カルマを絞り出すようにしました。それによって、カルマというのが物理的に実感を持った存在として感じられるというのが不思議でしたね。

**編集部**　今回の修行を振り返ってみて、感じることは何ですか。

**マンジュシュリー・ミトラ**　やっぱり、いかに自分が無智であったか、いかに自分の悪業、自分の煩悩、自分のカルマに気づいていなかったかということが一番大きいですね。あるいは気づいていながら隠してきたんだということですね。

それから、この世界というのは、科学では割り切れない摩訶不思議の世界だと思いましたね。修行の過程で、こうしたらどうだろうかと思った自分の工夫というのがすべて裏目に出ましたから。しているつもりはないんですけども、尊師の言うと

おりしようと思いながらも、やはりエゴが残っているときには、尊師がこう口走ったとかいうのをしっかりと捕らえていて、それを曲解してね、自分が楽になるように、成就が遅れるように修行を変えていたというか、それも煩悩だなと思いました。だから、いわれたことをできるだけ何も自分の考えをはさまずに素直にできるようになれば、成就はすごく速いと思いますね。

**◎宇宙を通して——智慧第一に**

※大師のホーリーネーム、マンジュシュリー・ミトラは智慧第一の文殊菩薩のこと。そこにはこの宇宙すべてを通して、智慧第一になってほしいという尊師の願いが込められている。

**編集部**　今後の活動について教えてください。

**マンジュシュリー・ミトラ**　これまでの宿題をこなしていこうと思っていますね。今まで自分ができなかった、煩悩があるがゆえにできなかった救済活動を、やっと

できるようになったということで大変うれしいですね。

そして今後、もっともっと自分を高めてね、できるだけ早く大量の魂を高い世界に引き上げられるような環境を作るために頑張っていきたいと思います。

**編集部**　後に続く人たちにアドバイスをお願いします。

**マンジュシュリー・ミトラ**　本当に成就っていうのは素晴らしいと思いますね。そのための最短の道を尊師が教えてくださっていると。わたしは自分の信が足りなかったために当初の予定よりも長引きましたけれどもね。とにかく、尊師のおっしゃっていることが、すべて最高の真実であるという具合に理解して修行されたら、猛烈に速く成就していけるんじゃないかと思いますね。しかも、それだけ価値のある世界ですから、ぜひとも大勢の人間に救済者の側に立っていただいてね、この苦しみに満ちた迷妄の世界を丸ごと、速いこと消滅させたいなと思いますね。

「とにかく強靭（きょうじん）な意志の強さ、これがあったね。そして、わたしやカッサパと同じで、仏教的というか、密教的な成就をしたわけだけど、第三段階、第四段階も案外

行きやすいんじゃないかな。

今後はやはり、より大乗的になって、いかに多くの人を指導できるかということがポイントになってくるだろうね。」

（麻原尊師コメント）

（『マハーヤーナ』No.18 一九八九年睦月号 オウム出版 所収）

# 神々の時代の幕開け

## ――マハームドラー、その成就の素晴らしさ

真理の御魂　最聖　麻原彰晃尊師インタビュー

### ◎煩悩からの解放と神通の獲得

**編集部**　まず初めに、マハームドラーの成就の素晴らしさを簡単にお聞かせください。

**尊師**　まず、煩悩から解放されるということ。そして、その人そのものが神々になるということ。そして、神秘的な力がつくということじゃないかね。

**編集部**　神秘的な力というのは、クンダリニー・ヨーガでつく六神通とは違うんでしょうか。

**尊師**　もっと深い意味での神通力が発揮できるんじゃないかね。それから、クンダ

※：『マハーヤーナ』No.34掲載「ダルマ&ダルマ」に詳しい

リニー・ヨーガとの大きな違いは、クンダリニー・ヨーガの場合、外界と接するといったんエネルギー状態が落ちて不安定になるけれども、マハームドラーの場合は外界の影響を受けなくなるというのがあるね。それは、例えば、マハー・ケイマ、マハー・マーヤ、マイトレーヤが、あまり外界の影響を受けないで、エネルギー状態に左右されないでワークができるというのを見てもわかるね。

**編集部**　オウム真理教では、例えばラージャ・ヨーガの成就は、三グナの霊視、クンダリニー・ヨーガは空中浮揚の前段階であるダルドリー・シッディとコーザルの光への没入を体験して成就といわれますが、マハームドラー成就の決め手、あるいは成就までの現象的なプロセスについてご説明していただけますか。

**尊師**　まず、マハームドラー成就のための条件というのは、十四の達成であると言うことができます。それは、布施、持戒、出離、智慧、精進、堪忍、忍辱、真理、決定、確定、慈しみ、哀れみ、称賛、無頓着です。※そして、マハームドラーの成就のプロセスというのは、悟りの八勝処であるということが言えると思います。これはマハームドラー成就の一つのポイントですね。

## ◎美醜を超えて

**編集部**　では、八勝処について少し説明していただきたいと思います。まず第一勝処は、「ある人が、内に色想があり、様々な色の少しのものを好み嫌悪することを外に見て、それらに打ち勝ち、『わたしは知り、わたしは見る』というような想があること、これが第一勝処である」ということですが。

**尊師**　これはどういうことかというと、内に色想があるというのは、内側に光とかそういうものを見ていて、外側の、外部からの大きな刺激に対してはまだ心が揺れる――例えばものすごい美人とか、例えばものすごい醜い人とか、そういうものに対しては心が乱れるんだけれど、ちょっとした差のものに対しては、心は打ち勝ち乱れないというかね。そういう状態が、第一勝処のことなんだね。

**編集部**　次に第二勝処は、「ある人が、内に色想があり、様々な色の無量のものを好み嫌悪することを外に見て、それらに打ち勝ち、『わたしは知り、わたしは見る』というような想があること、これが第二勝処である」。

**尊師**　これは、第一勝処の状態が増大された場合だよね。つまり、外部の大きな差

のある刺激に対しても心は動かない状態であるということです。

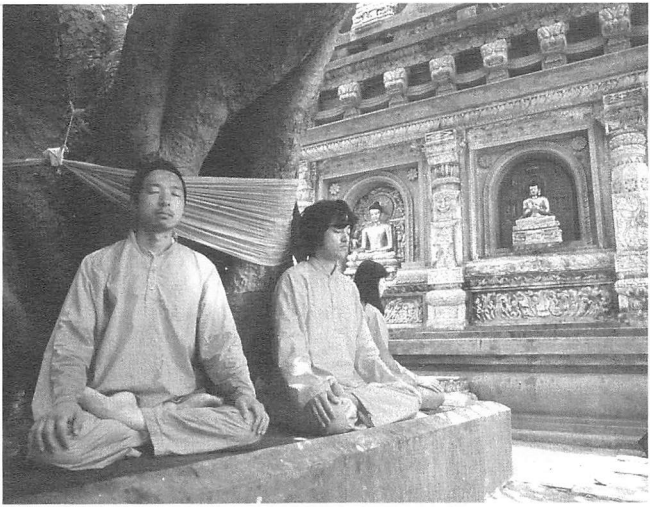
**編集部**　そして、次の第三勝処は、「ある人が、内に色想がなく、様々な色の少しのものを好み嫌悪することを外に見て、それらに打ち勝ち、『わたしは知り、わたしは見る』というような想があること、これが第三勝処である」。

**尊師**　これについては、表層意識だけではなくて、潜在意識においても心の動かない状態ができているということです。つまり、潜在意識レベルにおいて、大きな差異に対しては心は動揺するけれども、小さな差異については動揺しないという状態ができていると、そういうふうにとらえていいと思います。

**編集部**　内側に色想がなくなるということは、それだけ深い意識に入っているということですか。

**尊師**　そうです。深くなってきて無色の状態、無色が始まっているというかね。

**編集部**　次に第四勝処は、「ある人が、内に色想がなく、様々な色の無量のものを好み嫌悪することを外に見て、それらに打ち勝ち、『わたしは知り、わたしは見る』というような想があること、これが第四勝処である」。



**尊師**　これも同じです。つまり外側の強烈な美醜に対して、潜在意識も動揺しない状態ということだね。

## ◎成就のプロセス――輝く青空間から光の空間へ

**編集部**　そして次は、「ある人が、内に色想がなく、様々な色が、青く、青い色で、青く現われ、青く輝くことを外に見る。たとえるならば、亜麻の花が、青く、青い色で、青く現われ、青く輝くようなもので、またたとえるならば、両面が滑らかなバーラーナシー産の衣が、青く、青い色で、青く現われ、青く輝くようなものであり、このように、ある人が、内に色想がなく、様々な色が、青く、青い色で、青く現われ、青く輝くことを外に見て、それらに打ち勝ち、『わたしは知り、わたしは見る』というような想があること、これが第五勝処である」。

**尊師**　これからの四処は、まさに完璧な色界の経験であると言えます。欲界じゃなくて色界の経験であると。そのときには、完全に空間が青くなる。そして、弟子である修行者もそれを見るし、グルもそれと同じものを見るという状態。ブルーしか

ない世界があるんだね。それを経験するということです。

**編集部**　単に青い色が見えたというのとは違うわけですね。

**尊師**　違います。青い空間、青空間です。そして、その次のプロセスとして黄空間になり、そして赤空間になり、白空間になります。これが八勝処です。そして、そこで終わるのではなくて、そこから次に、体がぶちぶちにつぶれたような感じになって空無辺が始まります。そして次は、中心に鞘があるわけだけれども、そこから識がドーッと広がり出します。広大に広がっていく。これが識無辺です。それから、その識が完全に解き放たれてしまって、完全に自己の存在そのものがどこにあるのかわからない、つまり、自己の存在があるのかないのかわからない状態がきます。これを、経典では無所有処になっているけど、わたしは有所無処と言っているよね。で、それよりも突っ込んで瞑想していくと、今度は自己の持っているデータが全部消えてしまって、想いがあるでもない、ないでもない状態が生じます。それが非想非非想であると言っています。その、あるでもない、ないでもない想いが消え、そしてそれから完全に外界の受そのものが滅した状態、これが滅想受定であると。

想いもなければ想もない。しかし、存在はしているというかね。そして、光しかない——まあ、光があるというか、空間があるというか。これがマハームドラーのプロセスです。

だから、マハームドラーのエンライトメントというのは、要するに、その人のステージによって、空無辺から滅想受定までのどの到達点に突っ込むかわからないけれど、少なくとも八勝処を通過した点であるということです。

だから、今説明した経験をみんなします。だいたいマハームドラーを成就される人は、みんな土台ができているから、青、黄、赤、白い空間に入って、それから光がワアーッと降りてきて、目の前が昼間みたいになっちゃうというかね。そういう経験をみんなしています。まだ成就していないといわれている人も、もうかなりそれに近い経験はしているね。

### ◎データの入れ換え——その重要性

**編集部**　マハームドラーの成就ということは、必ずそこを通過しているわけですか。

**尊師**　通過させなくてはまずいということですね。これらの経験が終わるまで成就はあり得ません。どこかに心の引っかかりがあったら、例えば美しいとか醜いとかで引っかかっていたら、その状態を抜け出せなくて、次のステップに入っていけないわけだよ。例えば、性欲があって、これは美しい、これは汚いとか、これは好きである、これは嫌いであるとか、そういう経験があれば、そのステージから永遠に抜け出せないわけだよね。だからわたしが、修行に入る前にデータを完全に入れ換えておけと言うのは、そういうところで引っかからないようにするという意味合いがあるわけだよ。そうやってデータを入れ換えておけば、修行に入ると心の内側の体験がどんどん進んでいって、例えば、八勝処の一つの体験が一日とか二日で終わってしまう。

今回一番初めに成就したマンジュシュリー・ミトラの場合、なぜすべての体験が三日で終わったかというと、日頃からわたしの実践をまねしていたよね。例えば、腐ったものを平気で食べるとか、あるいは性欲の戒を守るとか、あるいは異性に対しては、特殊な瞑想をするとかね。そういうのを日々生活の中で行なっていたから

早かったんだね。結局、瞑想というのは心の内側の体験だから、マンジュシュリーのように日頃から修行を進めていれば、瞑想に入ってからは、ステージがどんどんポッポッポッと上がっていってしまうということだね。

ところが今修行に入っている人、例えば、Mの例なんかを挙げるならば、典型的な美醜の世界で引っかかっているから抜け出せない。苦戦して、苦しみもがいている。もがいたって美醜にとらわれることが苦であるというデータがないわけだから、抜け出せるわけがない。しかも、修行によって意識がコントロールしづらい潜在意識に入っているから、修行者の機根がないとすぐに寝てしまって良いデータも入れられないということになるんだね。

### ◎信と帰依をベースに煩悩へアプローチ

**尊師**　マハームドラーそのものは、そんなに難しい技法じゃないよ。要するに、この八勝処のプロセスを淡々とこなしていけばいいわけだね。だから、結局はどんな人間でもマハームドラーは成就できるということです。ミラレパが成就式典で言っ

たとおり、その人が修行の途中で逃げさえしなければ成就できます。それはどういうことかというと、もしデータが入れ換わらなければ、瞑想修行に入ってデータを入れ換えてもらえばいいわけだから。そこで必要になってくるのが信と帰依だよね。例えば、今修行に入っているAみたいに、正悟師がこれをやれと言っているのにやらない。それでは永遠に成就しないだろうし、例えば、人が見てないと蓮華座を崩して足を伸ばしているようでは成就しないだろう。

だから、今新しくマハームドラーの修行に入ろうとしている人には、もう少し違う方法で修行させようとしています。もっと表層意識を使ってね。表層意識に強烈にデータを入れて、変えていくというか。

**編集部**　表層意識にデータを入れるときには、何らかの特別な手法で入れるわけですか。

**尊師**　今のやり方はまさにそのとおりです。つまり、まず何をなせばいいかだけ、あるいは、解脱に対する欲求という原則だけを叩き込む。この原則以外入れない。というのは、原則以外のデータを入れると、潜在意識がそちらの情報に負けて修行

から逃げる場合があるから。この修行は、君たちの煩悩にアプローチしていく、君たちが好んでいるものにアプローチしていく修行だから、当然、エゴは嫌がるよね。その嫌がる気持ちよりも、解脱に対する欲求が勝ったら、煩悩は負けて落ちていくだろう。しかし、解脱に対する欲求が煩悩に負けたら、その修行者はつぶれる。だから、まず欲を、解脱に対する決意を徹底的にやらせるということなんだよ。つまり、君たちの修行は、このように論理的に思考されたもので組み立てられています。

### ◎四カ月間の瞑想の成果がここに

**編集部**　以前は、マハームドラーの成就は、一年に一人とか二人でしたが、今回、画期的な修行プログラムによって、わずか二週間の間に三人の成就者が出ました。それは、尊師がエネルギーを回復されたことによるのでしょうか。

**尊師**　実は二月の選挙後、わたしはひたすら瞑想してきた。そして、二月から、結局、六月までの四カ月が経って、やっと一つのかたちが現われたというわけだ。その間、わたしはある瞑想を繰り返しやってきた。繰り返し繰り返しやってきて、も

う二万数千回に達している。これは『南伝大蔵経』の言葉を使うならば、思念如意足だよね。この思念如意足をもう二万数千回やっているわけだから、このように画期的なものが現われて当たり前なんだね。そして、わたしはこれを最終的には十万数千回やることになると思うから、その段階でもっと確立されるんじゃないかと思います。

### ◎強さの違い——クンダリニー・ヨーガとマハームドラー

**編集部**　マハームドラーの修行は、クンダリニー・ヨーガの修行に比べて相当レベルが違うのでしょうか。

**尊師**　厳しいと言えるだろうね。それはだって、今まで二年間、三年間でやらなきゃならなかったことを、そして、できなかったことを、例えば一カ月とかで終わらせてしまうわけだから、それは当然厳しいよ。そこで、その人の今まで積んだすべてのカルマが返ってくると考えていいんじゃないかな。例えば、今、マハームドラー成就の修行の指導についている正悟師がいるよね。そして、その正悟師よりも下の

ステージである修行者たちが、「究竟の瞑想」に入ってカルマが離れると、指導していた正悟師の方にジンマシンが出るからね。これは、ケイマやマハー・マーヤが、サクラーとか、ミラレパとか、マンジュシュリーが成就する前に指導していて経験したこと。もちろんわたしも経験していること。それから、成就した後は、サクラーも経験しているし、ミラレパも経験している。指導している者と、指導されている者の間にそれだけカルマの移行が起きるんだね。それほど激しいんだよ。マイトレーヤなんかは、完全に惛眠に持ち込まれたしね。それくらい、指導する側とされる側には差があるんだよ。

しかし、マハームドラーの成就者は素晴らしいね。普通だったら瞑想をやっているところへ行ってジンマシンになったら嫌がるよ。そう思わないか。ところが「あ、ジンマシンだ、カルマが落ちて良かったな」と思いながら指導ができるというのは、もう別の生命体だと考えた方がいいんじゃないかね。

**編集部**　しかし、マハームドラーの修行においては、指導している側がクンダリニー・ヨーガレベルだったら、どうにもならないでしょうね。

**尊師**　もちろん、そうだ。一つ面白い例があって、クンダリニー・ヨーガを成就しているJが、一回だけ数時間指導したことがあるんだよ。途端にその日、修行者の性欲のカルマを受けて夢精をしたからね。それだけ、世界が、レベルが違うわけだね。やはり、ステージの下の者が上を指導できないというのが原則だよね。

### ◎地球全体のポワ瞑想が背景となって

**編集部**　今までのマハームドラーの成就を振り返ってみると、ケイマ正大師の場合、ヨーガ的な成就で、心を止めていく方法であったと。マハー・マーヤ正悟師の場合は、尊師は仏教的という表現をなさっておられたわけですが、心で思ったことが即現象化していく。マイトレーヤ正悟師の場合は、瞬時にして煩悩を破壊する、チベット密教ニンマ派的なポワの技法に近いものだと言われていましたが、今回のシステムによる成就というのはどのようなものなのでしょうか。

**尊師**　ヨーガ、仏教、密教的なもの、三つが重なっていると考えていいと思うね。だから、今、マハー・マーヤ、マハー・ケイマ、マイトレーヤが、同じ修行をして

いるけれども、それはマハームドラーの成就を固めているわけだね。

**編集部**　これまでマハームドラーを成就された方々の成就を参考に、修行の欠けの部分を、その後に続く者たちの修行において、どんどん補っていかれたとおっしゃられていましたが、そういう意味で、お三方の成就が非常に、あとに続く人たちの修行に生かされているということなんでしょうか。

**尊師**　というよりも、二月の終わりから、わたしは地球全体をポワしようと考えて、その瞑想に入っているわけだけれども、やっぱりその効果が出だしてきているんじゃないかという方が近いと思います。例えば、マハームドラー成就の修行に使っているテープを聞いてわかるとおり、あの中で、『南伝大蔵経』は土台にはなっているけれども、あくまでも土台なんだね。まあ、例を挙げるならば、『南伝大蔵経』の中で、三つの「慢（まん）」があるという記述があるとしよう。それは、何で、何で、何でと三つあって、『南伝』ではもうそれ以上は説明していない。それに対して、わたしは深く突っ込んで、例えば現代に合った法に変えてしまう。その作業を行なっているわけだね。しかも、例えば、「欲如意足（よくにょいそく）」、あるいは「決意」といった今回の修

行で使っている詞章の内容を見たらわかるとおり、『南伝大蔵経』は使われてはいるけれども、今までのオウム真理教の教義の流れからは外れていないんだよね。これは、まさにわたしのポワの瞑想が結果を出してきて、神々――シヴァ大神および諸々の覚者（かくしゃ）が、データをどんどん与えてくださっている証拠だと思うんだよ。ただ、今言ったとおり、わたしの瞑想は五分の一しか終わっていないから、あと瞑想回数が五分の四終わった段階で、どういう変化が出るかなと考えたら、ものすごくいろんな、ポワする瞑想システムというのができるんじゃないかね。

### ◎開かれる神通の世界

**編集部**　そして、今回の成就においては、非常に神通も深まるということですね。

**尊師**　そうです。神秘的な力もつくということだね。例えば、面白い例は、出家したサマナで心が揺れている人がいるよね。その人たちに大師がいくら法を説いても駄目だったのが、正悟師が数語話すだけで、もうポッと心が変わります。あれはまさにポワですよ。もっと面白い例は、今回熊本へわたしは行ったんだけど、それま

でかなり揺れていたサマナがいて、修行も全くしなかったというんだけど、わたしが行っただけでもうコロッと変わって、二日目からみんな修行し出したからね。それから、もう一つは、熊本に行く前まで、例えば、今、富士でマハームドラーの修行をしているプンナ大師は、十三時間以上連続して蓮華座を組み続けたわけだけど、わたしが熊本に行ったその日から、一時間に三回足を組み替えるという状態が起きている。つまり、わたしの意識下にある状態と、そうじゃない状態とでは違うというか、これは釈迦牟尼の教団でも起きた現象だけどね。つまり、わたしがいるときは、神々の祝福があるが、いなくなるとなくなってしまうと。そういうことだと思うね。

**編集部**　これからは、仏典に記されているような神通の世界が現実化しそうですね。

## ◎生きるか死ぬか——帰依を土台として

**編集部**　わたしたちは、マハームドラーと聞くと、やはり非常にケイマ正大師の成就が印象的で、そこでは死ぬか生きるか、涅槃するかしないかというお話がよく出

てきていたんですけれど。

**尊師**　それは、ケイマに限らず、マハー・マーヤもマイトレーヤも、苦の極限状態による緊張を体験してきているんだよ。マハームドラーの修行というのは、実際に〝修行〟をしているときだけが修行じゃないからね。成就に至るプロセスの中で、必ずそれを通過しているんだ。そして、今の人たちだってたくさんあるよ、そういう例は。Mの例を話すならば、もう成就できなくて、バットと包丁と、それから包帯と消毒薬を用意して、指を切ってカルマを落として成就しようとしたからね。精神的にはそこまで追い込まれるわけだから。あるいはPの場合は、座り続けているとお尻から膿がどんどん出てくる。それでも、下に何にも敷かないで座り続けるとかね。これは、まさにもう地獄ですよ。その人の持っている地獄のカルマが出てきているんだね。

　そういう例はたくさんあるよ。つまり、それを合理的に落としていっているのが、今の修行システムだよね。ミラレパ正悟師に関して言えば、ヴァジラヤーナの帰依の修行をやらせるときに、逃げ出そうとしたって話だから。だから、成就してから

ミラレパは、「逃げ出しさえしなければ成就するんだ」と言っていたんだね。それだけ、恐怖心があるんだよね。死ぬか生きるかの修行――まさにそのとおりです。だから、例えば、帰依のできていない者を放り込んでも、揺れてダメになると。例えば、今、次に修行に入ろうとしているUとか、Mに対しては、そういう欠点を補うために、表層意識から帰依を培わせているという状態だよ。わたしは、Vが成就が早いんじゃないかと思うのは、近頃、マンジュシュリーたちと同じことを言い出しているんだね。「すべては帰依である」と。ほかにはないんだよ。帰依というのは、四預流支（ししょるし）――つまり、できるだけグルを意識し、グルに接すること。オウム真理教の教義をデータとして入れる。教義に従って考える。教義に従って実行するということの実践だから。

**編集部**　でも、四預流支というのは難しいですね。厳密に言えば、例えばわたしたちが寝ること食べること、これ自体も生命欲という煩悩を背景とした行為で、自己のすべてを投げ出す帰依ではないわけですから。

**尊師**　そうそう。

**編集部**　だから、すごく難しいなと思います。

### ◎苦しみに打ち勝つ心の強さ

**尊師**　ただ、心がそれを欲求していれば、必ず傾くんです。今は十時間寝ていても、あるいは八時間寝ていても、帰依を培おう培おうと努力して、睡眠を減らそうとすれば、必ず培えます。必ず解脱します。要するに、これはマハームドラーの成就者がみんな言っていたことだけど、なしたことしか返ってこないと。サクラーの前半の修行は、まさに地獄だったからね。だって、カルマが一気に出てきて一分も蓮華座が組めない状態になった。その人間が、一週間後には、もう六時間とか八時間とか蓮華座を組む。そのとき、どれくらいの苦しみがあると思うか。そして、それを一週間で達成させられる。いかに、心が強くなきゃならないか。しかも、もっと変化が激しいのは、意識が変わって蓮華座の痛みがポッと消える。あるいは、また意識が変わって痛みがポッと出てくるとかね。その状態までもっていく。そして、最後はそれが全部消えてしまう。

**編集部**　全部消えるというのは。

**尊師**　痛みが完全に消えてしまうんです。本来は、こういう荒っぽい修行を実践する必要はないんだ。例えば、かの釈迦牟尼の弟子たちは、実際の生活上で聖なる八支の道を実践することによって、カルマを落としていって、皆が完全に、身において、口において、心において、善業のみをお積みになった。そして、座ると。だから、第一静慮のときに、遠離から生じる喜と楽によって座れるんだよ。ところが、今のサマナは、まだ日頃の修行ができていないから、口のカルマ、心のカルマ、身のカルマによって、座ると痛い、苦しいということになるわけだね。

## ◎瞑想でわかるカルマの理法

**編集部**　やはり、釈迦牟尼の教団では戒の実践というのは、すごく厳しくなされていたという気がしますね。

**尊師**　そうですね。つまり、なしたことしか返ってこないんだから、それを瞑想上経験するか、否かだよね。釈迦牟尼の弟子が、なぜカルマの理法に対して徹底的に

確信を持ったかというと、なしたことが全部サマディで返ってくるんだよ。それは、サマディが実際できていて、集中および観察ができるから、それがわかるんだよね。例えばね、一つの例としては、ムーラダーラ・チャクラがすごく痛くなるとしようじゃないか。意識をサハスラーラ・チャクラとかアージュニャー・チャクラに移し換えれば、痛みは消えると。ところが、それが今度はムーラダーラに意識を集中し、意識状態がムーラダーラ・チャクラにあれば、ものすごく痛みが増えるんです。これは何かというと、痛みそのものは無常というか、変化するというか——意識で決まるということの一つの証明であると言えるね。ところがサマディによる集中と観察ができなかったら、そういうのはわからないよね。だから、マハームドラーの成就は簡単であると。身・口・意の善業をひたすら積めばいいと。こんな簡単なことはなかろうが。あとは、四預流支の実践をひたすら行なえばいいと。

**編集部**　仏典を読んでいてすごく感じるのは、そのサマディに入るとか、定に入るとか、まあいろいろ表現はありますけど、その言葉がすごく多いですね。やはり、しょっちゅうそういう状態をつくっていたということですか。

**尊師**　一日三時間の瞑想を三回やっていたわけでしょ。だから、今のわたしの弟子たちでマハームドラーを成就した人たちは、それを十二時間割いてやっているわけだよね。そこでは、よりいっそうカルマの理法に対する確信が出てくるでしょう。先日のマハームドラー成就式典での三人の成就者たちの言葉の内容を聞いていたらわかるとおり、自分自身を赤裸々に表現して、すごく印象が強かったでしょう。そう思わないか。

**編集部**　ええ、三人ともすごく説得力ありましたね。

**尊師**　もう、クンダリニー・ヨーガの成就と、全然次元が違うという感じがするでしょう。

**編集部**　それは感じます。マンジュシュリー正悟師が成就なさって、道場に指導で来られたときは、あの声を聞いてびっくりしましたね。あの声の通り具合。何か今までと違って、スケールの大きさというか、深さみたいなのが出てきている感じがしましたね。

**尊師**　わたしはサクラーなんか、まさにポワされたと思うね。成就したら、声とか

動きとか、全然変わっちゃったよね、そう思わないか。

**編集部**　そうですね。修行を指導しているのを聞いていると、なんか前よりすごく厳しさというのが出てきましたし。

**尊師**　声が通るでしょ。ドーンと。

**編集部**　鋭さが出てますね。

## ◎成就の状態を決める功徳と持戒

**編集部**　このシステムでのマハームドラーの成就には、個人的な特徴というのはないんですか。

**尊師**　個人的な特徴っていうのは、出ません。

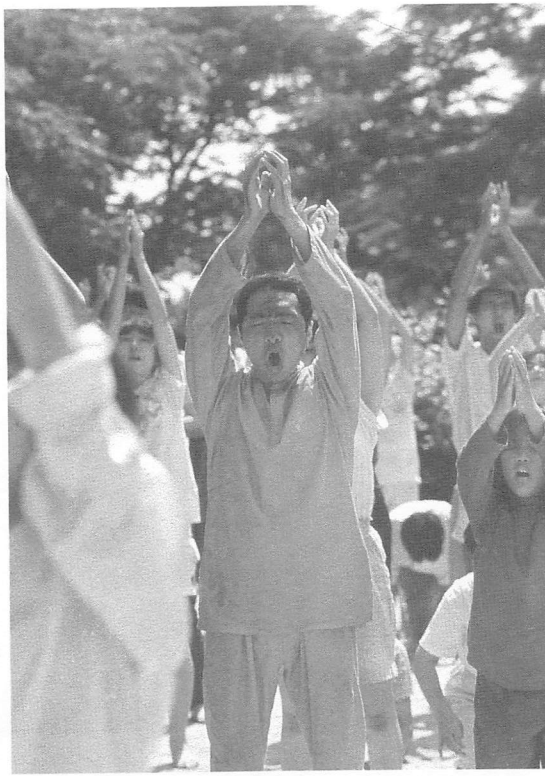
**編集部**　本来は、ないものなんですよね。個人的な特徴というのは。

**尊師**　どういう意味での個人的特徴かというと難しい問題で、サーリプッタとマハーモッガッラーナ※は、サーリプッタは智慧に優れ、マハーモッガッラーナは神通に優れていたという例があるよね。そして、二人ともマハームドラーの成就者――

※サーリプッタ、マハーモッガッラーナ：サキャ神賢（仏陀釈迦牟尼）の二大弟子

供養値魂だから、そういう意味での違いはあるだろうけど、そうではなくて、体験上の違いというものはない。必ずみんな同じ体験をしています。

ただね、一つ言っておきたいのは、マハームドラーっていうのは、要するに「明」と「解脱」なんですよ。また、別の言い方をすれば、「正観」と「止」の達成なんですね。明というのは、その人がどれくらいの功徳を積んでいたか。解脱というのは、その人がどれくらい煩悩に対して戒を守っていたかということがポイントとなる。それによって、例えば、戒律の守り具合が正確かどうかによって、寂止の状態が違ってくる。あるいは、いかに功徳を積んでいたかどうかによって、正観が違ってくるということが言えるんじゃないかね。だから、まあ、マンジュシュリーもミラレパもサクラーも、それぞれ徳を積んで、ある程度戒律を守っていたわけだけど、マンジュシュリーは寂止に優れている。サクラーとミラレパについては、そういう意味での功徳、正観に優れているということになるんじゃないかね。この両方を、その後完璧に実践し終わることが、最終解脱だと考えていいと思います。いいですか。



## ◎ひたすら思索の訓練を

**編集部**　マハームドラー成就において、功徳と帰依が必要だということは、以前からおっしゃっていたんですけれども、それに加えて、思索力が必要だというように言われていたんですが、現在の修行システムではそれはどうなんでしょう。

**尊師**　いや、それはマハームドラーの修行に入ったらひたすらやらされます。まずは、グルはどういう思索をしているかという、思索の訓練からひたすらやらされます。それがある段階に達したら、今度は自分でそのデータを記憶して、繰り返し思索するという訓練をやらされます。それは同じですよ。つまり、自分の中にないものをつくっていくわけだから。

**編集部**　この前お聞きしたとき、今の修行形態で成就した方が、以前のお三方よりも、かなり煩悩に対して強い成就であるというように言われたと思うんですけれど。

**尊師**　それは、ヨーガ、仏教、密教的なものの三つを備えているからでしょう。ただし、強い成就ではあるけども、その前の三名の成就者の方が、達成した価値があるとわたしは思うね。つまり、どういうことかというと、例えば、ヘリコプターで

五千メートルの山に登るのと、ザイルで登るのとの違いであると。初めの三名は、ザイルを使って登ったと。今の人たちは、ヘリコプターに乗って上に上がっていくというか。逆の言い方をすれば、そういう土台を作ってきた人たちのカルマというのは、評価すべきだと思うね。

### ◎釈迦牟尼教団の再来——大神通の集団へ

**編集部**　この間お話があったとおり、今後はマハームドラーの成就者が、各支部に常駐ということになるのでしょうか。

**尊師**　もう既にサクラーは、東京本部に行きましたから、常駐ということになります。

**編集部**　それによって、信徒さん、あるいはこれからオウム真理教に入ろうとしている人たちが得られるメリットというのは。

**尊師**　例えば、相談事が神秘的な力によって解決するというのがずいぶん出てくるだろうね。そして、もっと信徒さんの信と帰依が培えるんじゃないか。今までの大

師より、マハームドラーの成就者に関してはレベルが百倍高いと見ていいと思うね。それは、まあ実際に正悟師が各支部で活動した結果がどうなるかということをわたしは楽しみにしているけどね。そして、一週間ごとに交替して担当させようと思っている。というのは、次のステージに進むための瞑想法に入らなくてはならないから。ひたすら功徳と瞑想とを積ませて、まあ三年後くらいには、本当に大神通の集団、大偉神力の集団、それから大解脱の集団にしたいね。

**編集部**　仏典の中で、釈迦牟尼の教団では、みんな神通をばんばん発揮していました。マハーモッガッラーナと、もう一人のビックが、かなり高い木の枝にある、柿か何かを神通で簡単に取ってしまった例があって、そんなことで神通を使ってはいけないということで釈迦牟尼が禁じた例がありますけれども、オウム真理教でもそんなエピソードが出てくるかもしれませんね。

**尊師**　それはどんどん出てきますよ。そのレベルまでいくのは、案外早いと思うね。ただ、そこに行くまでには、まだ徳が足りないんだよ。すべては徳だから。マハームドラーの完成というのは、十号の完成――つまり供養値魂、最上正覚（さいじょうしょうがく）、智徳成（ちとくじょう）

就者、最上善逝、世間解、無上士、丈夫調御者、天人師、覚者、世尊ということの完成だからね。

**編集部**　これからが楽しみですね。今日は、本当にありがとうございました。

（『マハーヤーナ』No.34　一九九〇年長月号　オウム出版　所収）

# 限りないグルの愛に支えられて

## ——たどり着いた「阿羅漢（あらはん）」の境地

マンジュシュリー・ミトラ正悟師

麻原尊師が、わたしに出家を許し、弟子として受け入れてくださってから三年が経ちました。この世に生を受けてから、二十数年間の俗世間での煩悩的な生活に比べて、サマナとしてのこの三年間はなんと充実し、喜びに満ちあふれていたことでしょう。尊師は真理の法を説き、この宇宙の実相、カルマの理法、そして、わたしたちの生まれてきた意味合いを教えてくださいました。

わたしは尊師の法に触れ、真理の道を歩むことを決意したのでした。そして、尊師はCSI（科学班）でのワークをはじめとして、数多くの功徳を積むチャンスを与えてくださり、また、修行の機会を与えてくださいました。今思い返せば、日々

のワークの結果は口にするのも恥ずかしいような、失敗、失敗、また失敗の連続でした。しかし、尊師は、「実際に失敗をさせないと弟子は成長しない」とおっしゃり、ときには、ご自身の生命の危険を顧みず、わたしに失敗の経験をさせてくださったのです。何と広い心でしょうか、何と深い愛でしょうか。また、どうしようもないわたしのけがれを取り去るために、尊師の貴重な、尊師の高い次元のエネルギーを注ぎ、あまたのイニシエーションを施してくださいました。

その結果、無智に覆われたわたしの心にも、少しずつ真理というものの片鱗（へんりん）が芽生えてきました。

「なぜ結果を出すことができないのか」「なぜ正しい判断ができないのか」――思い悩むわたしに、尊師は、すべては心の現われであること、心に貪り、嫌悪、無智がある限り、物事をありのままに見つめることはできないことを説き明かしてくださいました。

わたしは痛切に心の浄化を願いました。

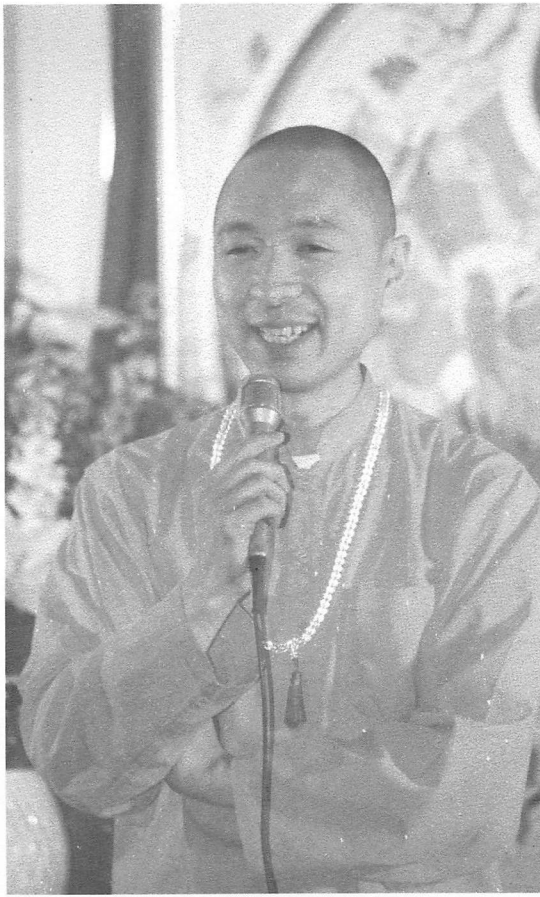
マハームドラー成就に向けての極厳修行が与えられたのは、ちょうどそのときで

した。修行プログラムは一日二十四時間、ひたすら修行のみという厳しいものでしたが、そこで得られたものは、わたしの想像を遥かに超えたものでした。

修行に入って三日目、突然心が変わりました。つらい修行がつらくなくなり、喜びに変わりました。同じ部屋で修行をしている大師に対する闘争心が消え、みんなで全力で修行しよう、励まし合おうという気持ちが起こりました。救済に対する強い欲求が起こりました。雑念のない、全く平静な心が現われました。鮮明な意識状態が連続するようになりました。

尊師から、その意識の連続状態こそ供養値魂の状態、色と空が同一の状態、不死を得た状態だと教えていただき、改めて真理の素晴らしさ、二千五百年前に仏陀釈迦牟尼の説かれた真理と同じものが、ただ尊師にひたすらついて修行し続けることにより、凡夫であったわたしにも、もたらされたのだという実感、オウム真理教の教義に対する確信が得られました。

わたくし、このけがれた魂に、マハームドラーの成就を与えるために、尊師は、どれだけのエネルギーを使われたことでしょう。どれだけたくさんのけがれたカル



マを引き受けてくださったことでしょう。そして、どれほどご自身の身体を痛められたことでしょう。

修行することの素晴らしさ。帰依することの素晴らしさ。身・口・意の悪業を滅し、善業を積むことの素晴らしさ。持戒を守ることの素晴らしさ。自己の限界を越え努力することの素晴らしさ。瞑想し智慧の光を得ることの素晴らしさ。自己の煩悩を滅し、解脱することの素晴らしさ。不死を得ることの素晴らしさ。一本の光り輝く真理の道を歩くことの素晴らしさ。一人でも多くの人に真理の道を歩いてもらう素晴らしさ。このようなたくさんの素晴らしい真理を与えてくださった、かけがえのないグル麻原尊師に感謝し、帰依いたします。そして、わたしは未来際（みらいさい）にわたって、自己の永遠の目標として、尊師についていきたいと思います。

（一九九〇年八月四日　マハームドラー成就式典にて）

# 大乗の入り口に立って

## ——智慧は四無量心の現われだった

マンジュシュリー・ミトラ正大師

思えばわたしがマハームドラーの成就を与えていただいたのはちょうど今から四年前になります。趣味的性格が強く、自分の好きなことばかりしてきたわたしに対し、うまく功徳の積める課題を与えていただき、度重なるイニシエーションによって、シヴァ大神とすべての真理勝者方と同体である尊師の貴重なエネルギーを惜しげもなく与えていただいたおかげで、わたしの中にも少しずつ真理のデータが入ってきたのでしょう。

当時の極厳修行では気持ちよく寂静の境地を体験させていただきました。尊師と先達の正悟師、正大師の方に導かれ、供養値魂の状態に到達させていただいたわけ

です。

しかし極厳修行から出たわたくしは、なかなか思うように救済活動に対して貢献することができませんでした。ワークにおいてなかなか結果が出せないのです。計画には着手したものの失敗したり、途中で立ち消えになったものが多く、また貪りによって多くの建物を所有し、多くの機械や材料を購入し、それを活用せず、揚げ句には自分のあずかった貴重な出家修行者に適切な指導を行なわなかったために、何人も下向させてしまいました。これらのことはすべてわたしに責任があります。わたしの四無量心のなさと智慧のなさに、自己の平安を周りに与えず自分一人がワンマンプレーをしていたのです。

尊師は肉体は一つでも一度に無数の救済活動をなされています。サマナを解脱させ、信徒を導き、出版・作曲・海外布教・テレビ出演、大きな現象を動かしながらも、サマナのほんの小さな揺れを見逃さず、法則を個々に説き、自己の肉体、生命を顧みず、獅子奮迅の活動を淡々となさっているのです。ああ、狭量な自分と比べなんと差のあることでしょう。やはりわたしのグルはすごい。

わたしは貪りをザンゲします。四無量心のなさをザンゲします。そして自己の心のけがれによって救済を遅らせたことをザンゲします。

最近やっと四つの無量心と智慧が全く同じであることに少しずつ気づいてきました。一つの計画を完成させるためにも非常に多くの要因を考え実現しなくてはなりません。そのためには同時にたくさんの対象を扱う能力と思考のスピードアップが必要なのです。これが四無量心の現われそのものであることは尊師が前々から説いておられました。四無量心の増大に伴って化身の数も増え、また瞬時に答えを得ることができるようになるのです。

この人間界は低位の世界からきた魂と天からきた魂が出会うところです。しかし魂の密度から考えても、人間界に存在するのはほとんどが悪趣からきた魂であるということは明らかです。これらの魂は人間界でただ悪業を積み以前よりも低い苦しみの多い世界に落ちていくことでしょう。それを防ぐためには救済の曼陀羅を完成させるしかありません。……

（一九九五年八月十日　大乗のヨーガ成就式典にて）

# 第二章 グルと弟子

## ——偉大なるグルの肖像

尊師……自分を完全に委ねることのできる唯一の存在。よく学校などで、「尊敬できる人はだれですか?」と質問されますけれども、わたしはプライドが高いので、だれもいなかったんですね。「両親」とか言っても、それは非常に嘘くさいし、「アインシュタイン」とか言っても、どうも実感がないですし。初めて尊師に会って、その深さとか豊かさに触れて、「ああ、これはすべて投げ出してしまえる存在だな」と感じました。

(『マハーヤーナ』No.32 オウム出版
座談会「素晴らしきグル麻原　命分け与える真実の愛」より)

# 偉大なる救済者、尊師

## ——グルを語る

マンジュシュリー・ミトラ正悟師

### ◎すべてを供養する

わたしは、尊師が弟子や信徒さんに対応されるところを間近に見る機会が多いのですが、そういう場面を通じて、尊師の菩薩の心、菩薩としてのお姿に触れさせていただいています。そんな中でいつも感じるのは、尊師が、ご自身の肉体とか、生命とか、エネルギーとか、そういったものに全く頓着されないということです。

釈迦牟尼の前生でも、例えばトラに自分の身を供養したとか、他のために自分を供養したとかという話がいろいろありますけど、尊師も菩薩の修行ということで、常にご自分を他のために供養することを考えておられるんです。ですから、何の執

着もないと。ただ、そばで見ているわたしたちはハラハラするわけですが……。要するに、尊師の救済活動すべてが、いかに自分を捨てるか、いかに供養するかということなんですね。

例えば、直接相手に触れて解脱者の浄化された高いエネルギーを与えるという、シャクティーパットをずっとされていましたよね。

最後のシャクティーパット・ツアーは、わたしもご一緒して各支部を回ったんですが、はっきり言って、一人にするだけで相当エネルギーをロスされるんですね。そして、エネルギーを放出されるだけでなくて、相手のカルマを引き受けますから、一気にバーッと肩が冷えたり、湿疹ができたりするんです。そして、どんどん顔色が黒ずんでくると。その反対に、信徒さんは明るく元気になって、「ああ、光が見えた」とおっしゃったり、あるいは振動が起きて悦の状態になったりして帰っていかれるんです。

シャクティーパットの最後の方では、もう生きるか死ぬかという状態で、ほんとに命懸けでした。例えば、全く食物を消化しない状態になられて、意志の力だけで

もっているという感じでした。それでも、信徒さんの前では絶対そういう様子をお見せにならないで説法されたりするんですね。

わたしたち弟子の場合は修行をしているから、まだ一般の人に比べるとけがれが少ないと思うんですが、それでも同じ部屋にいるだけで、実際には尊師は非常に苦しく感じられているみたいなんです。要するに、最終解脱をされている尊師の清らかさというのは特別でして、この世にとどまっている方が苦しいというか、涅槃する方がよっぽど楽だと。

つまり、尊師は最終的な解脱をされ、あらゆる煩悩から離れておられるので、いつでも自由に肉体を捨てて、マハー・ニルヴァーナという最高のところに行くことがおできになる。そういう凡人の想像を超えた状態になっておられるんです。ですから、肉体を持ってこの世界にいる方が苦しいわけですね。そういう特殊な状態であるにもかかわらず、この人間界にとどまっておられるのは、この世の魂を救済するということを深い次元で発願されていらっしゃるからなんです。だから、実際は生活等のすべてが苦しいんですね。カルマをどんどん引き受けて、周りを浄化して

……。存在するだけでそういう状態になるわけです。

例えば、この富士の道場の気候も変わってしまいましたよね。初め道場を建設していたころは、雨が多くて冷え冷えとしていて、霧ばっかりの所だったんですけど、今はもう穏やかで、お天気が多くて、そして周りの産業も発展してきたと。地震も治まったと。尊師がいらっしゃるだけで、それだけ周りに好影響があるんです。

## ◎尊師の庇護のもとに

ところで尊師は、弟子に対しては解脱をさせるということで、これはシャクティーパット以上にたくさんカルマを引き受けられます。例えば、わたしがクンダリニー・ヨーガの解脱をさせていただいたときがそうでしたけれども、アナハタ・チャクラのけがれを取ってくださって、それによって尊師は寝込まれてしまいました。もう何人にもそういうことをやっておられるんです。

最近の記憶にあることなんですが、クンダリニー・ヨーガとマハームドラーの修行が、道場とサティアン・ビルと、両方で行なわれていますよね。で、尊師は一日

中、ひたすら瞑想および供養法をされているんです。その瞑想によって得られた尊師のエネルギーがあってこそ、修行している者たちの修行が進むわけですが、修行者の人数が多くなってきたころ、突然尊師に呼ばれたんです。そして、お部屋に入ってびっくりしたんですよ。お部屋の隅の方に尊師が転がっておられるんです。椅子の傍らに斜めになって。そして、

「わしは動けないんだよ」

と。

「どうしたんですか」

とお尋ねしたら、

「まるで呪詛をかけられたみたいに動けないんだ」

とおっしゃるんですね。

それで、ちょっと修行している人たちに修行をやめてもらったら、だんだん元に戻られたと。それだけエネルギーの交換というのがあるんですね。

「もうちょっと修行するメンバーを減らしましょうか」

と申し上げたんですが、

「これくらいの供養ができなくて、わたしは菩薩として救済する意味がない」

とおっしゃって、またご自身の修行を続けられました。

また、弟子たちの修行を見てわかるように、たくさんの人が、一週間くらい修行して光がどんどん見えてくるといった体験をするわけですが、これは尊師のエネルギーがないと、尊師が意思されないとあり得ないわけですね。例えば、尊師が九州に移動されたら、とたんに道場で修行している人たちの体験がなくなってしまうとか。

つまり逆に言えば、弟子たちは——もちろん信徒さんも含めてですけど——いつも尊師のエネルギーによって守られているということですね。そして、尊師は弟子たちにエネルギーを与えるために、瞑想をされ、修行をされるわけです。そして、弟子を何とか導こうとしてくださるんです。

## ◎魂の師として

その指導の仕方というのも、尊師は非常に巧みでいらっしゃいます。

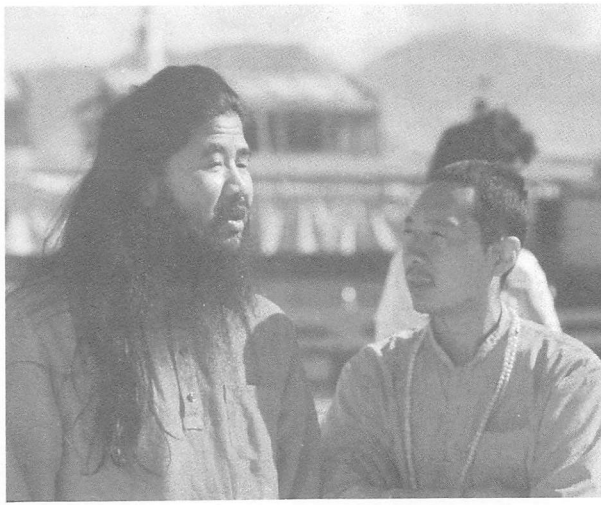
これは、尊師とご一緒にエジプトに行ったときのことなんですが、わたしが運転手に指図する役目を任されていたんです。で、そのエジプト人の運転手に、「ここが現在地点で、ここが目的地点だから、このルートを通って行きなさい」という具合に説明して、相手も「わかった」ということで、安心していましたら、とんでもない所に連れていかれまして、非常に時間的にロスをしたんですけれども、彼は地図というものが理解できなかったんですね。そして、彼が地図を理解できないということをわたしが理解できなかったわけです。

ところが、尊師はどうなさるかというと、一つ次の地点をひたすら連呼されるんです。それなら運転手もわかるんです。そして次にそこまで行ったら、もう一歩だけ次の地点を連呼すると。そうすると、標識が出ていたり、町の人に聞いたりしてわかるわけですね。そうして、無智なエジプト人でも何とか最終地点まで行けるんです。

そして、わたしたち弟子も、これと同じように尊師に指導していただいているんですね。修行の最終地点というのは、説明して理解できるものじゃないわけですよね。ですから、例えば立位礼拝の修行をひたすらやって光を見たら、ラージャ・ヨーガの成就が得られますよと。あるいはこのマントラ、ザンゲの詞章をひたすら唱えれば心が浄化されますよと。こうやって本当に根気強く一歩一歩導いてくださっている。そして、どんな人間も、最終地点（マハー・ニルヴァーナ）まで間違いなく導いてくださる。それが尊師のすごいところだと思いますし、また、そういう心遣いこそ、本当の菩薩の愛だと思いますね。

## ◎すべては他のために

尊師の一日の行動を拝見しますと、ご自分のための時間というのはありません。弟子の修行を進めるために瞑想テープの吹き込みを行なわれたり、毎日神々に供養をされたりしています。そのために、ひたすら精神集中をなさって、多大な時間をとっておられます。そして、食事は一日一回で非常に量も少ないと。



そして、弟子にいつもエネルギーを与えていらっしゃるから、ベストの状態がないんですね。死人と病人の間というか、もっとエネルギーを温存して修行なさってくださったらありがたいんですが、そこは菩薩の発願といいますか、尊師なりのお考えがあって、常にエネルギーを放出されているんです。

ですから、心配なのは、いつ身を捨てられるかということです。いつ涅槃されてもおかしくない状態だと思います。でも、まだ肉体を捨てるわけにはいかないとおっしゃりながら救済活動をされているというのが今の状態ですね。

例えば、インドに行ったときに、弟子のカルマを受けて半重病人の状態になられまして、意思の力だけでハードなスケジュールの中を回られていたんですね。そのとき、わたしが交通手段の手配をしていたわけですが、尊師が電車で行きたいとおっしゃったのに、わたしが取り違えて炎天下の中を自動車に乗っていただいたんです。ところが、ものすごい暑さで、ますます尊師はひどい状態になられました。しかし尊師は、わたしが自分の無智に気づいて、それを早く消すことができるんだったら、ご自身の身を痛めても構わないということで、暑い自動車の中にずっと乗っておら

れたんです。後で確認したら、車の中に入れておいた体温計がパンクしていましたから、どんなに暑かったかわかると思います。

弟子を成長させるためには、ご自身のお体のことなど顧みられないんです。これは弟子にとっては恐怖ですね。自己を守ろうという心がありませんから。

例えば、釈迦牟尼が入滅（にゅうめつ）されるときの話がありますよね。アーナンダが悪魔にとりつかれて釈迦牟尼に入滅を勧め、釈迦牟尼は弟子が自分を必要としなくなったということで三カ月後に入滅されるわけですが、尊師の場合も、それと同じようなことが起こり得るんですね。尊師は、気球が上に上がっていくようなものですから、わたしたちが意思して、どうぞお見捨てなきようにと、一生懸命綱を引いていないと、すっと離れていかれてしまいます。

実際、そういうことがあります。あまり弟子がグルを意識していないとき、

「最近、何を食べても味覚というものがないんだよ」

とおっしゃることがときどきあるんですが、肉体から離れてきておられるんですね。

ですから、多くの人が尊師にとどまってくださるように意識していなければなら

ないと思います。

（『真理の芽』No.4　一九九〇年十月号　オウム出版　所収）

# 第三章　進化の証

## ――修行がもたらす神秘の力

わたしの場合、まず入信して受けた尊師のシャクティーパットでクンダリニーが覚醒し、人生が一気に変わりました。そして出家し修行を続けることによって、まず超健康、そしてショックに強くなり、交通事故でもケガを全くすることがなくなりました。思念の力が強くなり、強く念じたことは実際に現象化します。また心の平安が得られ、人間界以外の各種の世界を経験することによってこの世界の成り立ちがある程度わかり、智慧（ちえ）が増大しつつあるように思います。

（オウム真理教ラジオ放送「エウアンゲリオン・テス・バシレイアス」一九九四年十二月十一日放送より）

# 変幻自在の世界
## ――瞑想で訪れた愛欲の天界

マンジュシュリー・ミトラ正悟師

功徳を背景とした正しい修行というものは、わたしたちの意識を高い世界へと導き、アストラルやコーザルのさまざまな体験をさせてくれるものです。わたしがこれからお話しするのも、解脱へ向けて極厳修行をしていたときのアストラル体験です。

＊　＊　＊

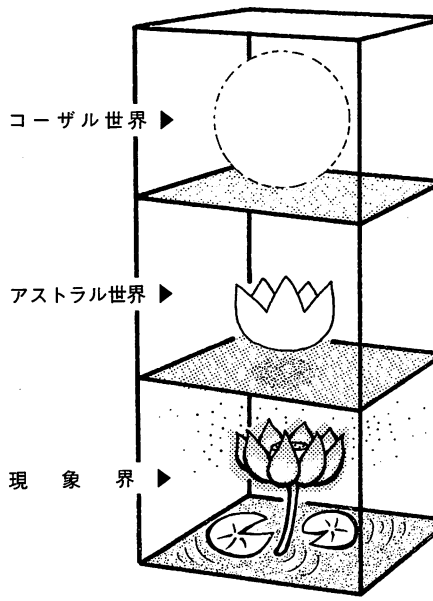
そのときわたしは、クンダリニー・ヨーガの成就を目指して厳しい修行をしてい

ました。激しいムドラーを行なったあとでシャヴァアーサナをとると、突然周りの世界が変わってしまったのです。

その世界というのは、金色に近いオレンジ色と紫色の光が満ちているきれいな世界で、驚くほど巨大な山がそびえ立っていました。その山の形は普通の山よりもかなり鋭角でとがっていました。そして、オレンジ色と紫色の光は、その山の方から射してきているような感じを受けたのです。

わたしは、ちょうど街の交差点のような所に立っていて、そのわたしの目の前を、たくさんの人が乗り物に乗ってスーッと空中を走っていきます。その乗り物は竹馬（またがる方の竹馬）に似た形でしたが、タイヤみたいなものはなく、エンジンがあるようにも見えませんでした。そして、地上一メートルくらいの所を飛び交っているのです。衝突することもなく、非常にスムーズに動いていました。

「ああ、面白いな。これはやっぱり使わんといかんな」と思ったわたしは、どこからかそれと同じ物を持ってきてまたがりました。そして、気持ち良くスーッと移動していくと、三階建ての家のようなものがあったので、竹馬から降りて中に入っ




この世界の現象は、「データの世界」コーザル世界からアストラル世界へ降りたデータが、この世で現象化したものである。

## 三つの世界

てみることにしました。ドアを開けた記憶はないのですが、不思議とスッと中に入れました。

中に入ってみると、なんとそこには、白い服を着た〝わたし〟がいたのです。その人を見た瞬間に、「これは自分に違いない」という強い確信がわき上がってきたのでした。

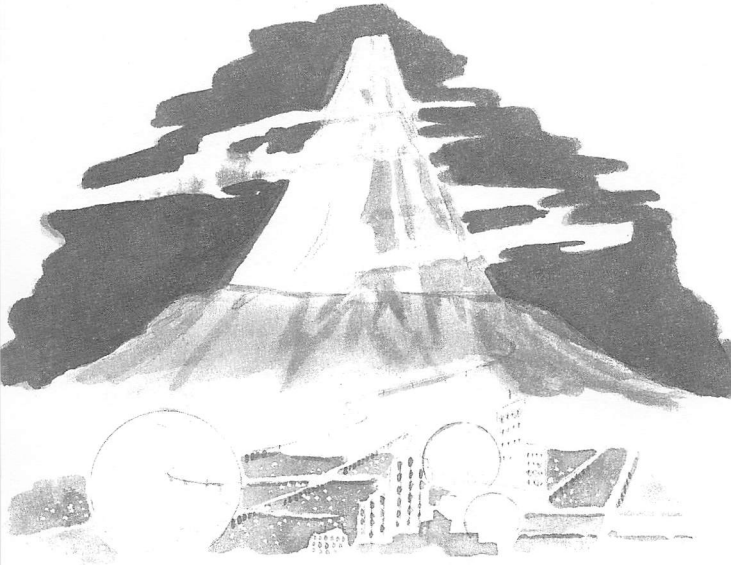
その〝わたし〟は頭が非常に大きく、きれいな顔立ちをしていて、科学の研究をしているみたいでした。わたしはその人と少し話をしました。残念ながら、そのときの話の内容は忘れてしまいましたが……。

このときのアストラル体験を尊師にお話しすると、

「それは天界である。その非常に高くてとがった山というのは、スメール山だね」と教えてくださいました。

スメール山というのは、天界にあるとされる山のことで、その高さは標高八四〇〇〇ヨージャナ（約一六〇万キロメートル）もあるといわれています。

そのスメール山をちょっと見上げているという状態からして、わたしが行った天



界は、それほど高い天界ではなかったようです。科学的なアイテムを使っていることから考えても、そうだと思われます。というのは、それよりもっと高い天界では、物質を使わずに思念の力だけで移動したり、自分自身がいろいろ変化したりすることができるのですから。

実際、わたしが経験した創造満足天（楽変化天）は、まさに自在に自分を変えることができる世界でした。

＊　＊　＊

欲界における天界は、下から、四天王衆天・三十三天・支配流転双生児天・除冷淡天・創造満足天・為他神以神通創造欲望満足従事天というように六つに分けられています。創造満足天は、そのうちの第五番目の天界ですから、天界の中でも高い天界ということができるでしょう。『仏教語大辞典』をひもとくと、創造満足天は「自ら五欲の対象を化作し、それを自ら享受する天」とありますが、果たして実

| | |
|---|---|
| 第六天界 | 為他神以神通創造欲望満足 従 事天 |
| 第五天界 | 創造満足天 |
| 第四天界 | 除冷淡天 |
| 第三天界 | 支配流転双生児天 |
| 第二天界 | 三十三 天 |
| 第一天界 | 四大王天 ┬(東) 堅固王国天<br>├(南) 成長天<br>├(西) 統治変化自在天空天<br>└(北) 守庶民外 傷 天 |

**戯れ堕落天**

際はどうだったでしょうか……。

その日もわたしは、サティアン・ビルで瞑想修行をしていました。エネルギーが強いときは、瞑想に入るとすぐに意識が肉体を離れて高い世界へ飛んでいきますが、あまりエネルギーがないときなどは、人間界の裏側にあるアストラル世界などの体験をしたりします。このときはエネルギー状態も良く、人間界よりも高い世界へ行くことができたのでした。

その世界では、わたしは定まった形を持たず、いろいろと変化することを楽しんでいました。初めは人間のような形をしていましたが、果たしてそれが原形かというと、そう断定することもできません。変身合体ロボみたいに、体のいろいろな部分が引っ込んだり、あるいは出てきたりして、さまざまな形態をとるのです。下半身が車になったり、飛行機になったり、ひどいときには体全体から女性の脚がいくつもバーッと生えたりすることもありました。また、変化するスピードも、ものすごく速いのです。アメーバがいろいろと動きますが、あれを極端に速くしたような感じでした。

その空間には、わたしだけではなくて、そういうものがほかにもいるわけですが、見ていると、やっぱりみんな変化するのです。色も大きさも形もすべて変化して、その変わり身を楽しんでいる。しかも空中でやっているわけです。周りには何もない空間でした。

確かにこの創造満足天というのは大変楽しい世界ですが、相手をいかに幻惑するか、あるいは不思議な形に変身できるかを競っているような印象を受けました。

この体験について尊師にお伺いすると、創造満足天であると教えていただきました。「あそこでは、いつもあんなことをして楽しんでいるのか」と思ってお聞きすると、そのとおりであるということでした。

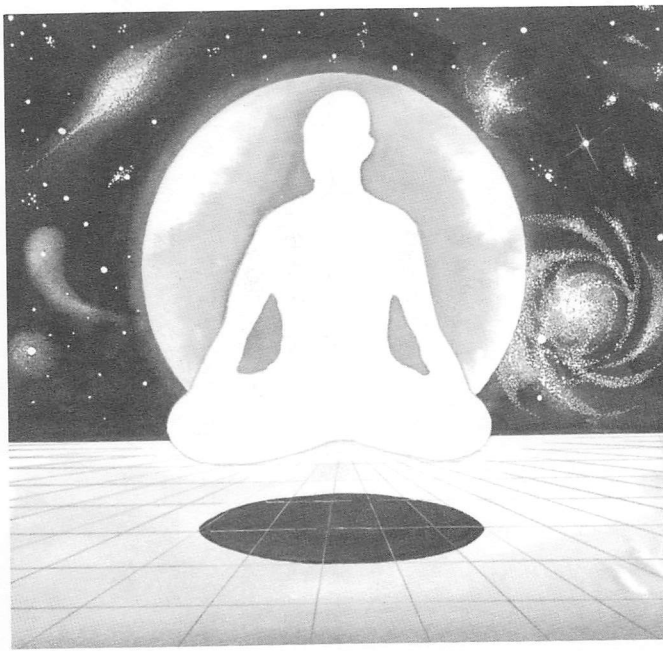
ものすごく楽しい世界であることは事実ですが、ただ単に徳を消耗しているような感じを受けました。わたしが瞑想中にそんな世界に行ってしまうというのは、自分の心の中に楽しみを求める心があったからでしょう。救済という目的から見たら、その程度の世界に行って楽しみ、満足している自分を反省せずにはいられませんでした。

＊　＊　＊

最後にマハームドラーの修行中の体験をお話ししましょう。瞑想中に深い意識状態に入っていくと、肉体の感覚がなくなって、自分がどんどん広がっていったりとか、つぶれてしまったりするような感じになります。

そんな中で、あるとき巨大な水玉になったことがありました。何もない空間に自分がいて、それが白くボワーンとした巨大な水玉になっているのです。しかし、意識が飛んでいるわけではなく、非常に鮮明な状態でした。周りの音もはっきり聞こえています。例えば、隣にいる修行者の呼吸の音までもはっきりと聞こえるのです。この状態は、「水元素の崩壊」といわれるものではないかと思いました。

その状態からもう少し進んで、水玉でも何でもなくなった状態になりました。空間があって、ただそれを観察している状態です。ヴィジョンも何もありません。このときに、いったいこれはどうなっているのかなと考えました。するとどこからともなく、「自分の心の状態を見てみろ」という声が聞こえてきたのです（天耳界の



神の声だそうです)。

そこで自分の心の状態を考えてみると、非常に落ち着いているというか、醒めていながら寂静の状態になっていることがわかりました。醒めていると言っても、普通に醒めているよりも、もっと醒めているような感じであることに気づいたのです。

そのときのわたしの状態とは、肉体もなく、呼吸もない。意識が戻ってきて初めてそこに肉体が存在することを認識するという、いわゆるサマディの状態だったのです。肉体は完全に固定されていて、背筋もピンと伸びていて、そこに意識がバキッとはめられてしまうような感じで戻ってきました。そのときわたしの心は、まるで洗濯したようにすがすがしく、非常に明るくなっていたのです。

＊　＊　＊

皆さんも全力で修行し、高い世界を経験することによって、その延長上に必ず絶対幸福・絶対歓喜の世界があるということを確信することができるでしょう。そし

て、オウム真理教の修行は、必ず皆さんに高い世界の経験をさせてくれるに違いありません。

わたしたちの上には、すべての世界をご存じの麻原尊師がいらっしゃいます。あなたも尊師の築かれた解脱への道を歩いてみませんか。

（初出『真理の芽』No.8 一九九一年二月号 オウム出版／『ザ・超能力秘密の開発法』『麻原彰晃の世界PART3 真実！ 六道輪廻』いずれもオウム出版 所収）

# 阿修羅の世界の発明家

## ——人間界より一つ上位の闘争の世界

マンジュシュリー・ミトラ正悟師

今年（九一年）の一月中旬、わたしは阿蘇山のふもと、オウム真理教シャンバラ精舎にとどまっていました。どこにいてもそうするように、わたしは、ここ阿蘇においてもワークの合間を縫って瞑想を行なっていました。四無量心の瞑想です。

やがて瞑想が深まり、わたしの意識は肉体を離れて、アストラル世界へと入っていきました——。

＊　＊　＊

そこは三階建てのビルディングでした。中はほとんど空っぽで、ガラーンとしていました。わたしはそのビルの一角で何か研究に没頭していました。ある装置を作っていたのです。やっとのことで装置が完成した場面からストーリーが始まりました。これはどうやらわたしの過去世の一つのようです。

——わたしは手にしたリモコンのスイッチを入れました。このリモコンは非常にコンパクトなもので、手のひらの中にすっぽり収まる、ちょうど百円ライターくらいの大きさです。これは装置の末端で、これ以外に本体装置があるはずなのですが、周囲には見当たりません。きっと巨大な装置だとは思うのですが、目に見える範囲には置いてありませんでした。

さて、スイッチを入れると目の前に立体映像が浮かんできました。いえ、目の前だけでなく、ビルディングの中の至る所にいろんな映像が浮かび上がったのです。わたしが研究開発していたのは、どうも立体映像を浮かび上がらせる装置のようです。……少なくともわたしはそのつもりでした。こうして、浮かび上がった立体映像によって、空っぽだったビルの中は、美しい衣類や小物類など、さまざまな珍し

い品々でいっぱいになりました。

もう一度スイッチを押すと、またまたヴィジョンが変わります。今度もまた、先程の様子に勝るとも劣らぬ、珍しく面白そうな品物が並び、ビルディングの中は大変魅力的なデパートのようでした。

わたしはその中の一つ、目の前にある直径二十～三十センチメートルくらいの白いリング状の物に手を伸ばしました。すると、なんとそれに触ることができるのです。これにはわたしの方がびっくりしました。リモコンのスイッチを押して辺りの様子を変化させましたが、手にしたリングは消えずに残っています。

「そうか、自分では立体映像を浮かび上がらせる装置を作ったつもりだったけど、実はこれは空間からアイテムを取り出す装置なのだ。」

わたしはこのとき、功徳の理論を知らず、この科学的な装置がわたしに幸福と繁栄をもたらすものと思い、すっかり有頂天になりました。

わたしは人々を招待することにしました。この世界の住人は地球人と同じような容姿をしていますが、着ているものは現代のわたしたちとは少し違い、古代ギリシャ

かローマのような、ゆったりした薄くて軽い生地でできた服を着ています。

わたしの招待を受けた人たちは、心ゆくまで「ショッピング」を楽しみました。彼らは手にトレイのようなものを持ち、各々が欲しい物を欲しいだけ手に入れることができました。彼らも満足し、わたしも大満足でした。リモコンのスイッチを何度も押して、自在に品物を取り出し、精いっぱいサービスしました。

しかし、やがてスイッチをいくら押しても、魅力的な光景が現われなくなりました。招待された人たちは「何だ何だ」という感じで、いぶかしがりました。わたしは、

「まあ、ちょっと待ってください。じきに良くなりますから」

と弁解をしてスイッチを押しました。しかし、ちっとも魅力的な品物は出てきません。それどころか、ビルの内部の光景はだんだんと悲惨なものになっていきます。

「一体どうしたんだ。」

彼らはだんだんと不満を示し始めました。わたしはなぜこうなるのかわけもわからず、一生懸命弁解しながらスイッチを押しました。

ピッ……。スイッチを押すと壁にひびが走ります。ピッ……。もう一度スイッチを押すと天井にひびが、さらに押し続けるとビルの一角が崩れ、エレベーターは落下し、エレベーターの中に乗っていた人は落下の衝撃で死んでしまいました。

さあ、いよいよこらえ切れなくなった招待客たちはわたしに詰め寄りました。そして、彼らの中の一人が手にした杖のようなものから深紅の光線が放たれ、その真っ赤な光線が見事にわたしの首を撃ち抜きました。わたしはその場で死んでしまったのです……。

その生で修行の経験があるのか、それとも過去世からの修行によるものか……。首を撃たれて死ぬよりも一瞬早く、わたしの意識はその体から抜け出しました。そして離れた所から自分が撃ち抜かれるのを見たのです。

その後、その建物は廃墟のまま保存され、そばに惨事を憂える碑が建てられました。碑には、

「この過ちを二度と繰り返すことのないよう……」

というような文面が刻み込まれています。美しい湖のほとりでした……。

＊　＊　＊

瞑想から肉体に戻り、「ああ、自分は阿蘇にいたんだな。今のはアストラル体験だったんだ」と納得し、安堵に胸をなで下ろしました。そして早速、今見たアストラル・ヴィジョンを尊師にお話ししました。

「位相空間を利用したのだろう。エレベーターはどうなった?」

まだ、わたしがエレベーターの話をしていないのに、尊師はこのように尋ねられました。

「止まっていたエレベーターが落ちました。」

「やっぱりそうか。徳がなくなったんだな。」

つまり、このアストラル・ヴィジョンにおけるエレベーターというのは、功徳の象徴であり、単なるエレベーターではなかったのです。非常に示唆的だと思いました。

徳といえば……。今考えればよくわかるのですが、スイッチを押せども押せども素敵な光景が現われず、むしろ悲惨な光景が展開していったのは、わたしをはじめ、

招待された客たちの功徳がすり減っていったからだと思います。しかし、そのときのわたしは無智に覆われ、功徳の理論を知らず、なぜ魅力的な光景が出てこないのかを理解できませんでした。そして、悲惨な光景が出てきても、それを功徳が減ったためとは考えず、偶然そのような光景が現われるのだとばかり思っていました。

実際は、その装置はその人の功徳に応じた世界と呼応して、今いる世界と、呼応した先の世界とをつなぐ装置だったに違いありません。そして、最初は高い世界と呼応し合ってつながっていたのが、功徳が減るにつれ、だんだんと低い世界につながるようになっていったのでしょう。

徳を積まずに欲だけを満たせば、このような惨事が起こるのは当然です。現代の地球の文明が遠からず破局を迎えるのが実感をもって理解できました。

なお、このときの世界は科学が進んでいること、カルマの返りが早いこと、徳があまりないこと、および、周りの美しい風景などから阿修羅界であると思われます。

＊　＊　＊

さて、もう一つ、現象界の裏側にあるアストラル世界での体験をご紹介しましょう。これもマハームドラーを成就してからのことです。

そのときわたしは子供部屋を自分の修行場として使っていたのですが、そこで瞑想修行をしていたときに、完全に意識が分離したのがわかりました。座って瞑想している自分と、それを見ている自分がいて、「これは体から抜けられるな」と思ったらやっぱり抜けられたわけです。

それからちょっと歩いてみました。いつもなら壁などもすんなり抜けられるのですが、そのときはコツンと当たったのです。「あれっ、抵抗があるな」と思って、改めて床をよく見ると、もう一層下のレベルにも床がありました。そこで下のレベルに入っていって歩くと今度は壁も自由にすり抜けることができるのです。

さて――。わたしはサティアン・ビルの方へ行こうと思いました。

そのとき、だれかが足にしがみついてきたのです。振り向くと、何人かの子供がわたしの足にしがみついていました。その力が相当強く、もがいても逃げられませんでした。子供たちの顔を見ると、みんな悲しそうな顔をしています。

わたしのアストラル体験の場合、いつもなら怪獣やギャングが登場してきて、そいつらを（失礼！）けちらしたりすることが多いのですが、そのときは子供たちの寂しげな顔を見たときに、何を思ってか、わたしは子供たちの額に触れ、シャクティーパット（霊的なエネルギーの移入）を施したのです。

すると、子供たちはみんな解放されたように明るくなり、満足してスーッと離れていきました。わたしはまだシャクティーパットを施した経験がないので、自分でもなんでそういうことをしたのか不思議に思いました。もしかしたら、わたしの過去世の経験が出てきたのかもしれません。

ところで、強くしがみついてきた子供たちの様子から、わたしは彼らが餓鬼界（低級霊域）の住人ではないかと思い、

「これは餓鬼ではないでしょうか」

と尊師にお伺いすると、

「それは霊であろう」

と教えてくださいました。

人間は、死ぬと四十九日の間に次の生に転生していくのが通例ですが、非常に執着するものがあったりして、転生しきれずにバルドに残されている魂もいるのだそうです。わたしが見た子供たちもそうだということでした。そのとき修行していたのが子供部屋だったということもあって、そういう子供の霊がそばに寄ってきたのでしょう。

＊　＊　＊

いかがでしたか。今回ご紹介したこのようなアストラル体験は、正しい教えを具足した正しいグルに師事し、正しい修行法を実践するならば、だれにでも起こり得ることなのです。そして、この物質でできた世界以外の世界があり、わたしたちの目に映るこの世界は、他の多くの世界の中の一部でしかないんだということを認識することは、解脱・悟りに到達するためにも欠かせない大切な経験なのです。

（『真理の芽』No.9　一九九一年三月号　オウム出版　所収）

# 時空を超えて聞こえる神々の声
## ——アンダーグラウンド・サマディの神秘

### ◎四百人の期待に応えて

……かすかに人々がざわめく声が聞こえる。約四百人もの信徒の方で埋め尽くされた会場の舞台中央に座っているのは、麻原尊師。そのすぐそばには、たった今、アンダーグラウンド・サマディから出たばかりの聖者マンジュシュリー・ミトラ供養値魂(くようちこん)が、涼やかな表情で座っている。

今日は、「大説法祭」の日なのだ。衛星中継システムを使って全国のオウム真理教が一つになるこの催し——今回のメインは、この「アンダーグラウンド・サマディ」である。

## ◎急に天才になった？——天耳通の体験

**尊師**　今回、マンジュシュリー正悟師がアンダーグラウンド・サマディ五日間を終えたわけだが、彼は中でいろいろな体験をしている。これは、初めに行なったマイトレーヤ正悟師、あるいは二番目に行なったヤソーダラー正大師と同じように。そして、その内容については——そうだね、表現としては天耳通と、それから禅的な色彩と、この両方を合わせたまさにヴィシュッダ・チャクラの完璧な体験といえるのではないかと思う。で、これについてはね、実際にマンジュシュリー正悟師にちょっといろいろ話をしていただいて、その疑問を時間があれば聞くというかたちで解決していきたいと思います。

**マンジュシュリー・ミトラ**　今回、アンダーグラウンド・サマディに参加させていただいて、わたしとしては初めて、明確な天耳通の体験をかなりすることができました。

そのときの状況は、グルのことを観想すると、普通の状態なんですけれども、周りがパーッと明るくなって、それから今までにない、何というか非常に明晰な状態

になりました。

その明晰さというのは、何か疑問に思ったことがあると即座にぱっと答えが返ってくるというものでした。それはわたしがワーク（奉仕修行）上いろいろと問題を抱えていたりするんですが、そういうこととか、どんどんと疑問を考えては、その答えを得ていたわけです。

しかし、初めはそれが天耳通とは思えなかったんです。自分の頭が非常に鋭くなったような気がしました。で、そうですね、例えば意識堕落天の乗り物について、尊師からいろいろと教えていただいているんですね。何か箱のようなもので、地上から浮いている、そして、飛ぶときにカチンカチンと音がすると。例えばこれについては、「なぜ浮いているのだろうか」と思うと、即、「圧力によって浮いている」と。「何の圧力だろう」と思うと、「電子雲の反発である」というかたちでどんどんと答えが返ってくるんです。それで、今あらかたの構造がわかったところです。

それ以外にもあるんですが、例えば、修行に関して目を向けたときに、「いったい自分というのは何だろうか」とパッと思ったとき、一言、「グルの分身である」

という答えが返ってきました。このときには、今までグルに対して疑念を持ったり、闘争を挑んだりしたことがあったんですが、それは結局自分自身を傷つけることであったことがわかって、愚かなことをずっとしてきたなと思って、非常に考えさせられました。

一言、ポッと答えを言ってくれるんですね。尊師は、「なんかコンピューター的な天耳通だなあ」と言われたんですけれども。

じゃあ今度はと、欲張って、「最終解脱するにはどうしたらいいのだろうか」と考えたときに、一言、「無常」と言われました。これは、わたしがたくさんいろんなことを常と思っているわけですけども、これをもっともっと考えて捨断、捨て断たないといけないなあと思いました。

それから、ヴィシュッダ・チァクラに対応する煩悩である権力欲で引っかかっているんですが、そういったものについてはどうしたらいいだろうかと思ったとき、一言、「慚愧」と言われました。これももっともだと思い、今、それについては考えているところです。

**尊師**　ここで一つ解説をしておかなければならないのは、「わたしとはいったい何だろうか」、「グルの分身」という言葉が出てきたわけだけど、これには深い意味がある。

深い意味とは何かというと、要するに最終解脱をしていくということは、最終的には真我の独存位に至るわけである。ということは、まあ個性はあるにしろ、真我の様態、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜というこの三つの様態を自分自身が得ていくというプロセスにおいては、まさに、グルと同等になるということである。そういう意味においてはグルの分身という意味は正しいと。

それからもう一つの意味は、修行のプロセスにおいて——つまり、今自分が経験していることは、過去にグルが経験したことであると。そうするならば、例えば自分の先に行っているものに対するいろんな疑念というものは、それはまさに自分の未来に対する疑念であると。そういう意味において、またこれも正しいということになる。だからまあ、そういう意味で「分身」という言葉が出てきたんだというふうに考えてください。

じゃあ、続けて。君たちの最も興味のある部分に入るそうだから聞こうか。

**◎核戦争後の近未来に飛んで……**

**マンジュシュリー・ミトラ**　それから、わたし自身が変化身に意識が移って肉体から抜け出して、近未来のどこか——場所の名前まではわからないんですが、海岸に出ました。そこではどういうわけか、人々が何かお面のような、何かゴムのマスクみたいなものをかぶっているんですね。で、そこには顔の表情が描いてあるわけです。

で、「妙だな」と思っていたんですが、海を見ると、海は凍っておりました。叩いてみましたがカチンという感じで、凍っております。それで表面は、非常にたくさんの泡で覆われておりました。

そこにモデルのように長髪できれいな人がいたんですけども、その人の近くにわたしがおりまして、少しその辺りを歩きました。で、わたし自身は変化身で、肉体的には非常にきれいな状態でした。で、その方も、そうですね、非常にプロポーショ

ンがよく、ビキニのようなものを着ていたのでわたしは裸だと思っていました。ところが、しばらくすると、ちょっと神妙な顔になって、「実はわたし、こうなんです」と、身体だと思っていたところをビッとチャックを開いて、中を見せてくれました。そうするとそこに非常に病んで、変形した醜い肉体がおさまっておりました。

これは、おそらく未来の核戦争後、気温が下がって海が凍り、人々の体、および顔とかが変形していた状態を表わしているんだと思います。

**尊師**　一つ聞きたいのは、その泡は何だと思うか。原因は。

**マンジュシュリー・ミトラ**　そうですね、何か洗剤のような科学物質なのか、それとも、北の方でよくある潮の華みたいなものなのか……。寒い海では、そういった泡状のものがかなりあるんですね。ちょっとその細かいところまではわかりませんでした。初めは、表面が凍ってるってわからなかったんです。泡があって。

あ、それから、言い忘れましたが、その打ち明けてくれたときショックを感じてしまいまして、どう言ってあげていいのかわからない状態のまま、変化身が肉体に戻ってしまいました。それが少し悔やまれるところです。

**尊師**　君たちが、「小乗のツァンダリー」のイニシエーションを受けたら、そのヴィシュッダ・チャクラの詞章の中に、〝わたしにこの宇宙の実相を教えてください〟というような言葉があるわけだけど、まさにこの予言のチャクラというのは喉なんだね。で、この喉のチャクラには、三つのヴェーダが含まれていると。そして、この三つのヴェーダを知る力があるといわれています。

まあ、オウム真理教ではいろいろな研究をしているわけだけれども、特にこの「喉」、そして「意識堕落天」、「宇宙」、これらの考え方が一つであり、そしてこの宇宙そのものを支配しているのは、意識堕落天である。で、意識堕落天は当然喉のチャクラの支配の神だから、その宇宙のヴェーダの真相がそこに含まれているということを表わしているんだと。で、それをまあマンジュシュリー正悟師は実体験したんだということなんだね。

では、心のプロセスについて、いろいろ聞いてみようか。

◎死の模擬試験

マンジュシュリー・ミトラ　そうですね、まず、意識が非常に鮮明になりました。それで、思考、その他は非常に素早く回るようになりました。で、この原因の一つとしてわたしなりに考えたところでは、例えば、地元素を取っていない、水元素を取っていない、つまり食物と水分を取っていないということで、次第に火元素優位の神々に近い状態になり、思考の速度も速くなっていくのではないかという気がいたします。ま、化学的には、体液の濃度が濃くなり、反応速度が速くなるというか、そういうことがあるかもしれません。

それで、初めは尊師に指示されていた「捨断の瞑想」、これを繰り返しておりました。心の状態としては非常に落ち着いて静かな状態でした。ただ、ふだんの生活と違いまして、時間が進まないんですね。ふだんの十倍ぐらい考えたのではないかと思うぐらい経ってもまだ——まあ、そんなにしょっちゅう時計を見たわけではありませんし、はっきりと時間経過をつかんでいるわけではないですが、とにかく時間が進まないという状態でした。

それで、四日目ぐらいになって、尊師の指示に反して別の瞑想をしてしまったんですね。そうすると、気分的には非常にハイになって、気持ち良かったわけなんですけれども、そこでどうも酸素がかなり消費されたようでした。で、それでしばらくしたとき尊師から連絡があって、「煩悩的になっているぞ」と言われました。それから、「酸素の値も減っている」と。そういうことを聞きまして、やはり、そういう心の変化がはっきりと数値として出るアンダーグラウンド・サマディというのは非常にいいシステムだなと思いました。

で、中で考えたのはやはり、「これは一種の模擬試験だな」ということでした。模擬試験というのは、実際の死に対する模擬試験ということです。実際、入る直前に詰め込みではないですが、『タターガタ・アビダンマ』（真理の御魂 最聖 麻原彰晃尊師著 オウム出版刊）であるとか、特別教学システムとか、ひたすらとにかく尊師の説法を聞いて読んでため込んでいきました。

というのは、やはり死んだとき、いくら立派な経典を持っていても、あるいは説法カセットを持っていても持っていけないですから、これは覚えていかないと仕方

がない。で、その詰め込んだ教えをもとにして考えていったわけです。それで、やはり信徒さんにもそれをお勧めします。いつ死が襲ってくるか、はっきり言ってわかりません。だから教学ですね、これをやっていて、非常に助かったと思っております。

それからあと、やはりイニシエーションですね。例えば、「バルドのイニシエーション」、これはわたしは受けておりますから、死後、実際どういうステップでどういう世界が展開されるか、これは一応理解しています。これは非常に安心であると。それから、例えば「グルヨーガ・マイトレーヤ・イニシエーション」の瞑想プロセス、これも何度か修習しておりますので、どのように、グルに対して縁を深めたらいいかというか、すがったらいいか、これもわかると。あるいは「小乗のツァンダリー」では、そうですね、世界が変わっても意識が連続できるように訓練しています。こういう、サマナ（出家修行者）になってから尊師に与えていただいたイニシエーションの果報というのがありますので、その点においては非常に安心でした。

## ◎成就者のサマディ——ニルヴィカルパ・サマディ

**尊師**　ま、実際にマンジュシュリー正悟師の心の働きと、それから酸素消費とが全く一致したかたちで、データとして出ているんだね。ちょうどマンジュシュリー正悟師が体験を始めた前の状態のときは、酸素消費量は測定未満と。つまり、どういうことかというと、もう完全に三昧の状態であったということができると思います。

そして、三昧にはサヴィカルパ・サマディとニルヴィカルパ・サマディと両方のサマディがあるわけだが、一般にはサマディというのはサヴィカルパ・サマディをサマディと見ているわけだね。しかし、成就者のサマディというのは、ニルヴィカルパ・サマディである。

で、このニルヴィカルパ・サマディとは何かというと、通常の意識を得たままのサマディということになります。つまり、完全に意識のはっきりした状態で、すべてをコントロールする状態と。

で、マハームドラーを成就したのちに、特にマンジュシュリー・ミトラ正悟師の場合、君たちもよく知ってのとおり、変化身の体験が多いわけだね。で、変化身の

体験の次に来るのは何かと。経典どおり、天耳通の体験、これを完璧に行なってきている。で、次、マンジュシュリー正悟師が行なうのはおそらく完璧な他心、そして宿命、そして死生智、つまり天眼ね、それから漏尽というプロセスに入っていくはずです。

で、これらは、すべて代謝が完璧に落ちて、煩悩が捨断された状態で生じるものです。ですから、このニルヴィカルパ・サマディに彼が入り、完全に天耳通を経験したということは、次は意識のある状態で、他人の心をズバズバと見抜く力が宿る、もうそのステップに来たと。で、これは、彼自体が次のサマディ、つまり次はまあ一週間のサマディを考えているわけだけど、そのころに完全に生じるはずです。このようなかたちでね、一つ一つ確定させていくと。神秘的な力を確定させていくと。

そして最終的には、完全なる漏の破壊をすることによって、仏陀となると。ですから、今の正悟師が、例えばマイトレーヤ正悟師が宿命、ヤソーダラー正大師が死生智という段階を進んでいるわけだけど、このようなかたちで最終的に漏の破壊をなす弟子たちが、そうだね、来年には、今の正悟師の四分の三ぐらいは達成するの

ではないかと考えています。

### ◎なぜ、霊性が飛躍的に高まるのか？

まさに、仏典に記されているとおりにサマディに入り、そして神通力のプロセスを体験していく……。

もうおわかりのようにアンダーグラウンド・サマディは、単にサマディの証明というだけではなく、それそのものが霊性を高める大変素晴らしい修行なのである。

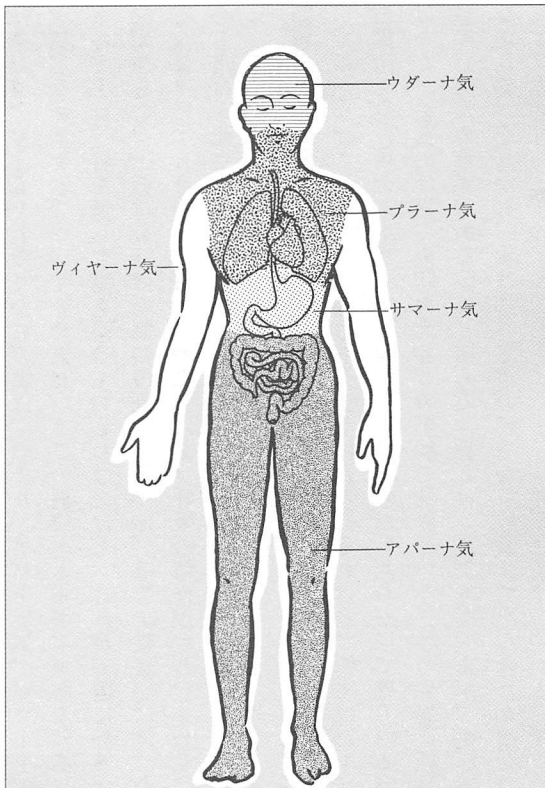
麻原尊師はこのように語られている。

**尊師**　皆さんもよくわかっているとおり、成就者とそれから普通の人とでは使うエネルギーが違う。そしてその使うエネルギーは、その人が、他の、つまり低いエネルギーの影響を受けなければ受けないほど、エネルギーの漏れがなくなり、そして、それによってその人は自分のエネルギーを回復し、神秘的な力を増大する。例えばそれはマイトレーヤ正悟師、ヤソーダラー正大師、あるいはマンジュシュリー正悟

師の体験を見ても明らかである。

では、なぜそうなのかと。これは、四つの静慮の第一静慮を考えればよくわかることである。つまり成就者というものは、思索に対して大変優れている。まあ、この思索を仏典では熟考と吟味という言葉を使っているわけだよね。この熟考とは何かというと、原因についてあれやこれや考えると。吟味とは何かというと、その結果についてあれやこれや考えると。そしてその結果から次にどのような因を生じさせるのかあれやこれや考えると。そして完全に捨断すると。

ところがだよ、外的な情報に心が翻弄されているとき、この熟考と吟味というものができるだろうかと考えた場合、当然それはできないということになる。つまり、ブラックボックスの中で、真っ暗闇の中で、そして煩悩が生起する状態をわざとつくり、その煩悩生起に対してしっかりと見つめ、自分の内側の要素を捨断していくと。これは当然、内側の煩悩はどんどんどんどん弱まり、それによって管の詰まりが取れ、そしてエネルギーの流れが正常になり、高い世界の経験をすることになるわけである。




五種の気

そして、もともとわたしたちの風は、つまり、アパーナ気、サマーナ気、プラーナ気、ウダーナ気、ヴィヤーナ気というこの気はエネルギーである。そしてこのエネルギーは、管を通じて動き回っているわけだけど、これが下側に行けば下側の煩悩が生起し、上側に行けば上側の煩悩が生起する。そして最終的には、その煩悩が完全にクリアになった段階で、わたしたちは呼吸の停止が生じ、そして、天耳・他心・宿命・死生智・漏尽という五つの神通力を体験するわけである。

## ◎神通力が必要な理由

では、なぜこの五つの神通力が必要なのかと。それはね、例えばだよ、宇宙のこの構造を見た場合——ま、宇宙というのは、わたしたちが目で見ている宇宙だけではなく、愛欲の世界、形状の世界、非形状の世界という三つの世界を経験する場合、当然、天耳の世界、あるいは、他心の世界といったような、まず、視覚的にとらえない世界、それから、次はこの宇宙の創造から破壊までをも含めた宿命の世界、これは、視覚的にとらえられる世界と。あるいは死生智。これも視覚的にとらえられ

る世界と。この視覚と聴覚という二つの武器を使い――しかもこの視覚と聴覚は内側の視覚と聴覚になるわけだけど――この武器を使い、そして完全に内側を洞察して初めてすべての世界を知ったということになると。

これはまさに最上正覚者（さいじょうしょうかくしゃ）といわれるゆえんである。この最上正覚者というのは、これ以上にない、すべてに対して覚醒をした者ということだね。

で、これらの経験をすることにより、わたしたちの今とらわれている煩悩がわたしたちに対してどのような働きをするかということが理解できるようになる。

例えば、それは「苦しみ」、「苦しみの生起」、「苦しみの滅尽」、「苦しみの滅尽に至る道」のどの部分にあたるかが理解できるようになると。もしこの三界、つまり愛欲の世界、形状の世界、非形状の世界を理解することができなければ、わたしたちは今この現時点での楽、苦にとらわれ、あるいは現時点での利益、不利益にとらわれることになる。それによってわたしたちは、結果的には、苦しみをより増大させたかたちで、輪廻転生（りんねてんしょう）を繰り返さなければならないこととなるわけである。

例えばだよ、もしこの最上戒蘊（さいじょうかいうん）に到達したならば、強欲にこの世でお金を貯め

ることによって低級霊域へ転生したり、あるいは嫌悪することによって地獄へと至るということがね、はっきりと体験的に理解できるわけである。

そして皆さんは、その体験をする、それを自分のものにするための教え、そして実践というものを有しているわけである。当然この教え、それから実践を有しているということは、皆さんがそれを一つ一つ積み上げていくだけで、それらを完全に超えることができ、そして、本当の意味での正しい生き方ができることになる。

（『甦る聖者伝説』オウム出版　所収）

# 進化

## ——人を超越していく道

### オウム真理教ラジオ放送「エウアンゲリオン・テス・バシレイアス」対談「自己を超越するために」より

**◎短眠の秘訣（ひけつ）は**

**尊師**　マンジュシュリー正大師は短眠の達人で、寝ないときは二日に三時間とか三日に三時間とかぐらいで、休むときも、座法を組んで瞑想しているという偉大な生命体なわけだが、この秘訣はいったい何なのかについてお話を聞きたいと思います。

**マンジュシュリー・ミトラ**　やはりエネルギーの保全です。漏れがなくなるとそのエネルギーは体に充満し、そしてそのエネルギーの充満によって、いわゆる悪い影響は全部はねとばしてしまうと。

**尊師**　要するにストレスに強くなる、外的なストレスに強くなるということですか、一つは。

**マンジュシュリー・ミトラ**　そうですね。そしてそのエネルギーの保全のためにはやはり戒律の遵守があると思います。

**尊師**　一般にエネルギーの保全といっても、なかなかわかりづらいわけだが、特にどのエネルギーとどのエネルギーの保全がこのラジオを聞いていらっしゃる信徒、あるいは一般の方々にとってのエネルギーの保全につながると思われますか。

**マンジュシュリー・ミトラ**　はい。やはり下位の煩悩から切っていくというのが有効だと思うんですが、まず嫌悪、怒り、これを消滅させることによって痛みというものが全くなくなってしまいます。

それから次にやはり性エネルギーを漏らさない。これは具体的には、例えばオナニーをしないということから始まって、やはり性的な妄想に駆られないというのもあるわけですけれども、そのエネルギーを結局、上に上昇させることによって、そしてそれを昇華して体に回すことによって、非常にプラスになると思います。

**尊師**　ま、しかし、何をしちゃいけない、かにをしちゃいけないというと現代の人はやはり「そんな喜びのない人生なんか耐えられない」と思われるかもしれないから、ここで一つちょっと高度な話をしましょう。

例えば性エネルギーが保全される。しかし、もともと無が有になったり、有が無になったりすることはありません。つまり「保全されたエネルギー」＝「喜び（イコール）」は、必ずある段階がくると、自発的何の行為もなしに身体に喜びを経験させる源として蓄積されます。そのような意味において性エネルギーの保全は必要なんです。それから食についても同じで、わたしたちが生まれて死ぬまで使える火元素の量は決まっています。この火元素の量を食事を消化するということに使うのか、あるいはそうではなくてもっとナーディーを浄化するための炎として使うのかということによって、その人の「ナーディーの浄化」＝「気持ちいい状態」、あるいは「智慧の増大」というものは変化するわけです。

（一九九四年十二月十一日　オウム真理教ラジオ放送「エウアンゲリオン・テス・バシレイアス」にて）

## ◎日常の中の「超」能力

**尊師**　マンジュシュリー正大師の神通力体験あるいは超能力体験があったら聞かせてほしいんだが。

**マンジュシュリー・ミトラ**　はい。「超能力」というのは「神通」より下位に位置すると尊師がおっしゃっていますが、思念の連続と思念の強さで起こるものが多いのではないかと思います。例えばワークが忙しくて、尊師が海外にいらっしゃるときにわたしはご一緒できないという状況にみまわれて、非常にあせったことがあったのですが、そのときには思念することによって飛行機が飛ばなくなり、次の日に一緒に海外に行くことができました。このようなものは「超能力」の分野ではないかと思います。

「神通」の体験というと、サマディが不可欠になってくると思うのですが、幸いわたくしたちは、土の中でサマディを行なうという「アンダーグラウンド・サマディ」の経験をさせていただきましたので、その中でさまざまな経験、特にハッキリとした天耳通の経験はさせていただくことができました。これによってやはり神々自身

が、尊師の救済活動を常に見守って、サポートしてくださっているんだなということがよくわかりました。

**尊師**　人間からみると超能力も、また神通力も、それを得た魂からみると普通の能力へと変わる。そして逆に人間界の能力そのものは、能力というよりも単なる習性の一部と化す。これがまさに「進化」である。例えば音楽の例を挙げるならば、修行が進み、そして本当の天耳通がつくころになると、音に対する識別の能力は増大する。そして数ヘルツの区切りすら完璧に聞き分ける能力が備わるのである。ま、オウム真理教の昔からの信徒さんだと、尊師は以前より歌がうまくなったとおっしゃる方もいらっしゃるが、それはまさにわたしの音に対する識別する能力の進化が、わたしの歌に投影されているものと考えることができる。これらの体験、つまり以前はあこがれていた超能力が、今は普通に存在するというような体験を聞いていきたいと思います。

**マンジュシュリー・ミトラ**　最近は、必要なものがすべてそろってしまうというか、例えば必要な機械を探していると破格の安値で入るとか、あるいは探している情報

がひょんなところから届けられるとか、あるいは下向したサマナがいて、やっぱりこれは修行させないといけないなと思っていると、突然わたしの車の前に飛び出してくるとか。そういったかたちで、物が集まってくるという現象が多いです。

**尊師**　これはまさにボーディチッタの保全が外的に力として現われだした状態を表わしています。マンジュシュリー正大師の下向したサマナの例などはまさにその典型で、ボーディチッタの思念、そのエネルギーの発散、相手に対する影響、そして相手がそれに誘導されるかたちで現われると。……

（一九九四年十二月十一日　オウム真理教ラジオ放送「エウアンゲリオン・テス・バシレイアス」にて）

## ◎心の解放の経験

**尊師**　今生わたしは修行を始めて約十八年になります。そしてその間に、多くの悟りを経験しました。その経験は先程の体験談にもあったとおり、「一つの悟り」イコール「一つの心の解放」。つまりゆっくりゆっくりと心は、より大きな寂静へと

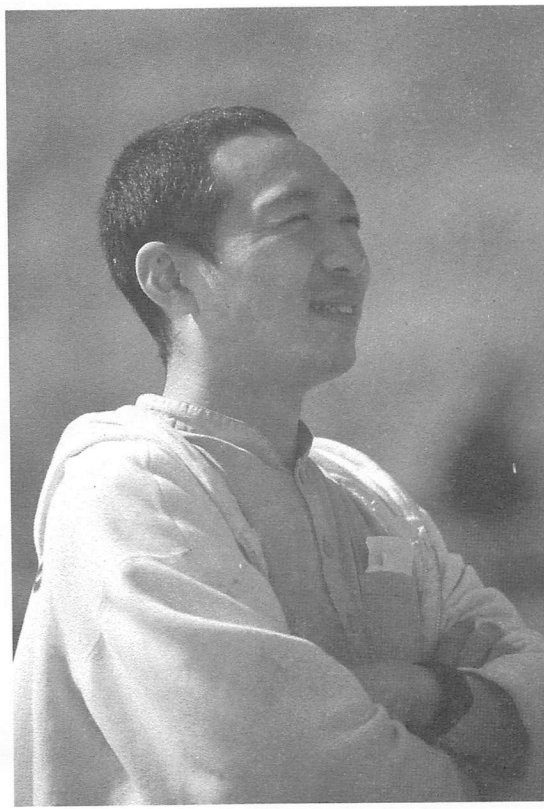
向かうわけです。

ところで、今ここに集まっている修行途上のマンジュシュリー正大師をはじめとする弟子たちの体験談を聞いてみましょう。

**マンジュシュリー・ミトラ**　修行に入る前は欲しいものをどんどん所有していくというようなプロセスでした。例えば趣味の品であるとか、あるいは旅行の経験であるとか。特に書物が多かったですが……。それを繰り返していくうちにどんどん思考が固定化していった、自分で考える力がなくなっていった、というような経験があります。出家によって、お金も含めてすべて俗のものを捨てることができて所有から解放され、心の制約がどんどん減って、思考が自由にできるように回復しました。そして苦しみもなくなってきました。

感覚的に言うと頭の周りの空間がどんどん大きく広がっていくというような感じがあります。

（一九九四年十二月十八日　オウム真理教ラジオ放送「エウアンゲリオン・テス・バシレイアス」にて）



## ◎能力開発と修行の関係

**尊師**　心の成熟、そして悟り。この心の成熟・悟りはわたしたちの知能を発達させます。ニュートンにしろそうですし、あるいはアインシュタインにしろそうですが、彼らはフリーメーソンのメンバーともいわれていますし、またユダヤの秘密のカバラーの秘法を実践していた密教徒であったともいわれています。ではなぜ悟りが能力開発に関係があるのかということについて説明をしなければなりません。

もともと知識というものは、他が与えてくれたもの、それを反復し、そしてそのままのかたちで別の人に分け与えることはできますが、それを自分の中に消化しない限り内側での納得が生じないし、また納得が生じないことによって、より新しい課題、あるいは命題にぶつかったとき、その課題・命題を解くことはできないのです。ではこれから能力開発と修行の関係についてマンジュシュリー・ミトラ正大師から体験談を聞いてみましょう。

**マンジュシュリー・ミトラ**　やはり修行を進める段階で集中が持続する、その持続する集中時間がどんどん長くなっていったように思います。これは、わたくしと一

緒に仕事をしている者はみんなそうで、例えば機械の設計をやっている者などは朝早くから夜遅くまで集中してずっと図面を書き続けることができました。これは、勤めているときにはそういうことはなかったそうです。そして、例えばある会社に出向いて、そこの仕事を手伝ったことがあるんですが、現世の人は、朝から夜まで食事どころか水も飲まずにずっと仕事をし続ける彼の様子を見て、信を持ち入会した例というのがあります。やはり能力という点からすると、動物より人間、人間より神々の方が能力があると思うんですが、それはその持続時間だけではなく、処理する速度の速さもあると思うのですが、その能力が高まるにつれて経験する世界も高くなっていく、そういう相関関係があると思います。

**尊師**　いろいろな体験が修行によって身につきますね。賢い人は修行します。では、皆さんの先輩である賢い方々の体験を聞いてみましょう。

**マンジュシュリー・ミトラ**　修行と名がつけば何でもいいというわけではなくて、正しい修行をすればということなんですね。というのは、わたしはオウム真理教に

出合う前も修行の必要性を感じており、書店で本を買って自己流の修行をしていた経験があるんです。でもそのときには、修行の効果というのはほとんど現われませんでした。正しい修行とは正しいグルに対する帰依（きえ）によって生じます。今では、その修行の効果というのはグルの能力、経験のほんの一部を体験させていただくことであるということを感じています。

（一九九四年十二月十八日　オウム真理教ラジオ放送「エウアンゲリオン・テス・バシレイアス」にて）

# 第四章　悲劇の天才科学者

## ――真理を科学する

とにかく科学的であることが正しいという具合に一般的な論調としてはなっていると思うんですが、科学的であれば正しく、科学的に説明できないことは正しくない——だから宗教は正しくないというような一般的な意見がある。その科学の取り扱っている領域というのはわたしたちの目から見ると狭いんです。安心できる領域だけでしゃべっているというところがあると思うんですね。ですから、手法としてはやはり科学的な手法、つまり仮説を立てて実証していく——特に測定を伴った、物理的な証明のある——というふうにして、できるだけ今、科学の扱える範囲を広げて、そしてわたしたちのまだ未知の領域まで証明範囲を広げていきたいと思っているわけです。

（一九九一年九月二十八日「朝まで生テレビ」村井氏コメントより）

# 宗教と科学の接点
## ――オウム真理教が科学する理由

### オウム真理教ラジオ放送「エウアンゲリオン・テス・バシレイアス」インタビュー

**聞き手**　麻原尊師のお弟子さんをお迎えしてお届けするスポットライト。今回は、オウム真理教科学部門のリーダー、聖者マンジュシュリー・ミトラ供養値魂にお越しいただきました。こんばんは。

**マンジュシュリー・ミトラ**　こんばんは。

**聞き手**　初めての方には、オウム真理教の中に科学部門があるというのはちょっと不思議な感じがするのではないかと思いますので、そのへんのことをまずお話しいただきたいと思います。

**マンジュシュリー・ミトラ**　そうですね。今でこそ宗教と科学というと全く別のもののようにとらえるかもしれませんが、実は、過去からの偉大な科学者が――例えば、ニュートンにしろ、アインシュタインにしろ、非常に哲学的であったと。あるいは、むしろ宗教的でさえあったということはよく知られていることです。

**聞き手**　そうですね。

**マンジュシュリー・ミトラ**　それから、仏陀釈迦牟尼――まあわたくしたちの言葉で真理勝者サキャ神賢といいますが、この方は、最高の科学者であり、数学者であったとわたしは思っています。例えば、仏典、経典ですね。この記述は、非常に科学的ですね。宗教で追求している絶対的真理。それと、科学の世界で追求している宇宙の法則。これらを比べると、やはりその絶対的真理の中に完全に科学で追求している法則というのは含まれるべきものであると。

**聞き手**　はい。

**マンジュシュリー・ミトラ**　そしてそのアプローチ――例えば仮説を立て、理論をふくらませ、そして、実験によって検証するというやり方。これは全く同一といえ

るのではないかなと思っています。

**聞き手**　要するに宗教と科学の接点のようなものがあるということでしょうか。

**マンジュシュリー・ミトラ**　ええ。やはり、科学的な立場に立たないと、宗教を純粋に客観的に発展させていくことはできないのではないかと思っています。

**聞き手**　科学というと、大学や企業ですとか、公的な研究機関といったものがあるわけですけれど、今、科学実践の場としてオウム真理教という宗教団体の科学部門の価値というのは、どんなところにあるのでしょうか。

**マンジュシュリー・ミトラ**　科学の探究のためには、修行で培うことのできる「物事をありのままに見る力」が必要なんです。例えば、わたくしたち自身の心が動いているとして、周りの現象がありのままに見ることができるかという問題があります。怒っている場合、あるいは性欲に翻弄（ほんろう）されている、あるいは食欲のとりこになっていると、いろんな場合がありますね。

**聞き手**　そうですね。

**マンジュシュリー・ミトラ**　そういう意識が心を占めているとすると、心はそれに

よって揺れ動いているわけですから、外の現象をありのままに見ることができないと思うのですけれど、いかがでしょうか。

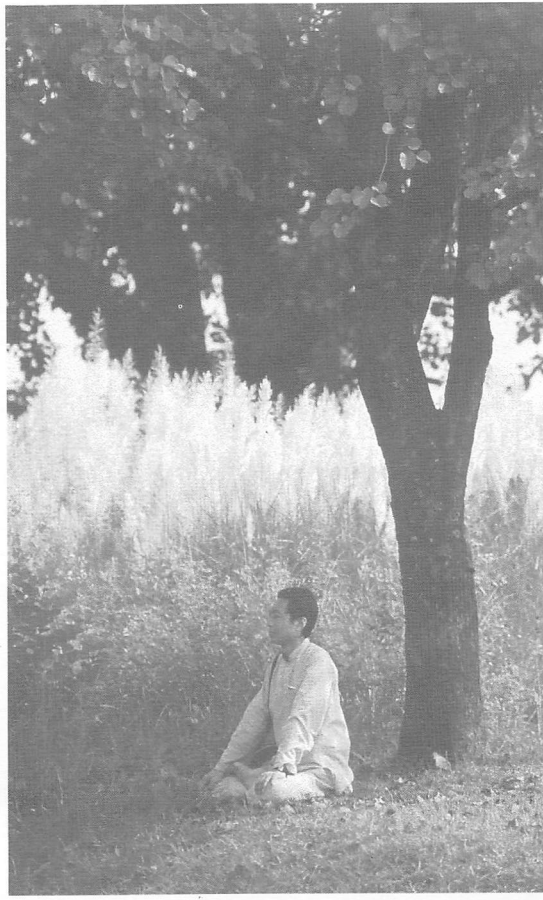
**聞き手**　それが科学を研究する上でも障害になるということですね。

**マンジュシュリー・ミトラ**　はい。実際、瞑想を含めた修行によって心を少しずつ鎮めていく、そして最終的に静止させる。その静止したとき――この瞑想状態をサマディといいますが、そのとき、呼吸あるいは心臓、この肉体の機能が停止したような状態になるんですね。そのときは心が止まっている。そして、わたくしの体験からも非常に意識が鮮明になって醒めた状態になります。

**聞き手**　それは、人間の智慧とか知性というものが、どういう状態になっているのでしょうか。

**マンジュシュリー・ミトラ**　超覚醒状態といいますか、すべてがわかってしまうといいますか、これはやはり経験していただかないと、なかなか具体的には話すことができないものですね。

**聞き手**　はい。



**マンジュシュリー・ミトラ**　しかも、わたしたちにはその状態を客観的に測定する装置があります。

**聞き手**　その煩悩（ぼんのう）の状態をですか？

**マンジュシュリー・ミトラ**　ええ。先程申しましたように、サマディに入りますと、確実に呼吸が停止します。呼吸が停止すると酸素は消費されますか？

**聞き手**　されません。

**マンジュシュリー・ミトラ**　だからこれを検出すればいいということで、ステンレスで完全に密閉の箱を造りました。そしてその中で座って瞑想します。その人間が煩悩を大量に有していると、どんどんと酸素が消費されます。しかし、その方が聖者であり、サマディに入ることができると酸素が減りません。このように客観的にその方の煩悩の量を測ることができるという、ある意味で、とてもオソロシイ装置なんです（笑）。

**聞き手**　これは、呼吸と煩悩とが相関関係にあるということなんですね。

**マンジュシュリー・ミトラ**　はい、そうです。

**聞き手**　具体的に現在、オウム真理教の科学部門で進められている研究、あるいは理論等がありましたら、それについてお伺いしたいのですけれども。

**マンジュシュリー・ミトラ**　そうですね、テーマはたくさんあります。例えば、光に関する研究をやっています。光というのは、わたくしたちの周りで最も速いものですよね。

**聞き手**　そうですね。

**マンジュシュリー・ミトラ**　そして、最も純粋なエネルギーであると。だから、最も次元が高いと考えられるわけですね。

**聞き手**　そうですね。

**マンジュシュリー・ミトラ**　しかも、わたしたちは修行によって光の経験をします。ということは、光はわたしたちの精神世界にも非常に強いかかわりがあるということです。だから一種の物質社会、物質世界と精神世界の接点のような役割をしていると考えられるのです。

実際、測定によって光の速度を測りますと、どこでどのような向きから測っても、

あるいはどこから出てきた光を測っても、光の速度は一定であるという値が得られています。これを「光速度不変の原理」といいますが、アインシュタインはこれをもとにして、「相対性理論」をつくりました。そして、光の速さを超えるものは存在しない等の結果を得ていますね。

しかし、わたしたちが瞑想に入りますと、皆その光を超える経験、あるいは、サマディ中には光が完全に止まってしまうような経験をします。

**聞き手**　その超えるとか止まるっていうのは――

**マンジュシュリー・ミトラ**　なかなか説明しにくいんですけれど、止まって見えるんですよ。

**聞き手**　はい。

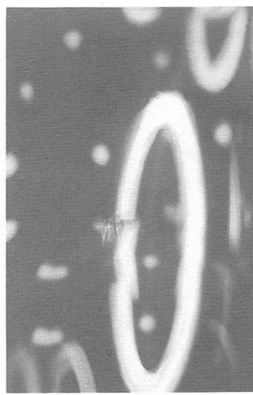
**マンジュシュリー・ミトラ**　これは尊師がはっきりおっしゃっていらっしゃいますし、同じことが仏典にも載っていますので正しいと思われます。だからそれをもとにして理論を組み立てることができたら、これは全く新しい宇宙観が得られるのではないかと期待しています。

**聞き手**　なるほど、はい。

**マンジュシュリー・ミトラ**　そのほかに例えば、タイムマシン――これも将来においては造りたいなと思っています。

**聞き手**　それは実際にできるんでしょうか。

**マンジュシュリー・ミトラ**　ええ。深い瞑想に入った状態でタイムマシンを見た方が何人もいます。つまりそのタイムマシンはこういう形をしているとか。わたくし自身もどういう条件で時間が順行し、どういう条件で時間が逆行するかという体験



を瞑想中にしたことがあります。

**聞き手**　うーん。

**マンジュシュリー・ミトラ**　こういう、わたしたちの持っている瞑想、あるいはそれによって得られた高い世界の体験は、わたしたちにとってのかけがえのないメリットということがいえるでしょう。そのほかに例えば、万能物質生成機などもね、造ってみたいなと思っています。

**聞き手**　それはどういうものですか。

**マンジュシュリー・ミトラ**　例えばここに土くれが一つあるとします。そこから、肉でも何でも必要なものが取り出せるということですね。

**聞き手**　何でもできてしまう！

**マンジュシュリー・ミトラ**　そうですね。

**聞き手**　それは本当に夢のような話ですね。

**マンジュシュリー・ミトラ**　でも、この万能物質生成機ができるという理由もあります。この世界というのは粗雑な物質で構成されている世界です。この構成してい

るもの——例えば原子にしろ分子にしろ、ある程度の構造はわかっていますよね。ですから、その一つ上の次元での解析をなせるならばそう難しいことではないと考えています。

**聞き手**　なるほど。まだまだ興味深いお話が続きそうですけれども、ここでラジオをお聴きの皆さんへ、何か一言お願いしたいと思います。

**マンジュシュリー・ミトラ**　そうですね。これからもオウム真理教は、真理を科学的に探究し続けていきたいと思っています。このラジオを聴いておられる皆さんの中でも興味をお持ちの方がいらっしゃいましたら、ぜひ、いろいろな協力をお願いしたいと思います。

**聞き手**　はい、今日は、本当にどうもありがとうございました。

**マンジュシュリー・ミトラ**　ありがとうございました。

（オウム真理教ラジオ放送「エウアンゲリオン・テス・バシレイアス」
一九九二年四月四日放送より）

# 真理を科学する　第一回　宇宙創成のプロセス

大学時代、宇宙物理学の研究をしていたわたしは、オウム真理教に入ってバクティをしながらも、「科学、特に宇宙にかかわる分野でオウム真理教に貢献できるのではないか。それがわたしの使命ではないか」という漠然（ばくぜん）とした思いを持っていた。そして、六月のセミナーで尊師と話す機会ができたとき、思い切って切り出したのだ。

「尊師、今の科学では宇宙は大爆発から始まったといわれています。」

「すごいじゃないか。」

尊師はこうおっしゃった。

「それは真我（しんが）と三グナ（さん）のぶつかり合ったときの爆発と同じじゃないか。」

それから何度か尊師と話すうちに、オウム真理教の理論が実証されていく興味深

い事実が次々と明らかになってきた。わたしはオウム真理教のヨーガ理論で現代科学を説き明かせることを確信した。このことについて、今回からわかりやすくお話ししていくことにしよう。

宇宙がなぜできたか、今の科学ではまだわかっていない。しかし、宇宙がどのようにして生まれ、今に至っているかについてはかなり詳しく解明されている。それが「ビッグバン理論」だ。今から約一八〇億年前、ビッグバンと呼ばれるとてつもない爆発によって、針の先よりも小さい空間からこの宇宙全体が生まれたのだ。爆発直後の宇宙は、超高エネルギーの光だけでできていた。こののち、宇宙は膨張しながら冷えていった。素粒子（陽子、中性子等）ができ、原子ができ、星や銀河がつくられ、生命が生まれ、我々人間が生活するようになったのだ。

次にヨーガ理論で見てみよう。マハー・ニルヴァーナで真我が三つのグナに惑わされ、落ちてしまった。そのとき、真我と三グナのエネルギーが衝突して大爆発が起こった。これをきっかけにコーザル世界、アストラル世界、現象界という三つの

世界からなる宇宙がつくられた。このように、ヨーガ理論では爆発によって宇宙が誕生したことだけでなく、なぜ爆発が起こったかについても説明してくれるのだ。

真我は、まずコーザル世界に入った。これは光だけでできた世界だ。ヨーガ理論では、光は情報そのものであると言っている。その典型がコーザル世界にある宇宙神素だ。宇宙神素とは全宇宙の情報が入った巨大なデータバンクである。そこに渦巻く光の色がそれぞれの情報を表わしているのだ。この光＝情報という関係は現代科学ではどうなっているだろう。

現代は情報時代といわれているが、ここでの最先端技術には全て光が使われている。光ファイバー通信も光コンピューターも、光が情報そのものであることを利用しているのだ。特に興味深いのはレーザーホログラフィーだ。ホログラフィーフィルムにレーザー光をあてる。しかし、それだけでは何も情報が得られない。これに、こちらから別の光をあてることによって、初めてリアルな立体像など、さまざまな情報を手に入れることができるのだ。このホログラフィー技術を使うと、けた違いに高密度な情報を蓄えることができる。

驚くべきことに、先程話した宇宙神素からデータを取り出す方法が、このホログラフィー技術と同じなのだ。『生死を超える』（真理の御魂 最聖 麻原彰晃尊師著 オウム出版）に書かれているように、アージュニァー・チァクラに精神を集中したとき、頭頂と心臓から二本の光線が出て、宇宙神素と結ばれるのである。こちらから出す光の種類を変えることによって、さまざまな異なる情報が得られることなど、まさにホログラフィーそのものである。

さて、宇宙創成初期の科学理論とヨーガ理論が一致していることを理解していただけただろうか。次回は、ここでできた情報がどのように具現化していくかについて話そうと思う。

（『マハーヤーナ』No.4 一九八七年神無月号 オウム出版 所収）

# 真理を科学する　第二回　アストラル宇宙の誕生

前回は宇宙創成の初期、「ビッグバン」と呼ばれる大爆発から「光の宇宙」が生じるプロセスについて話した。今回は、その「光の宇宙」から現在の「物質宇宙」が生じるプロセスについて考えていこう。

オウム真理教のヨーガ理論によると、世界はコーザル世界・アストラル世界・現象界の三界から構成される。「光の宇宙」はコーザル世界、「物質宇宙」は現象界にあたる。したがって今回の議論は、両者の中間状態であるアストラル世界が中心となる。以前わたしは、このアストラル世界というものがなかなか理解できなかった。特に、尊師の「アストラル世界は微細な物質からできている。それはちょうど曇りガラスのような感じだ」という言葉には頭を悩ませたものだ。

さて、三グナに干渉され、コーザル世界に飛び込んだ真我は、そこでさまざまな

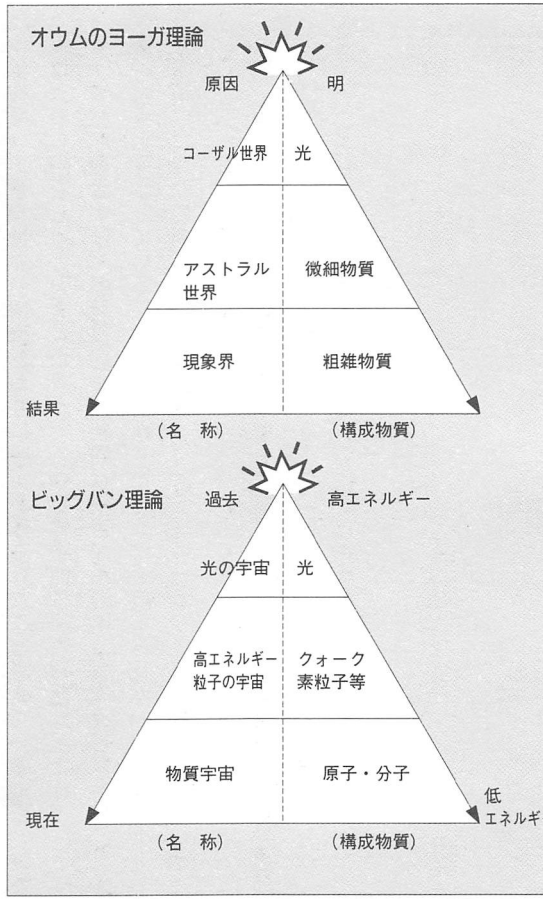
経験をし、それに飽き、今度はアストラル世界へ飛び込んでいった。そこでもっとおもしろい経験ができると思ったのだ。アストラル世界は、エネルギーに満ちあふれた微細な物質からできている。コーザル世界から来た光の情報は、アストラル世界のエネルギーに作用し、微細な物質でさまざまなイメージを作り上げる。わたしたちの真我は、そのイメージの世界で遊んでいたわけだ。アストラル世界のイメージは、現象界に投影され、粗雑物質から星や銀河などからなる今の宇宙を作り上げたのだ。簡単に言えば、「光から高エネルギーの微細物質を経て現在の宇宙が作られた」のである。

それでは、現代科学ではどのように考えられているだろう。ビッグバンでできた「光の宇宙」は、一兆度の一兆倍の一万倍といった超高温度で、しかも宇宙全体が直径一センチメートルぐらいの大きさに閉じ込められていた。そこでは、光と光がぶつかり合って、さまざまな高エネルギー粒子が作られ、できた粒子がぶつかって光に戻るということを繰り返していた。ところが、宇宙が膨張を続け、温度が下がったため、光に戻れない取り残された粒子ができた。これが今の「物質宇宙」の原料

になった。そこからクォークを経て、陽子・中性子、あるいは電子といった素粒子が生まれ、素粒子が集まって原子、分子さらに星や銀河が作られた。つまり「光からさまざまな高エネルギー粒子、そして素粒子を経て、現在の宇宙が作られた」のである。

さあ、オウム真理教の理論と現代科学を比較してみよう。まず宇宙の膨張、そして温度の低下は、真我が下位の世界へ落ちて拡散していくことを意味する。ビッグバン後、時間がたつにつれ温度が低下することは、アストラル世界が上位へ行くほど明るく、下位へ行くほど暗いことと対応するのだ。そして、さまざまな高エネルギー粒子・素粒子がアストラル世界の微細物質そのものであることに気づくだろう。原子や分子は、もちろん粗雑物質だ。

このように、「光の宇宙」から「物質宇宙」が作られるプロセスにおいて、オウム真理教の理論と現代科学がよく一致していることがおわかりいただけたと思う。ただ、重要な相違点をあげると、現代科学では、今の宇宙が偶然の産物（偶然取り残された粒子から作られた）と考えているのに対し、オウム真理教の理論では必


オウムのヨーガ理論
原因
明
コーザル世界
光
アストラル
世界
微細物質
現象界
粗雑物質
結果
（名　称）
（構成物質）
ビッグバン理論
過去
高エネルギー
光の宇宙
光
高エネルギー
粒子の宇宙
クォーク
素粒子等
物質宇宙
原子・分子
低
エネルギー
現在
（名　称）
（構成物質）

然の産物（コーザル世界の情報どおりに宇宙が作られた）と考えている点だ。みなさんはどちらが正しいとお考えだろう。この点は次回にまたお話ししよう。

ビッグバン理論では、爆発後約一万年間は宇宙が不透明（要するに曇りガラス状）であったことを示している。もうおわかりだろう。そのころ我々の宇宙は「アストラル宇宙」だったのだ。

（『マハーヤーナ』No.5　一九八七年霜月号　オウム出版　所収）

## 真理を科学する　第三回　真我の共同体『銀河』の形成

「宇宙」と聞いて「アンドロメダ大星雲」のような渦巻銀河を思い浮かべる人は多いであろう。我々自身「銀河系」という名の渦巻銀河の中に暮らしていることもよく知られている。

前回はビッグバン、光の宇宙、高エネルギー粒子の宇宙を経て、原子・分子からなる物質宇宙ができるまでを話した。今回は銀河の形成について話そう。

ビッグバン理論によると、大爆発から一万年後の宇宙は約一万度の均一な高温ガスであった。ところが宇宙が膨張を続け、冷えるにつれて、ガスの密度にゆらぎが生じ、ガスの濃いところが宇宙内に数万カ所できた。このゆらぎは、光の宇宙時代の微妙なムラが引き金になって生じたと考えられている。さて、ガスの濃いところは重力の作用で周囲のガスを引きつけてますます濃くなり、薄いところはどんど

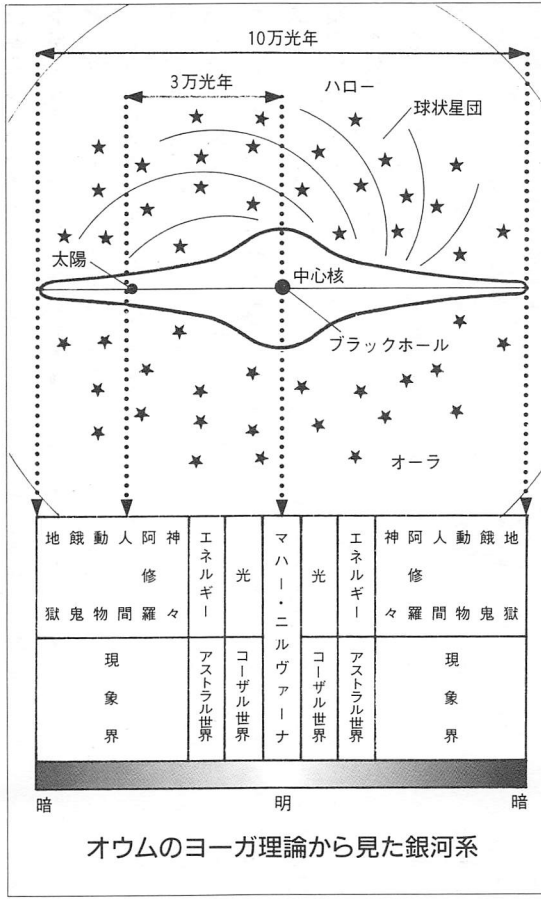
薄くなっていった。

大爆発から十億年後、ついに凝集したガス雲から天体が生まれた。これがクエーサーだ。クエーサーは、ふつうの銀河の一万倍も強いエネルギーを放出している特殊な銀河である。その中心には、巨大なブラックホールができ、周囲の物体をどんどん飲み込んでいったのだ。

約一八〇億年後の現在、クエーサーは既に消滅し、同じようにガス雲から発生したさまざまな特徴を持つ数億個の銀河で宇宙が占められている。我々の銀河系は図に示すように直径約三〇万光年の円盤型で、その中では常に星が生まれ、そして死んでいる。我々の太陽は、銀河系内の一〇〇〇億個の恒星の一つで、中心から三万光年離れた辺境に位置している。

次にオウム真理教のヨーガ理論で見てみよう。

真我は、アストラルの世界にも飽き、今度は粗雑物質を用いて現象界を作り出した。現象界は「熱」が優位の世界で、コーザル世界、アストラル世界に比べるとエネルギーが低く、暗い。




オウムのヨーガ理論から見た銀河系

真我は互いに引き合い、集まった。現象界では多数の真我が作り出したコーザル世界の情報、アストラル世界のイメージによって、小世界が生まれた。宇宙の各所に、集まった真我の個性に応じて、さまざまな世界ができたわけだ。

この小世界は、現象界において真我が活動する場所である。一つの小世界の中で、真我は互いに関係を持ちながら活動する。つまり、この小世界は真我の共同体なのだ。できのいい真我は、小世界を作って間もなくマハー・ニルヴァーナへと戻った。ただし、このときには落ちたときよりも高い世界であるマハー・ニルヴァーナへと入った（つまり進化した）のである。惑いの深い（つまり地獄や下位の世界の）真我の比率が増すにつれ、この宇宙はますます膨張し、冷え、暗くなるのだ。

それでは、ビッグバン理論とオウム真理教の理論を比較してみよう。

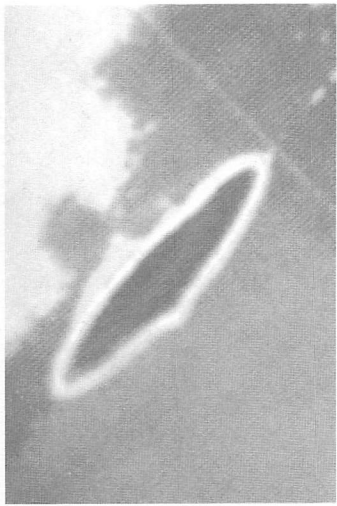
まず、光の宇宙時代の微妙なムラが原因となって銀河が生じたとする考え方は、コーザル世界の情報が原因となってアストラル世界、そして現象界が形作られるとするオウム真理教の理論と一致する。そして、ガスを凝集させる重力の本質は、真我が互いに引き合う性質を持つことと対応する。さまざまな銀河が、オウム真理教

| | | 宇宙物理学 | オウムのヨーガ理論 |
|---|---|---|---|
| 宇宙の誕生 | 起源 | ビッグバンと呼ばれる爆発 | 真我と三グナの衝突による爆発 |
| | 初期 | 光の宇宙 | コーザル世界（光） |
| | 中期 | 高エネルギー粒子の宇宙 | アストラル世界（微細物質） |
| | 現在 | 原子分子の宇宙 | 現象界（粗雑物質） |
| 宇宙の構成単位 | 単位 | 様々な銀河 | 無数の小世界 |
| | 原因 | 光の宇宙での密度ムラ | コーザル世界の情報 |
| | 作用 | 重力の作用 | 真我が互いに引き合う作用 |
| | 役割 | 星々の活動の場 | 真我の共同体 |
| | 形状 | 何によってきまるか不明 | 真我の個性によってきまる |
| クエーサー | 実体 | 異常に強いエネルギーを持つ銀河 | 優れた真我の集まった小世界 |
| | 中心 | 巨大ブラックホール | マハー・ニルヴァーナへと通じる |
| | 消滅 | 不明（エネルギーがつきた） | 真我がマハー・ニルヴァーナにもどった |
| 銀河系 | 太陽 | 中心から３万光年 | 人間界に対応 |
| | 中心 | おそらくブラックホール | コーザル→マハー・ニルヴァーナ |
| | 外周 | 暗く冷たい世界 | 地獄界 |
| | ガス | ハロー | オーラ |

でいう小世界と同じものであることはもうおわかりだろう。面白いのはクエーサーである。クエーサー中央にできる「巨大ブラックホール」、これは光を超えるという意味から、マハー・ニルヴァーナと考えられないだろうか。つまり、天体がブラックホールになるということは、「解脱」を意味すると考えられるのだ（実は、このことは麻原尊師が以前からおっしゃっていたことなのである）。そうすると、クエーサーの真我は、宇宙ができてから短期間のうちにマハー・ニルヴァーナに戻っただけではなく、同じ小世界にいる真我たちを自分のブラックホールに吸い込んで解脱させてくれる、たいへん優秀な（大乗的な）真我だったのだろう。

次いで、我々の銀河系の構造に目を向けると、図に示すように驚くほどヨーガ理論と一致するのだ。銀河系も中心が最も明るく、最外部は暗く、冷たい。中心から外に向かって、コーザル世界、アストラル世界、現象界（天、阿修羅、人間、動物、餓鬼、地獄に分かれる）がある。太陽の位置がちょうど人間界にあたるのがわかるだろう。銀河の中央に向かえば、神々に、外周に向かえば地獄の住人に会えることになる。

こうして、全宇宙の中で、わたしたちの立場が理解できた。銀河系内のあらゆる真我、大宇宙のあらゆる真我がマハー・ニルヴァーナに至れるよう、救済に力を尽くそうではないか。



（『マハーヤーナ』No.6　一九八七年師走号　オウム出版　所収）

# 真理を科学する　第四回　星々の輪廻転生

空を見上げると、まぶしく光り輝く太陽がエネルギーを放っている。地球上に人類が誕生した三百万年前、いや最初の生命が発生した三十億年以上前から、太陽は変わらぬ光を我が地球に注いでいるのだろう。

もし、太陽が存在しなかったら、地球上の生命の発生などあり得なかった。古来、世界各国で太陽崇拝が行なわれてきたのも当然といえよう。

しかし、わたしたちは今、太陽が銀河系を構成している一千億個の恒星の一つ、それも平凡であまり目立たない星にすぎないことを知っている。今回は、銀河系を構成する星々について、太陽を例にとって見てみよう。

宇宙物理学の進歩で、恒星のふるまいが詳しく解明されたのは、一九六〇年ごろである。それによって、常に変わらず光り続けているかに見えた恒星たちが、変化

に富んだ一生を送ることが明らかになった。

まず、銀河系内のガスとチリが集まり、雲のようなかたまり（分子雲）を作る。これが、星を作る原料となるのだ。分子雲は、重力で縮み、円盤状になって回転をはじめる。収縮を続ける分子雲の中心は、しだいに高温となり、ついに核融合反応がはじまる。

この核融合反応は、最も軽い原子である水素四つがくっついて、二番目に軽い原子であるヘリウムになる反応で、このとき莫大（ばくだい）なエネルギーが放出される（水素爆弾の原理と同じである）。

こうして分子雲の中心から、光り輝く恒星が誕生する。分子雲の残りの部分は、凝縮して地球や木星のような惑星となる。わたしたちの太陽の場合、誕生は今から約五十億年前と計算されている。

誕生したころの恒星は、燃料である水素を十分に持っているので、順調に光り続ける。これが恒星の青年～壮年期である。わたしたちの太陽も、あと五十億年はこのままの調子で光り続けるだろう。

ところが、燃料を使い果たすと、恒星はブクブクとふくらみはじめ、直径が数十倍になる。これが恒星の老年期である。今から五十億年後には、地球は巨大化した太陽の放つ熱で、焦熱地獄と化すであろう。

その後、恒星は死を迎える。死に方は、恒星の重さによって異なる。太陽程度の重さの星は、外層がガスとして飛び散り、中心部には燃えかすの小さい星（白色わい星）が残る。

太陽の三十倍以上という非常に重い星の場合は、ひときわ激しい超新星爆発のあと、中心部にはブラックホールが残ると言われている。

これが、星の一生である。その長さ、つまり星の寿命は、太陽程度の星で百億年、もっと大きい星になると、放出するエネルギーが強いため、例えば一千万年といった短命の星になる。

このようにして、星々は、ガスやチリから生まれ、ガスやチリに帰る。これを繰り返していくわけだ。

今回は科学側の説明が長くなってしまったが、これについてオウム真理教のヨー

ガ理論で解明してみよう。今回もそのねらいは、唯物論の代表である現代物理学と、唯心論の代表である仏教、ヨーガ理論との接点を探り、類似の傾向性から真理へ至るためのヒントをつかむことである。

まず、最初に気づくのは、星々が誕生と死を繰り返すのが、人間の「輪廻転生」

と同じであるということだ。

すなわち、この宇宙は、宇宙全体として、また銀河として、恒星として、人間（動物……）として、さまざまなレベルで一本の「真我が輪廻転生を繰り返しながら、解脱に向かって修行する」という原理に貫かれていると言える。麻原尊師が説かれる、「真理は一つなんだよ」という言葉の重さを感じざるを得ない。

すると、星の重さによって一生のプロセスや長さが異なるのはなぜか。これは仏教の、いわゆる「大乗と小乗の違い」にほかならない。もちろん、重い星が大乗の星だ。強いエネルギーを放ち、短期間でステージを高めながら、軽い星とは比べものにならない広い空間に影響を与え、最期はブラックホールとなって解脱し、周囲の物質をマハー・ニルヴァーナへと導くのである。

ブラックホールと解脱の関係はいずれ詳しく論じていきたい。次回はさらに、オウム真理教のヨーガ理論と現代物理学理論の共通項の考察を進めていこうと思う。

（『マハーヤーナ』No.7　一九八八年睦月・如月合併号　オウム出版　所収）

# 真理を科学する　第五回　惑星形成の真相

今回はわたしたちの太陽系の成り立ちと意味合いを考えてみよう。これは『大宇宙占星学※』ともつながってくる重要な問題である。

まず、わたしたちの太陽系の起源について話そう。天文学では「遭遇説」「宇宙塵集合説」などが検討されたが、現在、「凝縮説」が正しいとされている。

太古の星々の超新星爆発によってできたガスや塵、これが一カ所に掃き集められて原始太陽系星雲ができた。星雲の中心部は、重力でしだいに収縮して原始太陽となった。原始太陽の内部では核融合反応が起こり、光り輝く太陽が誕生した。一方、残りのガスや塵も原始太陽から離れた場所で重力によってまとまり、冷却の過程で凝縮して、惑星や衛星が誕生した。

このように、太陽と惑星、衛星が同じ材料から、ほとんど同時に誕生したとする

※大宇宙占星学：『ヴァジラヤーナ・サッチャ』（オウム出版）に毎月掲載中

のが「凝縮説」の特徴である。その年代は、月の石や隕石（いんせき）の放射性同位元素を調べることにより、約五十億年前と推定されている。

「凝縮説」により、各惑星の大きさと太陽からの距離を仮定すれば内部構造が推定できるようになった。

例えば、地球の中心核が鉄でできているのに対して、木星の中心核は金属状態の水素からできていると推定される。そして、惑星探査機による測定結果もその正しさを裏付けている。しかし、肝腎の惑星の大きさの持つ意味合いが決められないのだ。例えば、火星は地球の十分の一、木星は地球の三百十八倍の質量を持つが、この理由は不明。要するに偶然の産物とされている。

それでは、オウム真理教のヨーガ理論で解明してみよう。オウム真理教には独自の重力理論がある。これは、物理学が目を閉ざしている重力の本質（なぜ物と物とが引き合うのかという根本理由）を考察して得られた理論で、「重力の本質は、真我の吸引力である」というものだ。それぞれの真我は自分の持つ特質によって他の真我を引きつける。その力の大きさは、その真我の魅力に対応する。これは、魅力

的な人の周りには大勢の取り巻きが集まるのと同じと考えていい。また引きつける対象物は、主として自分と同質の物となる。

もう一つ、オウム真理教では元素に対して独自の考えを持っている。原子番号の小さい元素（水素、ヘリウムの順）は、執着が少なく自由で、天界など高い世界に対応し、原子番号の大きな元素（ウランなど）は、執着が大きく、地獄界など低い世界に対応するというものだ。

人間界は、ちょうど両者の中間で、元素でいうと鉄に対応している。現代文明が鉄器文明であり、また、人間の血液の中心となるヘモグロビンには、鉄が含まれていることなどにそれは表われている。

さて、原始太陽系星雲中の塵やガスに対して、各惑星に対応する真我が働きかけた。木星の真我は力が強かったので、たくさんの材料を引きつけ、大きな惑星を作った。一方、火星や水星の真我のようにあまり力のないものは、小さな惑星を作った。これが惑星の大きさがまちまちな理由である。また、強力な木星の真我は、子分の真我（衛星）を多数持つことになった。

材質面では、鉄のレベルにある地球の真我は、中心核に鉄を集めた。一方、もっと高いレベルにある木星の真我は、水素を集めて中心核を作ったのだ。

このように、太陽系の成り立ちも真我の働きとして理解できることがおわかりいただけたことと思う。そして、星々のレベルでも人間同士のレベルでも統一的に取り扱うことのできるオウム真理教の理論の素晴らしさを実感していただけたであろう。

なお、各惑星の詳しい特徴については、コスミック・サイエンス・インスティテュート（CSI）担当の『大宇宙占星学』によって紹介していきたいと考えている。

（『マハーヤーナ』No.8　一九八八年弥生号　オウム出版　所収）

## 真理を科学する　第六回　音のイニシエーション

今回は、三月十五日から二十日まで、静岡県富士宮市「水中エアー・タイト・サマディ」会場において初公開される、「音のイニシエーション」について解説したいと思う。

オウム真理教ＣＳＩでは、皆さんの修行を飛躍的に進めるために、さまざまなイニシエーションを開発している。そして、「水のイニシエーション（甘露水）」、「香りのイニシエーション（プルシャ型たまて箱）」といったかたちで、皆さんに提供している。

この「音のイニシエーション」は、麻原尊師から、

「今までで、最も効果の大きいイニシエーションである」

と太鼓判を押されたものだ。

一言で言うと、「完全なアストラル空間を作り出してカルマを浄化する、世界で初めての試み」なのである。

この世は、熱優位の現象界、音優位のアストラル世界、そして、光優位のコーザル世界の三つの世界から構成されている。そして、わたしたちの煩悩は、これら三つの世界にカルマとして蓄積されているのである。

もし、現象界のカルマと平行してアストラル世界のカルマを浄化することができれば、一気に高いステージに上がることができるのではないか。そして、そのためには音のエネルギーを効果的に使えばよいのではないか。

考察を進めるうちに、わたしたちはエジプトで、そのヒントをつかんだ。それは、「ピラミッドはポワ装置だ」という発見である（ポワというのは、意識を移し変えるヨーガのこと――『古代エジプトの秘儀を説く』真理の御魂 最聖 麻原彰晃尊師著 オウム出版参照）。

ピラミッドの玄室内で反響するマントラによって、古代エジプトの王は、高い世界へと旅立ったのだ。そこで、CSIは「ピラミッドの装置を完璧な形にしたもの」

を現代のエレクトロニクス技術を駆使して作り上げることになった。

この「イニシエーション」の装置は、数百枚の電子回路と複数のスピーカーを配置した小部屋（イニシエーション室）からなる。まず、麻原尊師の唱えるマントラを音源とし、それを超高精度でデジタル化する（尊師のマントラは、現在巷（ちまた）でもてはやされているCDやDATのレベルでは精度不足でデジタル化できないのだ）。

この音にコンピューターが、振動、回転、混乱などのさまざまなパターンを与え、真っ暗な小部屋の周囲に配置されたスピーカーから少しずつ違った音を流す。このパターンによって、イニシエーション室内は、「音のエネルギーによって、創造と破壊を繰り返す空間」、すなわちアストラル空間となる。

この空間にひとたび足を踏み入れると、音のエネルギーによって、わたしたちの精神は高い世界に引き上げられる。そして、わたしたちのアストラル体のカルマは遊離し、それをヴィジョンとして見ることができる。そこで、自己の煩悩を認識し、ザンゲすることによって、わたしたちのカルマは落ち、浄化が行なわれるのである。

自然の反響音にまかせていたエジプト時代と比べ、現代の技術を駆使して完璧な

ポワ装置ができあがったことがおわかりいただけたことと思う。

最近、新聞で興味深い研究報告がなされた。それは、

「人間の精神には、耳に聞こえない超高周波成分（いわゆる超音波）が強い影響を与えている。この超高周波成分がないと、いらいらや不安が増す。ところが、鉄筋コンクリート建築の内部では、超高周波成分が完全に吸収されてしまう。最近の社会不安や自殺増加の原因の一つはこの点にあるのではないか」

というものだ。

CSIの測定によると、麻原尊師のマントラには、特殊な超高周波成分が含まれている。また、以前から尊師は、

「高い周波数の音ほど精神に良い影響を与える」

と言われている。

「音のイニシエーション」のスピーカー・ユニットには、可聴範囲（20～20000Hz）をはるかに越える超低周波から超高周波まで出力できるように工夫が施されている。尊師のマントラの効果のひとつが、先端の技術から、また証明されたことになろう。

最後に、「音のイニシエーション」は、「アストラル・ヨーガ」（『マハーヤーナ・スートラ』真理の御魂 最聖 麻原彰晃尊師著 オウム出版参照）の疑似体験でもあることを付記しておこう。

今後も、オウム真理教では、修行を進めるためのさまざまなイニシエーションを開発していきたいと考えている。ご期待ください。

（『マハーヤーナ』No.9 一九八八年卯月号 オウム出版 所収）

## 真理を科学する　第七回　アストラル食

今回はオウム真理教の「食」に対する取り組みを紹介しよう。

今、人々の健康に対する関心は非常に強い。そして、健康を得るためには正しい食事を取ることが最も重要であることも、すでに常識となっている。しかし、肥満や成人病の増加に見られるように、現代人の食事に問題があることは明らかである。

食を通じて健康を得るために「栄養学」をはじめとして、「食養」、「マクロ・バイオティック」などさまざまな研究が行なわれているが、どれを取っても完全なものではない。もし完全なものがあるなら、少なくともその主唱者は完全な健康体を得ているはずである。それらが完全でないのは一体なぜであろうか。

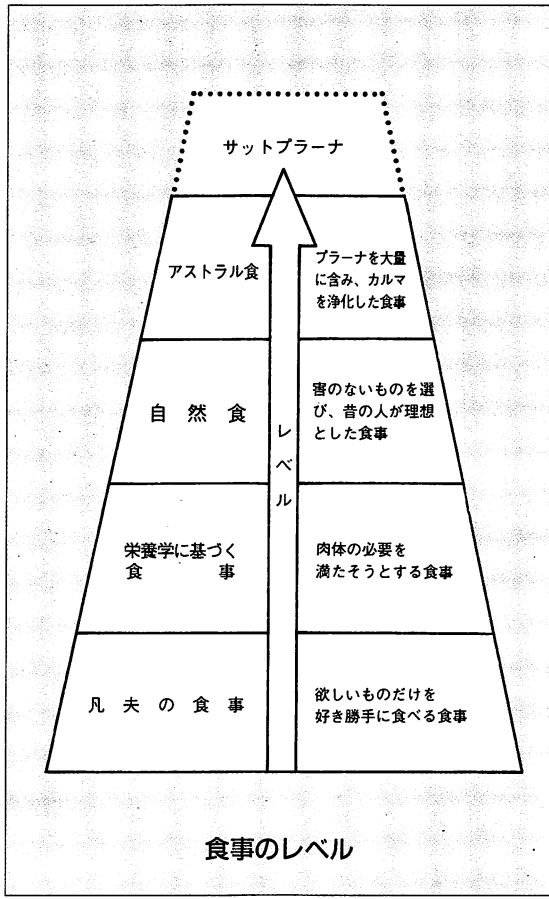
食は図のように分類することができる。

まず、最もレベルの低いのが「凡夫の食事」である。これは欲しいものだけを好

き勝手に食べるものである。栄養のバランスを取っていないうえ、食べれば食べるほど煩悩やストレスが増し、健康どころか病気の原因を作ってしまうのだ。

次に来るのは「栄養学に基づく食事」である。栄養学の発展によって日本人の食事は西欧化した。そして乳幼児の死亡率は減り、体格も西欧並みに大きくなった。しかしそれと同時に、成人病の増加など西欧人の健康上の問題も抱えてしまった。これは、西欧の栄養学が、肉体的に足りないものを補うことを主眼として作られているからである。つまり、「餓死しないことの延長に健康がある」と勘違いしているのだ。

その次に来るのは「自然食」である。例えば、無農薬野菜を用いた玄米菜食などである。確かに菜食は素晴らしい。先に述べた西欧的な食事よりずっと良い。しかし、昔の良さを超えるものではない。玄米菜食にしろ昔の食事である。単純に昔に戻すことが無意味なことは、その時代の人々が完全な健康を得ていなかったことから考えると、すぐにわかるだろう。次々と発表される「〇〇健康法」のたぐいは、いずれも現代栄養学か昔の復活かのどちらかに分類できる。


サットプラーナ
アストラル食
プラーナを大量に含み、カルマを浄化した食事
自然食
害のないものを選び、昔の人が理想とした食事
レベル
栄養学に基づく食事
肉体の必要を満たそうとする食事
凡夫の食事
欲しいものだけを好き勝手に食べる食事

食事のレベル

それだけではない。食物は作った人間のカルマを受けている。何の気なしに口に入れた食物からも、製作過程で付加されたカルマを受けてしまうのだ。例えば、金もうけばかり考えて作られた食品（商品としての食品は大体そうであるが）を食べると、そのカルマを受けて金もうけの煩悩が出てくるだろう。

では一体、何を食べれば健康が得られるのだろうか。一体、何を安心して食べることができるのだろうか。

ヒマラヤには信じられないほど長生きしている聖者がいるという。なぜ、ヒマラヤの聖者が瞑想して長生きできるのか。同じように日本で瞑想しても長生きできないのに。それは「プラーナ」の力によってである。密教やヨーガの経典にはプラーナというエネルギーのことが書かれている。これは「生命エネルギーの根源」を意味している。そして、食事も呼吸も、このプラーナを体内に取り込む行為なのだ。現代の食事は、このプラーナを無視して展開されているのではないか。完全な食事をすることによってプラーナを大量に取り込み、生命力が強まれば、病気など受けつけない超健康体が生まれるのではないか。

ＣＳＩでは麻原尊師のこの理論から、プラーナに着目し、最新の科学を導入してプラーナの増強に成功した。そして、プラーナを大量に含み、カルマを浄化した食事を開発し、「アストラル食」と名付けたのだ。

オウム真理教は「タントラ」のシステムを採っているので、「アストラル食」の具体的な内容をここで明かすことはできない。このことは麻原尊師から厳命されている。しかし、わたし自身が試食した体験を少しお話ししよう。

まず、味覚が素材と全然違う。実においしいのであるが、何か違うものを食べるような感じである。飲み込むと、喉を過ぎたところでフッと消えてしまう。そして、身体が熱くなり、エネルギーが上昇する。一言で言えば、「現象界の食物ではない」ようである。麻原尊師も「これればかり食べていれば、四千年くらい生きられるのではないか」とおっしゃっている。

また、瞑想に入るとすぐに光が見え歓喜状態に入れるなど、修行における効果も絶大である。

このように、おいしく、健康が得られ、食べるだけでエネルギーが強まり、修行ステージがアップする。ひょっとして我々は、人類の歴史上初めて、理想の食事を開発したのかもしれない。

富士宮の総本部道場では、皆さんにこの「アストラル食」を提供できるようにしたいと考えている。ご期待ください。

（『マハーヤーナ』No.11 一九八八年水無月号 オウム出版 所収）

## 真理を科学する　第八回　アストラル・テレポーター

五大エレメントをいかに浄化し強化するか――これはオウム真理教ＣＳＩにとっても重要な研究課題であった。それは、五大エレメントの浄化・強化が解脱への道であるからだ。

五大エレメントとは、地・水・火・風・空の五つのエレメントのことで、その一つ一つが霊的ステージを表わしている。地のエレメントが浄化・強化されたときに水のエレメントのステージに入ることができ、水のエレメントが浄化・強化されたときに火のエレメントのステージに至ることができる。

このようにして、順次ステージを上げていき、一番上の空エレメントのステージに入ったときに、深い瞑想および三昧に入ることが可能となっているのである。

もし、この三昧に至ることができたなら、あとは如実知見・遠離・離貪というプ

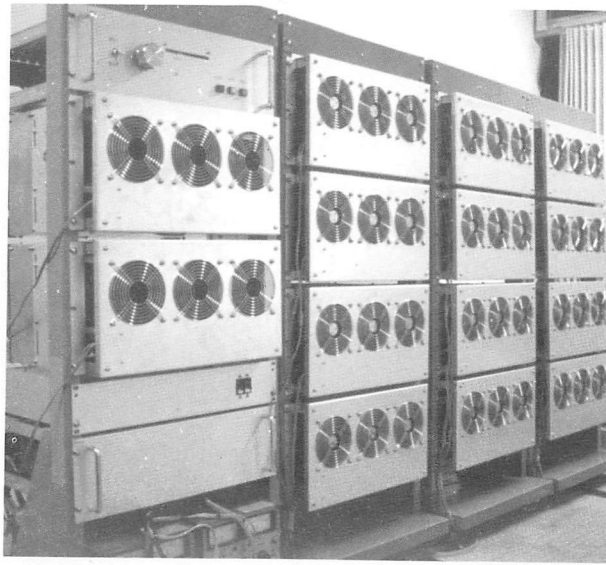
ロセスをたどり、我々修行者にとって崇高な目標であった解脱が訪れるのである（解脱のプロセスに関しては、真理の御魂 最聖 麻原彰晃尊師のご著書『生死を超える』オウム出版 に詳しく説明されているので、ご参考にしていただきたい）。

このように、解脱と密接な関係のある五大エレメントであるからこそ、それらの浄化・強化を促進するアストラル・テレポーター（アストラルくん）の開発が必要だったのである。

アストラル・テレポーターは、もともとは空エレメントの浄化・強化を目的として研究開発が始まったものである。その時点で、麻原尊師はこう予言された。「風や空などの高いステージにいる人でないと反応しないであろう」と。

果たして、完成後の実験結果は尊師の予言どおりであった。大師方や高レベルの信徒が、素晴らしい体験をしたというのに、まだレベルの低い修行者は何も感じなかったのである。

これはどうしてであろうか？ それは、低レベルのエレメントが浄化・強化されていないと、意識もその場所で引っ掛かってしまっているからである。つまり、意



識が下部にあるままだったので、空エレメントの浄化・強化を目的としたアストラル・テレポーターは何の影響も与えることができなかったのだ。

それでは、低次元のエレメントにはどうやって働き掛けたらよいか？　これがCSIの次の研究課題であった。

まず、尊師のインスピレーションによるアドバイスによって、マントラの波形を電磁場に変換してみることにした。すると、この電磁場が風エレメントに働きかけ、それを浄化・強化することがわかったのである。

風エレメントに働きかけるのに成功したCSIでは、次に火エレメントへの働き掛けに取り組んだ。火はプラズマであり、プラズマは電気であるという発想から、マントラ波形を電気に変えて体に流してみたところ、これも成功した。

さらに、その電極を水に入れることによって、ただの水がアストラル甘露水となることもわかった。アストラル甘露水を飲めば、水エレメントを浄化・強化することができるのだった。そして、そのアストラル甘露水に食物を浸すことによって、地エレメントを浄化・強化する食物に作り変えてしまうことにも成功した。

このようにして、順調に空エレメントだけでなく、地・水・火・風・空の残りのエレメントを浄化・強化する方法を発見することができたのだった。こんなにうまくいってしまったのも、シヴァ大神がオウム真理教と信徒の皆さんを守っていてくださるからであろう。

さて、面白い実験結果があるのでご紹介しよう。

「観音様のマントラ」波形を電気に変え、その電極をメロンに突き刺した。すると、次第にメロンの味が消えていったのである。これは、六道のカルマを脱却するための観音様のマントラが、メロンのカルマである味を消したためである。

まだまだほかにも実験をし、好結果を得ているのであるが、今回はとても書ききれないので次回を待っていただきたい。ただ、これらの実験結果を見る限り、アストラル・テレポーターはまだまだわたしたちに恩恵を与えてくれそうである。——アストラル・テレポーター（科学）と麻原尊師のマントラ（宗教）が合わさったときに、これらの奇跡が起きている。何やら暗示的ではないか！

（『マハーヤーナ』No.12 一九八八年文月号 オウム出版 所収）

# 真理を科学する　第九回　アストラル医学

人はなぜ病気になるのだろうか。また、どうしたら病気を治し、健康を得ることができるのだろうか。

今回は、オウム真理教の医学に対する取り組みについて、アストラル・テレポーターの効果を中心に話したいと思う。

オウム真理教では、カルマと五大エレメントを中心とする、独自の医学理論を持っている。それによると、人体は「地・水・火・風・空」の五大エレメント（五種類のエネルギー）からなる。そして、カルマによって五大エレメントの正常な働きが阻害されると、病気になるというわけだ。逆に、カルマを滅し、五大エレメントを浄化・強化すれば、病気を治すことができるのである。

この考え方は、現代の医学からずいぶん掛け離れているように思われるかもしれ

ない。しかし、西洋医学の祖といわれる古代ギリシアのヒポクラテスは、四種類の体液と気性の関係で病気になるという、我々オウム真理教の理論に近い説を主張しているのだ。むしろ、多種多様な個々の病気に振り回され、細分化し過ぎたために、現代の西洋医学は根本原理を忘れてしまったと言えるのではないだろうか。したがって、いまだに原因がわからない病気や治らない病気が、あとを絶たないのだ。

ところで、理論だけ優れていても、具体的な治療方法がなければ無力である。オウム真理教の医学と西洋医学のどちらが真理であるかは、どれだけの病気を治すことができるかで判断すべきであろう。

現在オウム真理教の医学には、さまざまな治療法がある。例えば、患者にエネルギーを注入する「シャクティープラヨーガ」や、肉体とアストラル体の浄化を行なう「クリヤ・ヨーガ」（これらについては『超能力秘密のカリキュラム』真理の御魂 最聖 麻原彰晃尊師著 オウム出版参照）、あるいは「甘露水」などによるガンの治療例なども次々と報告されている。今回は、アストラル・テレポーターを使用した視力回復実験について報告しよう。

被験者は二十歳の女性、視力が〇・〇一を下回り、しかも日増しにひどくなって、失明の恐れがあった。診断によると、「火」のエレメントが弱っていることがわかった。つまり、視覚を司るマニプーラ・チャクラのエネルギーである「火」のエレメントが弱って、見る力が低下し、さらに眼球の「火」のエレメントが弱って「水」のエレメント優位になったため、膨れ気味になり、近距離にしか焦点が合わなくなったのである。

そこで、彼女には観音様のマントラを用いて、「火のイニシエーション」（尊師のマントラを電流に変えて被験者に直接流す方法）を行なうことにした。視力は、B5大の「正」の文字を何センチ離れて判読できるかで測定した。治療前は五〇センチであった。治療開始から十分後、七六センチで視野が明るくなった。二十分後一一〇センチ、線が細くはっきり見えるようになった。四十分後には一四四センチまで延び、六十分後には、なんと二一一センチ、つまり治療前の四倍以上も離れて判読できるようになったのだ。驚くべき効果である。

ここで、アストラル・テレポーターの効果について再確認しておこう。というの

は、読者の中には、単に電流を流すことによる効果だと誤解する方がいるかもしれないからだ。

オウム真理教では以前、メロンに普通の直流波形、「シヴァ大神のマントラ」波形（エネルギー強化と良いカルマを得るもの）、そして「観音様のマントラ」波形（六道のカルマを滅却するもの）という、三種の電流を流す実験を行なった。その結果、直流を流したメロンには味の変化がなかったのに対して、シヴァ大神のマントラを流したメロンはどんどん甘くおいしくなり、観音様のマントラを流したメロンは味が消えていったのである。ここで大切なのは、高い世界の情報を表わすマントラの種類と、その波形を正確に再現するための精度なのである。前述の彼女の場合には、カルマを消さなければならなかったので、観音様のマントラを選んで成功したわけだ。これで、一般的に行なわれている低周波治療や高周波治療とは、わけが違うことが理解していただけたであろう。

また、カルマを滅するために、最も効果が高い方法として「ザンゲ」がある。つまり、ザンゲは病気の治療にも絶大な効果があるわけだ。このことは、『超能力秘

密のカリキュラム』にも書かれていない秘儀である。したがって、アストラル・イニシエーションとザンゲとを併用することで、かなりの病気を治すことができ、リハビリテーションなどにも卓効があると、我々は考えているのだ。

最後に、CSIでは今、「アストラル食」を発展させた「アストラル丹」を全く人手を介することなく、つまりカルマを移入させずに、連続自動生産する装置の設計製作に入っている。この新世代のフードによって、皆さんの五大エレメントは浄化・強化され、修行の進歩と健康の増進が得られるであろう。

（『マハーヤーナ』No.13 一九八八年葉月号 オウム出版 所収）

## 真理を科学する　第十回　テレポーテーション

テレポーテーション。一般に念力移動とも瞬間移動とも呼ばれるすごい超能力である。ある人が元の場所からフッと消え、同時に他の場所に出現する。途中に壁があっても、平気で通り抜けることができる。この能力を得た者にとって、空を飛ぶことなど容易である。一体こんなことが可能なのだろうか。どうすれば、この能力を得ることができるのだろうか。

テレポーテーションが、SF作家の創作した現代の夢物語ではなく、太古から語り継がれた真実であることは、仏典の記述を見れば明らかである。そこでは、この能力は「神足通（じんそくつう）」と呼ばれ、高いレベルの成就者のみが示すことができるものなのである。例えば、仏陀釈迦牟尼や、その弟子で神通第一といわれるマハー・モッガッラーナ、あるいは、チベット密教カギュ派の中心人物であるミラレパなどに数多く

の逸話がある（『麻原彰晃のザ・サマディ』オウム出版参照）。

それでは、テレポーテーションを現代物理学の立場から解析してみよう。我々の肉体をどんどん細かくしていくと、肉体→器官→細胞→分子→原子→素粒子と分解できる。つまり我々の肉体は無数の素粒子から構成されているのである。素粒子は物質を構成している基本粒子（陽子・電子等）で、特に高エネルギー物理学の研究対象となっている。

この素粒子の世界では、常識では不可能と思われる現象がごくふつうに起こっている。例えば、何もない空間から素粒子が突然現われたり、消えたりすることや、壁を通り抜けるトンネル効果、あるいはA地点からB地点まで移動するのに、移動経路が存在しないこと（通常の移動とは、連続的に位置が変わるから、必ず移動経路が存在するのだ）など、テレポーテーションそっくりの現象が日常茶飯事なのである。

素粒子の不思議な振舞いは、発見当初物理学者たちを悩ませたが、波動力学理論の確立によって解決を見た。そこではすべての物質・現象が「波動」であるとして

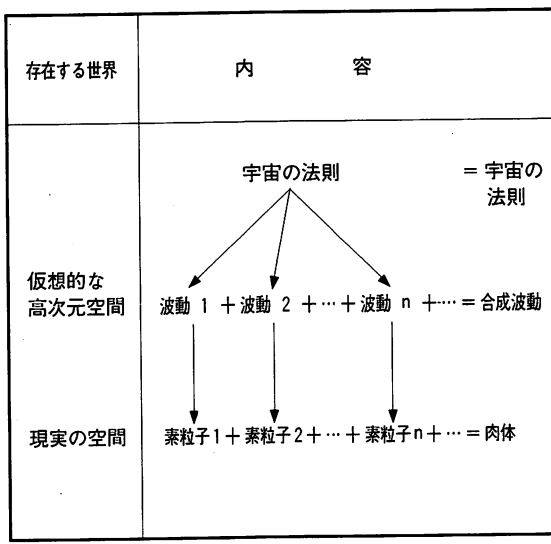



図1　物理学から見たわたしたちの存在

説明されている。図1を見ていただきたい。我々の肉体を構成している無数の素粒子は、それぞれ「仮想的な高次元空間」における波動が、現実の空間に投影されたものと考えられる。そして、その波動は宇宙の法則（さまざまな物理法則）の支配を受けるという、三段階の階層構造となっているのだ。したがって、我々の存在は、宇宙の法則の下での、「仮想的な高次元空間」における、無数の波動の重ね合わせとしてとらえることができる。その波の強さに応じて、現実の空間での肉体のあり方が決定されるのである。

さて、一つの素粒子に対応する一つの波動が大きく変化することは容易である。そのため現実の空間においても、素粒子はさまざまな不思議な現象を見せる。ところが我々の肉体に対応する波動は、無数の波動の重ね合わせのため、相対的なエネルギーレベルは低く、大きな変化は起こしにくい。そのため凡夫にテレポーテーションや壁抜けのような現象の起こる確率は、非常に小さいのである。しかし、確率は小さいがゼロではない。例えば、あなたが毎日毎日ブロック塀に体当たりし続ければ（何カルパ先になるかわからないが）、いつかフッと塀の向こう側に立っている

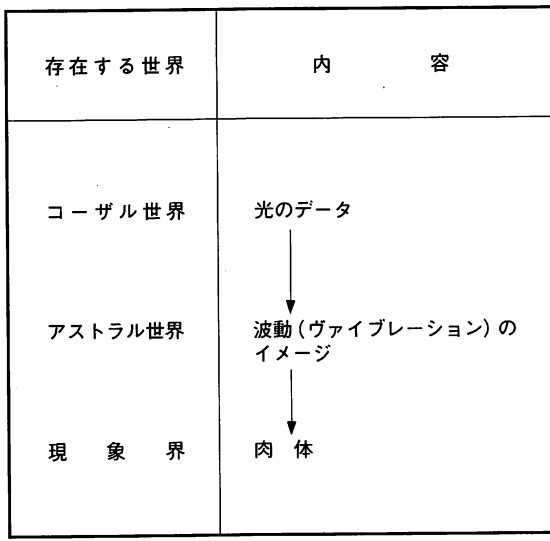



図2　オウム理論から見たわたしたちの存在

かもしれないのだ。でも、何カルパも待てないという読者の皆さんのために、オウム真理教の理論を用いて、テレポーテーション能力の獲得法を一緒に考えていこう。

皆さんは『マハーヤーナ・スートラ』（真理の御魂 最聖 麻原彰晃尊師著 オウム出版）に書かれたオウム真理教の宇宙観を記憶されているだろうか。わたしたちの存在は図2に示すように、三つの世界にまたがっているのだ。修行を進めることによって、我々は自分のエネルギーレベルをどんどん上げることができる。そのエネルギーの強まりとともに、わたしたちの存在は現象界より上のアストラル世界、さらに上のコーザル世界といった上位の世界により多くの比重が置かれ、次第に粗雑物質（現象界の物質・壊れやすい）的でなくなっていく。このことは、オウム真理教のスタッフが交通事故を起こして車が大破しても、ほとんど怪我をしないという点からも説明できる。

修行によって到達したアストラル世界は、「波動（ヴァイブレーション）からなるイメージの世界。この世界の投影が現象界となる」と説明されている。これが、先に述べた「仮想的な高次元空間」と一致することは理解いただけるであろう。こ

のアストラル世界で行動するための原動力は意志の力である。意志の力によって、波動に影響を与え、さまざまな超能力を示すことができるのである。

しかし、残念ながらアストラル世界に到達しただけでは、まだテレポーテーションを使うには不十分である。アストラル世界はコーザル世界の支配を受けているので、アストラル世界だけを強引に変化させようとしても不可能なのだ。

麻原尊師は、「修行を進めて第四禅、つまり四つめの空性を過ぎるとテレポーテーション能力が得られる」とおっしゃっている。我々はアストラル世界の上のコーザル世界に到達しなければならない。コーザル世界は「光からなるデータの世界。この世界の投影がアストラル世界となる」と説明されている。瞑想、そしてサマディによって、コーザル世界に到達し、「わたしはテレポーテーションできる」というデータをインプットして初めて、自由にテレポーテーション能力を使えるようになるのである。

それではテレポーテーション時の波動の変化を考えよう。図3を見ていただきたい。この図では、縦軸の波の高さが、その地点における存在確率を表わし、横軸は

位置を表わしている。つまり、ある位置において波の高さが集中しているときには、その地点に対象となる物質が存在していることを表わしている。

①はA点に肉体が存在している状態である。波の強さがA点に集中している。ここで波動に変化を起こし、②の状態になると、肉体はA点から消滅する。この状態では、わたしたちはアストラル世界に存在するとは言えるが、現象界ではっきりこと所在を示すことができない。そして、次に波動を③の状態にすると、B点に肉体が出現するわけだ。

もし、②の状態で止まってしまったらどうなるか。A点から消滅はしたが、どこにも出現しない。テレポーテーション失敗である。

麻原尊師にお聞きすると、実際こういう失敗例があるのだそうだ。ひょっとすると、再び現象界に出現するためには、一切の衆生を救済しようという強い大乗の思想が不可欠なのかもしれない。

最後に、もう一度物理学理論とオウム真理教の理論を比較してみよう。図1、2を見ていただきたい。コーザル世界のデータというものが、宇宙の法則にほかなら

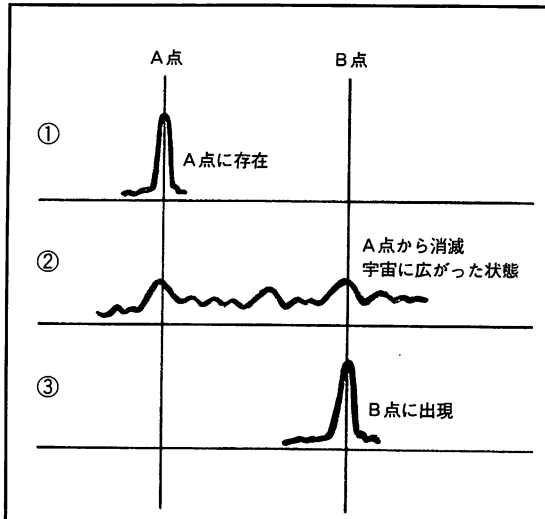



図3　テレポーテーション時の波動の変化

ないことがわかるだろう。科学者たちは、さまざまな実験や考察によって法則を発見しようとする。そして、発見した法則に基づいて現象を解析する。しかし、なぜ法則が存在するのかを知らない。それと比較して、オウム真理教の修行を進め、サマディによってコーザル世界に到達し、そのデータを入れ替えることは、宇宙の法則を作り替えることに等しい偉業なのである。こうしたレベルから見れば、オウム真理教の方法が、現代の科学を完全に超えていることを理解いただけるであろう。

テレポーテーション能力の獲得法、理解いただけたであろうか。わたしも読者の皆さんとともにオウム真理教の修行を進め、必ずこの能力を獲得したいと考えている。頑張りましょう。

（『マハーヤーナ』No.14 一九八八年長月号 オウム出版 所収）

## 真理を科学する　第十一回　大宇宙の創造と破壊

「ビッグバンを見たぞ。」

麻原尊師から連絡があった。瞑想中にヴィジョンをご覧になったのだ。さあ、新しい展開の始まりだ。

「ビッグバンによる宇宙の誕生直後に爆発が起こり、宇宙が拡大した。その後もう一度大爆発が起こり、この宇宙は急速に膨張したのだ。」

「尊師、それは最近のビッグバン理論の中でも最も有力な『インフレーション宇宙』の考え方と一致しています。」

尊師のヴィジョンは常に正確だ。わたしはさして驚かずにこう答えた。

今回は、大宇宙の創造と破壊について詳しく解説しよう。

「第一回　宇宙創成のプロセス」で解説しているように、オウム真理教の宇宙観

は数千年の歴史を持つにもかかわらず、最近急速に発展してきた現代の宇宙論と非常によく一致している。我々は、現代物理学の説く宇宙の始まり（ビッグバン）を、真我と三グナの衝突によって生じた原初の大爆発ととらえている。この大爆発によってコーザル世界が作られ、わたしたちの真我は絶対自由・絶対幸福の状態（ニルヴァーナ）から転落してしまったのだ。

さて、尊師のご覧になったヴィジョンは、これに続く状態である。尊師はこうおっしゃっている。

「二回目の爆発は、コーザル世界からアストラル世界が作られたときのものだ。エネルギーの次元が高く、爆発が微細な感じだ。」

「三回目の爆発は、アストラル世界から、この現象界が作られたときのものだ。エネルギーが粗雑で、そのぶん爆発が大きい。この後、星や銀河系ができたのだ。」

尊師のお話から、コーザル世界、アストラル世界、現象界ができるときには、爆発を伴うことがわかった。エネルギーの高い世界からエネルギーの低い世界が生じるので、そのとき余ったエネルギーが爆発として放出されることは、理解できるで

あろう。

さて、現代物理学では、このことをどのように説明しているのだろうか。

我々の宇宙には四つの基本的な力がある。それは、重力（質量を持つ物体間に働く万有引力）、強い力（原子核内部の結合力）、弱い力（原子核が崩壊するときに働く力）、そして電磁気力（電気や磁気を帯びた物体が引き合ったり反発したりする力）の四つである。

本来これら四つの力は、同じものであった。ところが、図1に示すように、宇宙が、エネルギーの低い状態に相転移（全く違った状態に一気に変わること）をするたびに、力が一つずつ分化し、現在のように四つの全く別の特徴を持つ力ができた。

この相転移の前後では、宇宙全体のエネルギーレベルが大きく変わる。その差に相当するエネルギーが、爆発として放出され、宇宙の膨張を著しく加速したのだ。これが「インフレーション宇宙」の考え方である。

ここで取り扱われているのは宇宙全体である。アインシュタインの「相対性理論」から始まった現代の宇宙論は、物理学の対象の中でも最もスケールの大きいものと

言えよう。そして、宇宙誕生時の超高エネルギー状態を取り扱うために、巨大な加速器（素粒子を光速近くまで加速して衝突させ、物質の成り立ちを調べる装置）を駆使する「素粒子論（量子力学）」が用いられ、物質の究極の姿を追いかけている。こちらは、物理学の対象の中でも最も極微のものである。ここで述べているのは、この両者が融合する物理学の最先端の分野なのである。

このように宇宙の相転移とそれに伴う爆発という点で、現代物理学とオウム真理教の理論はよく一致している。

それだけではない。オウム真理教の理論によると、力が分化する順番も説明されるのだ。

オウム真理教では、物質・魂を含めたすべてを心の働きとしてとらえ、現象を理解する。

まず、重力は分け隔てなくすべての物質を吸引する。これは「愛」である。さまざまな物質は、そのものを最も理解したものにひかれるであろう。相手をはぐくみ育てるためには、相手を完全に理解していなくてはいけない。つまり、重力は「知

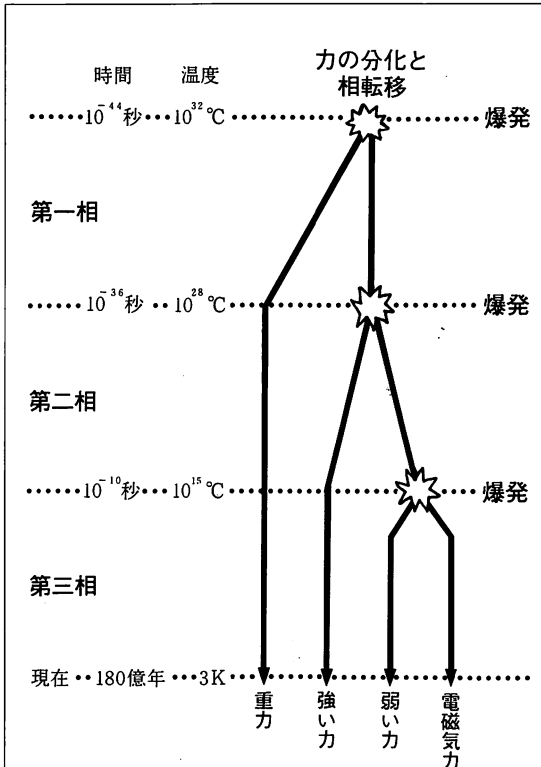



**図1　現代物理学(大統一理論)による宇宙の起源**

性」と言い換えることもできる。突き詰めれば、重力は「真我」の特性なのだ。

それと比較して、電磁気力はどうか。自分の好むものとは引き合い、そうでないものとは反発し合う。これは「エゴ」そのものである。また「魔性」と言い換えることもできる。ちなみに、強い力と弱い力は「神性」とでも言うものであろう（ここで言う「愛」「知性」「真我」「エゴ」「魔性」「神性」の解釈は、非常に深遠で複雑なため、ここでは言及しない）。つまり、最も早く分化した重力が最も次元が高く、最後に分化した電磁力が最も次元が低いのである。

このように爆発を繰り返して生じた我々の宇宙は、今後どういう運命をたどるのであろうか。これは、オウム真理教のヨーガ理論を用いると明快に説明できる。現代の科学は宇宙の年齢を百数十億年と考えているが、我々はそれよりもはるかに過去からの宇宙をとらえているのだ。図2を見ていただきたい。

縦軸は世界を、横軸は時間を表わしている。そして、グラフによって平均的な魂の居場所を示している。

まず、無始の過去に起こった原初の爆発（①）によってコーザル世界ができ、こ

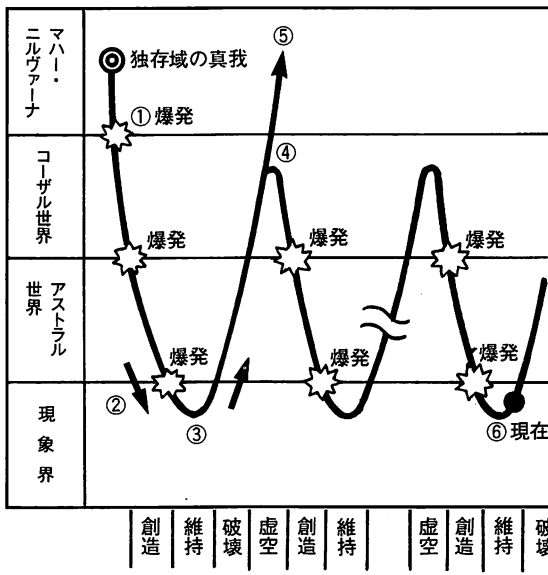



図2　オウムのヨーガ理論による宇宙の進化

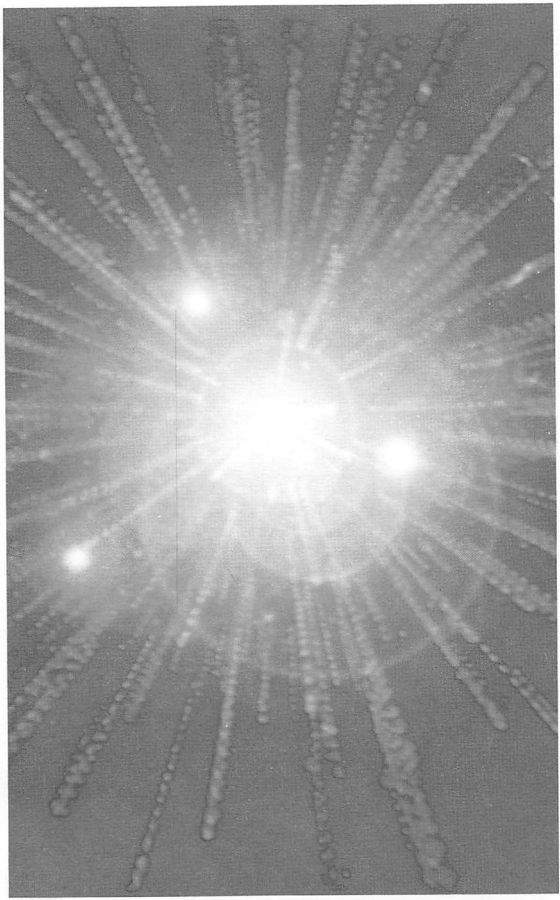
の宇宙は始まった。これが真のビッグバンである。この直後に爆発を伴ってアストラル世界が、次いで現象界ができ、多くの魂が輪廻転生を繰り返すようになった(②)。ここで矢印が下向きなのは、魂が下降傾向であることと、宇宙のエネルギーレベルが下がっていること、そして宇宙が膨張していることを示している。

この過程でもシヴァ大神と仏陀、菩薩(ぼさつ)たちの救済は続き、ついに宇宙の膨張が止まる(③)。

その後は、上向きの矢印でわかるように、宇宙は徐々に縮小を始め、エネルギーレベルが上がり、魂はマハー・ニルヴァーナに向けて上昇する。

最後は、急流のように現象界が消滅し、一部の魂はマハー・ニルヴァーナに入る(④⑤)。これで一サイクルの救済が終わる。期間は一カルパである。そして、この期間を宇宙の「創造期」「維持期」「破壊期」「虚空(こくう)期」の四つに分けることができる。

しかし、すべての真我がマハー・ニルヴァーナに到達できたわけではない。大多数の魂は、下位のコーザル世界に入っただけである。ここは「無」の世界といわれ



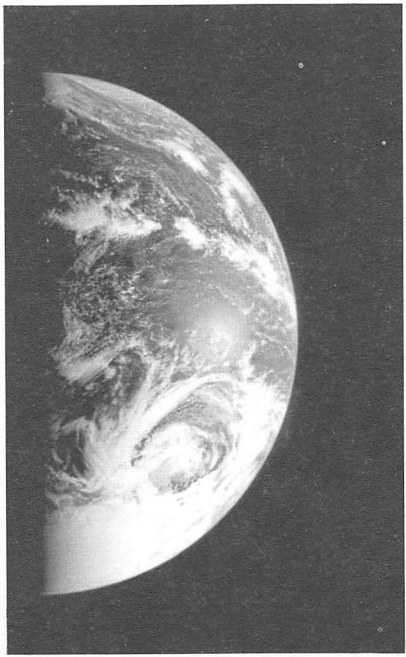
ている、魂の袋小路である（禅の瞑想などではこの地点を最終地点としている）。ここに安住してしまった魂は、このままではマハー・ニルヴァーナに到達できない。これらの魂は、もう一度現象界に放り出される必要があるのだ。再び爆発を伴ってアストラル世界、現象界が作られ、魂に、修行のチャンス、救済されるチャンスが訪れるのである。

こうして、我々の宇宙は、無数の爆発、無数の創造と破壊を繰り返し、現在に至った⑥。これが宇宙の進化なのである。このプロセスを繰り返しながら、宇宙のすべての魂を進化させ、マハー・ニルヴァーナに導き入れることが我々の救済の目的である。

麻原尊師は、「解脱、悟りによって、絶対自由・絶対幸福のマハー・ニルヴァーナに到達するには、魂の成熟が不可欠である」とおっしゃっている。この宇宙の成り立ちは、全ての魂を成熟させるための最高の場、シヴァ大神の愛の現われといえるのではないだろうか。

最後に、このような宇宙を物理学では「脈動宇宙」と言い、多くの理論が提示さ

れていることを付記しておこう。



（『マハーヤーナ』No.15 一九八八年神無月号 オウム出版 所収）

# エピローグ　巨聖逝く

## ――科学者である以前に偉大な聖者だった マンジュシュリー・ミトラ正大師の最期

わたしはそのとき、青山道場の一階のマハーポーシャで仕事をしていたんですが、警備のサマナの一人が、血相を変えて飛び込んできたので、とっさに外に出ました。というのは、マンジュシュリー正大師が、いつもなら警備に守られながら車から出てこられるのに、その日に限って車からすっと一人で降りられたんです。

わたしが飛び出したときには、マンジュシュリー正大師は地下のアンタカラの方の階段から上がって来られたところでした。階段から出られた瞬間に報道陣と野次馬とに囲まれてしまって、そのままずるずると押されていく感じだったので、われわれも急いで、「すいません、どいてください」と人ごみをかき分けて行って、やっ

とのことで正大師のところにたどり着き、いったん道を開けることができました。ああ、これで通れるなあと、ちょっと安心したすきに犯人がやってきて——人ごみをかき分けるようにしてやってきて——そのときわたしには彼が正大師に殴りかかったようにしか見えませんでした。正大師はわたしの左前にいらっしゃって、わたしには刃物は見えなかったんです。ですから、てっきり殴りかかっていると思って、すぐに犯人のボディーをつかんで引き離したんです。それで、犯人はいったん正大師から離れました。

犯人は、正大師を三度刺しています。一発目は空振りでした。二発目は、左腕をかすめました——それがちょうど、わたしが犯人を引き離した時です。そのときには、マンジュシュリー正大師も——四つの記憶修習の現象化（四念処）が身についていらっしゃる方なので——全く動揺なく、「あ、切れちゃったよ」という感じの、余裕のある態度を取られていました。そして、マンジュシュリー正大師が切られた腕を見たあとに、とどめの一撃が入ったんです。

わたしは犯人のボディーを押さえていましたが、刃物を持っているとは思ってい

ませんでしたから、手は自由なままになっていたんです。しかも、犯人と正大師との間が少し開いていたのですが、犯人が正大師の方に詰め寄ったとき、彼は体格が非常にがっしりしていたので、わたしは引っ張られるようなかたちになってしまって、止めることができませんでした。

三発目が入ったあと、犯人は正大師から一メートルくらい引き離されました。そこで刃物をぐるっと回しました。わたしからはまだそれは見えなかったのですが、周りにたかっていた人々はそれを見てダーッと逃げていきました。「キャー」という悲鳴と「チャリン」という音が聞こえました。

わたしはそのときに犯人が放り出したものを見て初めて刃物であることに気づきました。マンジュシュリー正大師を見たら、クルタにばーっと血が広がっていて、もう一度刃物を見て、「アーッ、刃物だ」と実感したんです。

犯人は、すごく落ち着いていて、我々に対しては全く刃物を振り回したりしませんでした。彼が攻撃したのはマンジュシュリー正大師だけで、彼の体をつかんでいたわたしに対して暴力を振るったわけでもありませんでした。完全にプロだと思い

ましたね。

ところが、しばらくはだれ一人犯人を取り押さえようとする人はいませんでした。それは、何が起こったかわからないという感じではありませんでした。——豊田商事の事件のときと同じように、ただスクープを見たい、見せたいというマスコミの体質ですね。「あいつをつかまえろ」とか「おまえ、ちょっと待て」とか、そういう言葉が全く出ないんです。あれだけの人間がいて。それどころか、犯人は堂々とその人ごみの中に入っていったのですから。目の前で人が刺されていて、——ドラマの撮影じゃないんですよ——その犯人が目の前にいるにもかかわらず、報道陣も野次馬の一般人も何のリアクションもないんです。犯人を押さえようという動きは全くなかった。それで「何を考えてんだ！」とわたしはどなったんです。

やっと、背広の人——公安警察官でしょうね——が近寄ってきて、犯人も何の抵抗もせずに捕まりました。手錠さえかけずに。「はい、終わりましたよ。あとは予定どおりやってください」っていう感じでした。

犯人が連行されるのを見て、報道陣もわーっとそちらに群がっていきました。

「一つの場面が終わった、じゃ、次」っていうようなものです。目の前に見ているものに対して現実感を伴って気づいていないという感じです。

実は、あの事件の二、三日前から、マイトレーヤ正大師、マンジュシュリー正大師、アパーヤジャハ正悟師が出入りされるたびに、青山のビルの前は異常な状態でした。

例えば、マンジュシュリー正大師がちょっと話をしに戻られると、もうそれだけで、テレビカメラのレンズが割れてしまうんですよ、車に行く間に。それが二、三回あったと思います。あるときには、その割れたレンズをアパーヤジャハ正悟師にぶつけようとしている人までいたんです。

あの日も、刺される直前に女性レポーターが正大師にインタビューしていて、それに対して正大師が、「大丈夫ですか」っておっしゃっていました。

ところで、正大師の様子なんですが、余りにも気丈な様子でいらっしゃったので、わたしはそれほど重傷だとは思いませんでした。ところが、ドアを開けて中のエレベーターの前まで行かれたときには、傷口からビュービュー吹き出ていたんです、

血が。それまでは、ぽた、ぽた、というほどの出血だったので、警備のサマナが「横になってください」と正大師にお願いしているのは、けがをしているから横になってもらっているんだと思っていたのですが、実際はかなりの重傷だったんですね。

（マハーポーシャのサマナM君）

四月二十三日午後八時三十五分ごろ、南青山東京総本部道場を囲む異常な雰囲気の中で起こったマンジュシュリー・ミトラ正大師の刺殺。

「救急車を呼べ！」という叫び声。「マンジュシュリー正大師、頑張ってください！」と呼びかける者、傷口を押さえて止血しようとする者、涙を浮かべながら祈る者、その様子に群がる報道陣のカメラ、マイクを握って興奮した声で状況をリポートするアナウンサー……。周囲は騒然となる。

ビルの内側から警備として正大師の方へ行こうとしたわたしは、ものすごい人垣の後ろになってしまって、犯人が正大師を刺すのを防ぐどころか、それを見ること

もできませんでした。犯人が正大師を刺して後ろへ引き、報道陣も一気に後ろに引き下がってやっとそばにいくことができたのです。

正大師は刺されたところに手を当てていらっしゃって、犯人は一メートルくらい離れたところで右手に洋包丁を持って立っていました。一瞬何が起こったのか全然わかりませんでした。

正大師はみるみる顔色が青くなり、多少苦しそうな顔をされて、傷のところを抑えてほとんど倒れそうな状態で、ドアを押して中に入ろうとされていました。警備のサマナたちが正大師を抱えるようにしながら、「お願いですから横になってください」と言うと、ドアのところに倒れるように横になられました。それまではまだ、ぽた、ぽた、と周りに落ちている程度だった血が、そのときには一面に散るような状態でした。

（警備のサマナH君）

「マンジュシュリー正大師が刺された」という叫び声に驚いて二階から降りてきたK君は、混乱している人々の中に医師や応急処置を知っている人がいないか尋ね

たが、だれも名乗り出なかったため、自分でマンジュシュリー・ミトラ正大師の傷口を押さえ続けた。

救急車が到着するまで、わたしがずっと傷口を押さえていたんです。本当は、わたしが触れているだけでも正大師にとってはエネルギーロスになるのでしょうけれど、出血をそのままにしておくわけにもいかなかったので。すると、正大師からエネルギーが流れてきて、周りがすごく混乱しているにもかかわらず、どんどん冷静になっていくんです。次に何をしなければならないかということを冷静に考えることができるんですね。正大師の心の平安さがわたしの中に流れ込んできたのだと思うのですが、あのような傷を負われても心の平安を保てる正大師のステージはすごいと思いました。

（K君）

三階でテレビ番組に出演中だったマイトレーヤ正大師もかけつけ、救急車に同乗して病院に向かった。

救急車の中にはわたしのほかに二人の救急隊員がいました。救急隊員は止血のための救急処置をとろうとしているようでした。マンジュシュリー正大師は酸素マスクのような簡単な装置をつけられていました。その時点では、マンジュシュリー正大師はまだ足を動かしたり、手や肘を曲げて動かしたりすることはできていました。救急隊員の「村井さん、聞こえる？　村井さん、聞こえる？」という呼びかけに対して、あまり明確ではないにせよ、何度かに一度は答えていました。本人には周りの言っていることは全部聞こえてはいたけれど、声を出して反応する力がなかったのかもしれないと思いますね。

彼が少し肘を曲げて何か訴えようとするので、よく聞いてみると、「～にやられた（これが、記者会見で言った『ある大きな力にやられた』という言葉です）」と言っていました。救急隊員の方も、それを確かに――何と言ったかはよく聞き取れなかったようですが――聞いていました。わたしには、はっきりと聞き取れました。

「出血はちょっと多いけど、大丈夫だからがんばろう」、「尊師を意識してできるだけ生命エネルギーを強めよう」とわたしが声をかけたところ、マンジュシュリー

正大師はこっくりとうなずいていました。

（マイトレーヤ正大師）

やがて、救急車は恵比寿の都立広尾病院に到着、マンジュシュリー・ミトラ正大師は第一処置室に運び込まれた。

病院ではアパーヤジャハ正悟師が、手術室に音楽のテープを流させてほしいと頼んだ。オウム真理教では、危篤状態に陥っていて、「助かる見込みは一パーセントもない」と医師にさじを投げられていた信者に、尊師が歌われている歌のテープを聞かせ続けることで奇跡的な回復が得られた例がある。また、尊師の声を流すことで、空間のエネルギー――これは修行者にとっては肉体のエネルギーよりも大切なものである――を良くし、命に関わるような傷を負ったマンジュシュリー・ミトラ正大師の負担を軽くすることができるのである。しかし、残念ながらこれは断わられてしまった。

最初に内科医の医師から、「出血多量。血圧が低く危篤状態」との報告があった。その後に輸血の話があったので、「病院に信者を呼ぶから、ぜひ信者の血を使って

ほしい」旨をマイトレーヤ正大師が伝えたところ、「日赤から持ってきている血液だけでは全然足りない。生の血を使う場合には合併症が起こるかもしれないが、それでもいいか」と言われた。「それでもいいから、信者の血も使わせてください」と、救急車を追って病院に到着していた信者から、マンジュシュリー・ミトラ正大師と同じA型の人の輸血作業が始まった。

十一時を過ぎてから、外科の医師から詳しい報告があった。手術室に運ばれる前にすでに意識不明の重体だった。手術室に運ばれたあと、手術した。負傷している場所は左の前腕——これはあまり大したことはなく、比較的軽い刺し傷——、そしてひどかったのが、右のわき腹。この刺し傷が深く、肝臓・腎臓、そして下大静脈を切断していて、そこから大出血している。急性循環不全と急性DICという症候群を起こしており、極めて重篤な状態、という内容だった。

その段階で信者の血液も含め、一三〇〇〇cc、通常の人体の二・六倍の血液がすでに輸血されていた。しかし、輸血してもそれが出血し続けているという状態だったため、出家修行者の輸血が続けられた。エネルギーのロスを少しでも防ぐため、

輸血はできるだけステージが高い方から順番に行なわれた。

それからさらに一時間ほど経ったころ、一応手術を終えた医師がマイトレーヤ正大師と、アパーヤジャハ正悟師を呼んだ。「今心臓マッサージをしながら、心臓を動かしているだけの状態ですから、お二人には早めにその姿を看取ってください」と。

行ってみると、マンジュシュリー正大師は、すでに目も見開いたままで、瞳孔拡大しているような状態でした。心臓マッサージによって機械的に体だけが「ドンドン」と、強制的に上下していました。このときにはおそらく駄目だろうなと思いました。医師に尋ねても、「この状態から回復する前例はない。頑張ったけど駄目だった」ということでした。

（マイトレーヤ正大師）

その後、治療室を出た二人は、最終的には四月二十四日二時三十三分にマンジュシュリー・ミトラ正大師が死亡したという報告を受けた。

警察側は、すぐにでも正大師の死体を司法解剖（検死）にまわしてほしいと申し入れた。しかしそのとき、正大師に近い法友たちが駆けつけている最中だったため、到着するまで待ってもらえるように交渉が行なわれ、願いが聞き入れられた。

五時ごろにマンジュシュリー・ミトラ正大師に近かった人々――尊師のお子さん三人（アジタナーター・ウマー・パールヴァティー・アーチャリー正大師、アジタナーター・ドルガー、それからアジタナーター・カーリー）とウッパラヴァンナー正悟師、キサーゴータミー正悟師、ヴァジラティクシュナ正悟師が病院に到着した。古くから彼とともに修行をしてきた法友たちだ。そのときマンジュシュリー・ミトラ正大師は、すでに白い布にくるまれて座敷に横たえられていたのだが、その周りで三十分ほど瞑想し、顔も確認して、その後、遺体は警察の司法解剖に送られた。

救急車にも同乗し、マンジュシュリー・ミトラ正大師の最期を看取ったマイトレーヤ正大師は、次のように語っている。

マンジュシュリー正大師が「～にやられた」と言ったとき、「わたしは潔白だ」

とつぶやいたとき、そして「生命エネルギーを強めよう」というわたしの言葉に対してうなずいたとき、——救急車の中で彼と交わした会話はその三つだったのですが、そのやりとりはかなりはっきりしていて、意思疎通がしっかりとできていました。あれほどの傷を負って大量に出血し、ひどい状態であったにもかかわらず、きちんと会話が成立していたのは、やはり相当ショックに強いのだと思いました。普通の人だったら、意識が飛んでしまっているでしょうから。肉体が正常な状態でなくても、それどころか停止に近づいていても、あれほどの意識を保てるのはステージの高い修行者ならではだと思います。

病院に着いた時点では、彼は助かるのではないかとわたしは思っていました。確かに傷の状態はひどかったけれど、意識は保っている。この状態から医療行為を施されたならば、いい方向に転換するだろうと。しかし、治療が始まってからはやはり、少しいやな予感がしてきました。彼に意識を合わせようとすると、気が抜けるような、気が下がってしまうような感じがし始めたからです。

マンジュシュリー正大師はステージが非常に高い修行者でした。そのような修行

者に完璧なエネルギー状態で輸血や治療を行なうことを考えるならば、ＡＨＩへ連れていきたかったですね。

＊　＊　＊

二十四日午後、マスコミに対して次のような文書が配布された。

四月二十四日、午前二時三十三分。オウム真理教科学部門の責任者である村井秀夫は、前日夜に右脇腹に受けた傷によって死亡いたしました。犯行者は、村井と個人的関係はありません。よって、一部に報道されたとおり、テレビ等の報道を見て影響を受けた犯行者が、オウム真理教幹部の殺害を行なった可能性が高いといわざるを得ません。

公式発表が少ない一方、警察からは非公式にリークされる情報、十分な裏付けに基づかないマスコミの情報、微罪による多くの逮捕等によって、オウム真理教は事

実に反し、狂信的な殺人集団というレッテルを貼られ、村井本人がまだ取り調べも、逮捕も、起訴も何も受けていないにもかかわらず、村井なら殺していい、麻原なら殺していい、というイメージを作り上げるに至ったのではないでしょうか。

そして、犯行現場においても同様に、異常なまでに多い報道陣の陰に隠れた犯行者が、村井を尾行する多くの公安警察官がいたにもかかわらず、殺害に成功したのです。

もしかすると犯行者の背景にはもっと大きな力があるかもしれませんが、今現在はわたしたちには何もわかりません。

しかし、わたしたちは、今回の件について、犯行者個人に対しても、そしてその犯行の背景にあるかもしれないものに対しても、何ら憎しみを抱いてはおりません。ただ、今までなされた様々な偏見、行き過ぎ、といったものが是正されることのみを望んでおります。

なぜならわたしたちは仏教徒であり、すべての衆生に哀れみを持てといわれる仏陀の教えを実践しているからです。

麻原尊師がわたしたちにお説きになった、「憎しみは憎しみによっては終わらない。愛によってのみ終わる」という仏陀の言葉があります。わたしたちはこれまでどおり、この仏陀の教えを実践し、日本の国民の皆さんに、わたしたちが決して殺人者の集団ではなく、仏教徒の団体であることを理解していただきたいと思います。

救急車で運ばれるもうろうとする意識の中で、村井は「わたしは潔白だ」とつぶやいておりました。

どうか、村井の死がムダになりませんように。わたしたちの愛の実践が、パニックとも呼べる現在の日本人の心を静めますように。そして、日本にあまねく、仏陀の慈悲と智慧が与えられますように。そして真理が明らかになりますように。

# カセット内容のご紹介

【A面】

## ●「批判に揺るがない本物の価値」

——麻原尊師説法より

（一九九一年二月十五日　於：高知支部）

## ●「マンジュシュリー・ミトラは量子力学を超えられるか」

——麻原尊師がマンジュシュリー・ミトラ正大師のアストラル（潜在意識）世界を表現した音楽

作曲：真理の御魂 最聖 麻原彰晃尊師（一九九二年）

## ●「絶対の真理」

——麻原尊師説法より

（一九九一年二月九日　於：仙台支部）

【B面】

## ●「大乗の菩薩の誕生」

——麻原尊師祝福の言葉より

（一九九四年八月十日　於：大乗のヨーガ成就式典）

## ●「味覚の歌」

——アニメ&ダンスオペレッタ「創世期」より

作詞・作曲：真理の御魂 最聖 麻原彰晃尊師

歌：マンジュシュリー・ミトラ正悟師（一九九一年）

## ●「素晴らしき真理」

——マンジュシュリー・ミトラ正悟師感謝の言葉

（一九九〇年八月四日　於：マハームドラー成就式典）

# 「批判に揺るがない本物の価値」

## ――麻原尊師説法より

（一九九一年二月十五日　於：高知支部）

ここに大変うまい手作りのバッグ屋がいた。この手作りのバッグ屋が作ったバッグは、なかなか壊れることなく、そしてその品格は持つ者のみが理解できる、そういう大変重みのあるバッグであった。このバッグに対して、周りが、

「お前の持ってるバッグは偽物だ。お前の持ってるバッグは価値がない」

と批判をした。

同じように、ここに大変優秀な腕を持った医者がいた。この医者は、来た患者を安らがせ、そして病を治すことができた。この医者を周りが誹謗し、

「あそこの病院に行っても、病気は治らない。あそこの病院に行っても、悪くなるだけだ。あいつはインチキだ」

と批判をした。

このバッグ屋にしろ、あるいは医者にしろ、その価値のある者にとっては、その価値を理解できる者にとっては、いかに周りが非難し

ようとも、全く価値が変わるものではない。

同じように、このオウム真理教の価値も、いかに権力が叩こうとも、その価値に変化が出るものではない。

では、なぜオウム真理教が、この日本で大きくなっては困るんだろうか。それはそうである。現体制の権力は、要するに物質、お金といったもので国民を縛り、そしてがんじがらめにし、自分たちのしもべとして、手足として使いたがっている。しかし、国民一人一人は、本来、心に備わっている、自由・幸福・歓喜をどこかで求めている。この間には、大きなギャップがある。

ところが、オウム真理教の教えは、その絶対的な自由・絶対的な幸福・絶対的な歓喜、つまり真我へと帰る道筋、これを教える日本における唯一の宗教だから、この教えに傾倒し、本当に実践を始めるならば、心が洗われ、そして現権力からの脱却を図ろうと心がそれに向かい、現代の価値観を超越した意識状態へと導かれるから、権力にとっては大変「怖い」ものなのである。

もともと宗教というものは、権力に対して迎合する必要もないし、あるいは権力に依拠する必要もない。つまり全く独立の関係で宗教は成立しているはずなのである。

ところで、この価値観は、つまり皆さんを絶対的に幸福・自由・歓喜へと導くこの価値

観は、わたしの生きている限り、絶対にねじ曲げることは——たとえオウム真理教がつぶされたとしても——絶対にねじ曲げることはしないと考えています。

## 「絶対の真理」
### ——麻原尊師説法より

（一九九一年二月九日　於：仙台支部）

人は死ぬ、必ず死ぬ、絶対死ぬ、死は避けられない。

この日本仏教において生だけを見つめさせ、生において、つまり生きるっていうことにおいての幸福だけを説きます。しかし、この生きる期間はあまりにも短すぎる。そしてあまりにもはかなすぎる。わたしたちのターゲットはこの世だけではなく死、死を境とした来世をしっかりと見つめ、それを超え、確信をもって輪廻転生したいものです。

# 「大乗の菩薩の誕生」
## ――麻原尊師祝福の言葉より

（一九九四年八月十日　於：大乗のヨーガ成就式典）

さあマンジュシュリー・ミトラ。君はやっと大乗の一歩を踏み出すことができた。やっと神の領域に入ることができた。これから神々の王として、そしてすべての魂を済度する偉大な大海の四無量心（しむりょうしん）を有するボーディサットヴァとして、生まれ変わりを繰り返し、すべての魂を済度してもらいたいものである。

偉大なる、完全なる、絶対なるシヴァ大神に帰依（きえ）し奉ります。すべての真理勝者方に帰依し奉ります。すべての弟子たちが、そして未来においてわたしの弟子になるすべての弟子たちが、マンジュシュリーの有する徳、その徳を備えることができますように。

# 「味覚の歌」（アニメ&ダンスオペレッタ『創世期』より）

作詞・作曲：真理の御魂 最聖 麻原彰晃尊師／歌：マンジュシュリー・ミトラ正悟師　（一九九一年）

この美しい世界は黄色だ
この無臭の世界が甘くなり
神聖世界を揺るがして
衆生の心かき乱す
この神聖世界は黄色だ
この無臭の世界はおいしい
神聖衆生を揺るがして
神聖衆生を苦しめる
味覚の記憶が戻ったら
神聖衆生落っこちる
地の味が水中に固まり
蜂蜜のような味覚があり
苦しみの因生ず

貪り強い衆生が現われ
この地の味をちぎり貪る
多くの衆生が巻き込まれ
神聖世界かき乱れ
衆生はこれで光をなくし
粗雑なものが身に現われる
綺麗さ醜さ現われる
差別の心現われる

光をなくした衆生は
神聖世界まっさかさ
味覚は衆生を楽しませる

味覚は衆生を下向させる
苦と味著（みじゃく）は表裏

## 「素晴らしき真理」
### ――マンジュシュリー・ミトラ正悟師感謝の言葉

（一九九〇年八月四日　於：マハームドラー成就式典）

修行することの素晴らしさ。帰依することの素晴らしさ。身・口・意の悪業を滅し、善業を積むことの素晴らしさ。持戒を守ることの素晴らしさ。自己の限界を越え努力することの素晴らしさ。瞑想し智慧の光を得ることの素晴らしさ。自己の煩悩を滅し、解脱することの素晴らしさ。不死を得ることの素晴らしさ。一本の光り輝く真理の道を歩くことの素晴らしさ。一人でも多くの人に真理の道を歩いてもらう素晴らしさ。このようなたくさんの素晴らしい真理を与えてくださった、かけがえのないグル麻原尊師に感謝し、帰依いたします。そして、わたしは未来際にわたって、自己の永遠の目標として、尊師についていきたいと思います。

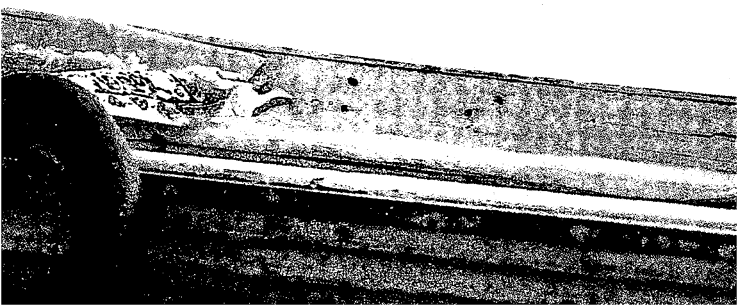
# 本物の実感！

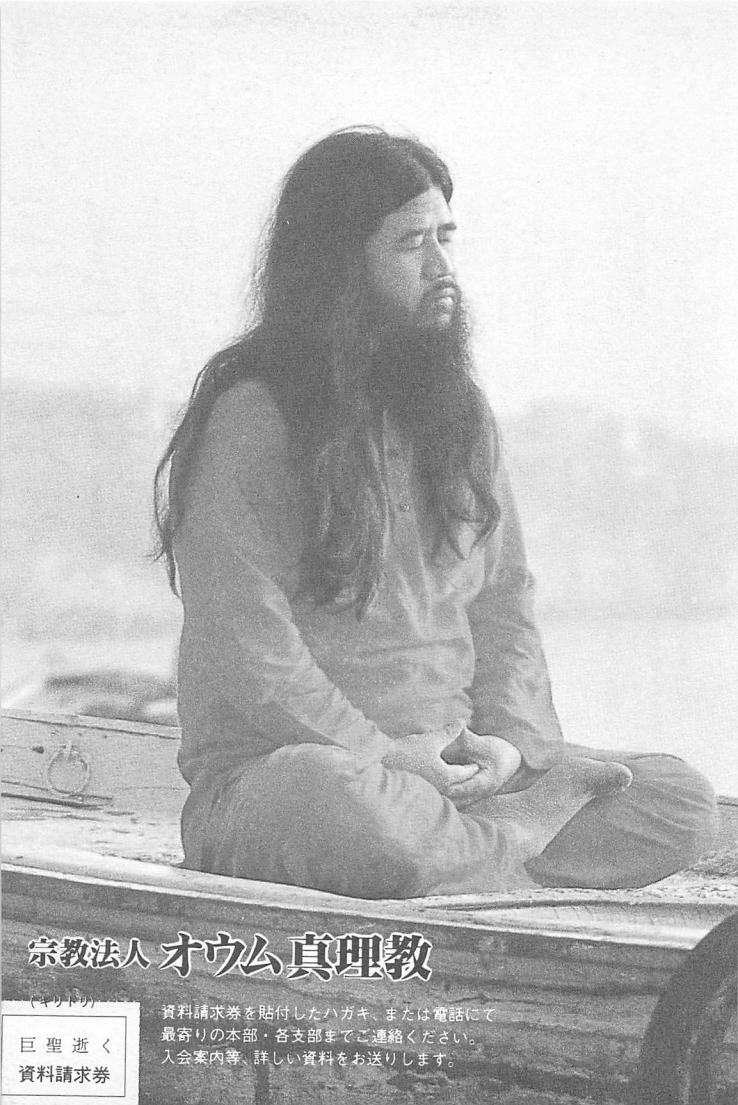
## 集え！千年王国のために……

日々の生活に流され
本当に求める人生を
忘れていませんか。

世界でただ一人の最終解脱者
真理の御魂
最聖 麻原彰晃尊師が説き明かす
真実の法則が
本当の自由・幸福へと
あなたをいざないます。

新しい世界が
今まさに始まろうとしている
この時代に
新人類へと
進化の道を尊師と共に
歩んで……





# 宗教法人 オウム真理教

(キリトリ)

巨聖逝く
資料請求券

資料請求券を貼付したハガキ、または電話にて
最寄りの本部・各支部までご連絡ください。
入会案内等、詳しい資料をお送りします。

# 仏陀の智慧が光を放ち混迷の時代を照射する

INITIATION

# イニシエーション

## 真理の御魂（みたま）最聖 麻原彰晃尊師 著

## この名著はすべてを語っていた！

「解脱」「悟り」のプロセスを細やかに説き明かし、最高の修行法を伝授する。

本来、選ばれた弟子にのみ明かされる秘儀――ヨーガ・仏教の奥儀を極めた修行の正しさは、誕生した三五〇名の解脱者が証明する。

さらに、自民党の大勝と大敗、円高の進行、農作物輸入自由化など、今日の世界と日本の動向を正確に予言している、驚くべき記述の数々！

◎「解脱」「悟り」の真実／現代の仏陀麻原彰晃が最高の修行法を公開。

◎タントラ・イニシエーションの全貌／チベット密教・ゲールク派とオウム真理教の秘儀を比較する。

◎確実に核戦争だ！／日本と世界の近未来を予言する。

◎総勢三十一名の体験談／「クンダリニーが覚醒する」「過去世が甦る」「悟りのプロセス」など、これが修行プロセスと霊的ステージの真実だ。

武田 健さん（東京都 学生）
「未法の時代は終わった」ということを確実に感じさせる本である。

松岡謙次さん（愛媛県／整備員）
読めば読むほど、「頑張ろう、やるぞ」と思わせるような素晴らしい本です。

山本 勇さん（石川県／会社員）
解脱するまでの心の状態が、多くの例を挙げてわかりやすく書いてある。

大森恵子さん（山口県／店員）
他の書では得られない絶対なる真理に触れることができた。

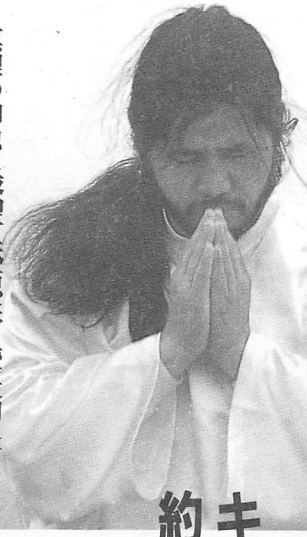
武田蓁子さん（熊本県／主婦）
「人間として最高の、最終の目的は何か」ということがはっきり示されています。

本間智加子さん（東京都 経理事務）
宗教に対する偏見がいっぺんに吹き飛んでしまいました。

定価2163円 ご注文は書店にてお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は下記まで。
オウム出版 〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 電話03(3439)6043 郵便振替 東京2-109325

絶対幸福の鍵を解く!!

# 生死を超える（改訂三版）



真理の御魂　最聖　麻原彰晃尊師　著

B六判　三二〇ページ／定価　一八〇〇円（税込）

## キミの解脱は約束された!!

修行の道は長く、険しい。
だが、ここにそれを乗り越えて、
最終地点に到達した一人の聖者がいる。
生と死のすべてを知りつくし
絶対自由・絶対幸福の
境地を得た一つの魂がいる。

真理の御魂　最聖　麻原彰晃尊師が
自らの実体験をもとに真理を説く。
解脱とは何か……、
仏陀釈迦牟尼の遺した
膨大な法則の真実は……
すべてを今、明らかに。

オウム出版

〒154　東京都世田谷区世田谷２-８-17／TEL　03（3439）6043／郵便振替　東京２-109325

九日前に予言されていた阪神大震災！
――それは世紀末の日本に襲いかかる、
数々の恐怖と惨劇のプロローグにすぎない。
想像を絶する規模で忍び寄る戦慄の世紀末！
次に日本を襲うのは……？
この空前の危機が
あなたを呑み込もうとしている！

『報道写真全記録 阪神大震災』朝日新聞社

緊急出版！

## 日出づる国、災い近し

真理の御魂 最聖 麻原彰晃尊師著

B6版／定価1285円（税込み）

『日出づる国、災い近し』それは、正確な近未来予言と、科学と神秘力に裏づけられた確固たる対処法が記されている秘密の書。

全国の書店で絶賛発売中！

オウム出版　〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17　TEL.03(3439)6043 振替／東京2-109325

# 真理の御魂（みたま） 最聖 麻原彰晃尊師、ついに沈黙を破る。

あなたは麻原尊師を、

オウム真理教を、

そして日本の現状と未来の行方を、

まだこれっぽっちも知らない……。

全国の書店で絶賛発売中！

全国民が注目する、
真理の御魂 最聖 麻原彰晃尊師
久々の書き下ろしメッセージ。

迷妄の魂よ、大悪業の恐怖を知れ

## 亡国日本の悲しみ

真理の御魂 最聖 麻原彰晃尊師著

B6判　定価1190円（税込み）　ISBN4-87142-114-7

オウム出版
〒154　東京都世田谷区世田谷2-8-17　TEL.03（3439）6043　郵便振替／東京2-109325

京都支部　075 (371) 3759
〒600　京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F
大阪支部　06 (251) 4264
〒541　大阪府大阪市中央区久太郎町3-2-15 マルイビル2F
堺支部　0722 (21) 1843
〒590　大阪府堺市海山町4-168-9
和歌山支部　0734 (24) 2859
〒640　和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F
広島支部　082 (264) 7252
〒732　広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
高知支部　0888 (84) 8286
〒780　高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
福岡支部　092 (474) 2877
〒812　福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
那覇支部　098 (866) 9537
〒902　沖縄県那覇市安里2-4-12 嘉数グラビアハイツ5F
深谷出張所　0485 (74) 8143
〒366　埼玉県深谷市萱場441-8

〈海外支部〉
ニューヨーク支部　212 (421) 3687
8 East 48th St.#2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部　(0228) 616647
Auf dem Hügel 48, 53121 Bonn, S.R.Germany
スリランカ支部 (AUM SACCA SAṄGHA ASSOCIATION)
Horahena, Watte, Angulugaha, Galle, Sri Lanka

この本をお読みになって、どのような感想をお持ちになりましたか。あなたのご意見を、ぜひ下記の「『巨聖逝く』読者係」までお送りください。

〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17
オウム出版 『巨聖逝く』読者係

**◆各道場のご案内◆**

**富士山総本部**
〒418-01 静岡県富士宮市人穴381-1
**東京総本部** 03 (5467) 2745
〒107 東京都港区南青山7-5-12 マハーポーシャビル2,3F
**世田谷道場** 03 (3327) 8565
〒156 東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
**杉並道場** 03 (3396) 9393
〒167 東京都杉並区下井草4-4-4 井口ビル2F
**札幌支部** 011 (241) 4938
〒060 北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
**仙台支部** 022 (268) 3904
〒982 宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
**水戸支部** 029 (226) 8044
〒310 茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F
**高崎支部** 0273 (46) 1573
〒370-12 群馬県高崎市倉賀野町下稲荷前1081-5
**船橋支部** 0474 (66) 4965
〒274 千葉県船橋市新高根6-26-18
**横浜支部** 045 (243) 8079
〒231 神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢佐木長者町ビル204
**藤枝支部** 0546 (46) 2068
〒426 静岡県藤枝市築地堤下11-5
**松本支部** 0263 (28) 7429
〒399 長野県松本市芳川野溝527-3
**名古屋支部** 052 (252) 0709
〒460 愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
**金沢支部** 0762 (51) 8457
〒920 石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F
**福井支部** 0776 (26) 6145
〒910 福井県福井市御幸3-3-41 東伸ビル2F

巨聖逝く

一九九五年六月八日　初版

定価　二〇〇〇円（テープとも）
著者　AUM PRES
発行者　松本知子
　　石井久子
発行所　株式会社 オウム
〒一五四　東京都世田谷区世田谷二一八一一七
電話　〇三（三四三九）六〇四三
振替　東京二一一〇九三二五

乱丁・落丁がありましたらお取り替えいたします。

©AUM Editorial Staff 1995
ISBN4-87142-115-5　C0014　P2000E